

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第28冊

鹿田遺跡 7

— 第10次調査、第18次調査B・C地点 —

(医学部共同溝・岡山大学病院中央診療棟建設に伴う発掘調査)

2013年

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

岡山大学鹿田キャンパスは、東西400メートル、南北450メートルに満たない範囲に、岡山大学病院および医学部・歯学部などの建物がひしめいており、新しい医療の推進のために、日々建物の更新が行われています。今回の報告は、医学部共同溝の新営や岡山大学病院中央診療棟建設に関連して、キャンパスの東端の南寄りにあたる位置で実施された、比較的小規模な4つの地点における発掘調査の成果をまとめたもので、鹿田遺跡の南東縁辺部の様相を知ることができる資料となります。

そのうちの第18次調査B地点は、6×7.5メートルという狭い範囲ですが、平安時代中頃の井戸や土坑と、江戸時代の入り江状遺構が確認され、井戸からは全国でも最古級の動物形操り人形である、猫形木製品が出土しました。調査時には、木の瘤^{こぶ}を加工した丸い木製品であるという認識でしたが、整理の過程で顔のようなものであることに気づき、以前に出土した猿形木製品の類例調査で鎌倉市円覚寺門前遺跡出土の「山猫木偶」を実見していた調査員が、猫の操り人形の頭部であることを確認しました。

「傀儡^{かいらい}政権」などの言葉の元となった傀儡^{くぐつ}は、古くは神の依り代である神人形を操ったものでしたが、やがて漂泊の芸能者集団に姿を変えていったとされています。今回出土した猫形木製品はそうした傀儡の操り人形と推定されますが、ちょうど芸能者集団に姿を変える過渡期にあっており、本遺跡において井戸廃絶時の祭祀にかかわる状況で出土したことは、当時の傀儡の実態を知る上で興味深い資料となるものと思われます。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長（理事）

門 岡 裕 一

副センター長（大学院社会文化科学研究科 教授）

新 納 泉

目 次

第1章 歴史的・地理的環境	(野崎貴博・岩崎志保)	1
第1節 遺跡の位置と周辺遺跡		1
第2節 鹿田遺跡		4
1. 構内座標の設定		4
2. 鹿田遺跡の調査概要		4
第2章 第10次調査	(野崎貴博)	8
第1節 調査の経過と概要		8
1. 調査地点の位置		8
2. 経緯と経過		8
3. 調査と報告書作成体制		8
4. 調査の概要		9
第2節 A地点の調査		10
1. 層序		10
2. 遺構・遺物		11
(1) 弥生時代		11
(2) 室町時代		11
(3) 江戸時代		12
第3節 B地点の調査		13
1. 層序		13
2. 遺構・遺物		15
(1) 平安時代の杭群		15
(2) 河道出土遺物	(岩崎志保)	19
(3) 包含層出土遺物		20
第3章 第18次調査B・C地点		21
第1節 調査の経過と概要	(光本 順・野崎貴博)	21
1. 経緯と経過		21
2. 調査と報告書作成体制		22
3. 調査の概要		23
第2節 B地点の調査	(光本 順)	24
1. 層序		24
2. 遺構・遺物		26
(1) 平安時代		26
a. 井戸		26
b. 土坑		30
(2) 江戸・明治時代		32
a. 入り江状遺構		32
第3節 C地点の調査	(野崎貴博)	39
1. 層序		39

2. 遺構・遺物	42
(1) 弥生時代	42
(2) 鎌倉時代	43
(3) 江戸時代	45
第4節 考察	47
1. 猫形木製品考	(光本 順) 47
第4章 自然科学的分析	52
1. 鹿田遺跡第10・14・18次調査出土木製品の樹種同定	(能城修一) 52
2. 鹿田遺跡第10次調査B地点出土人骨の同定	(橋本裕子) 59
第5章 結語	(岩崎志保) 60
写真図版	61

挿図目次

第1章		図22 井戸1出土遺物	29
図1 周辺遺跡分布図	2	図23 土坑1・2	31
図2 発掘調査地点と構内座標	5	図24 土坑2・出土遺物	32
第2章		図25 入り江状遺構検出状況	33
図3 調査地点の位置	8	図26 江戸・明治時代遺構全体図	34
図4 検出遺構全体図	10	図27 入り江状遺構出土遺物1	35
図5 A地点土層断面	10	図28 入り江状遺構出土遺物2・河道出土遺物1	36
図6 土坑1・出土遺物	11	図29 河道出土遺物2	37
図7 溝1・出土遺物	12	図30 河道出土遺物3	38
図8 B地点土層断面図(1)	14	図31 河道出土遺物4	39
図9 B地点土層断面図(2)	15	図32 土層断面(1)	40
図10 杭群検出状況	16	図33 土層断面(2)	41
図11 杭群構成材1	17	図34 弥生時代検出遺構全体図	41
図12 杭群構成材2	18	図35 土坑1	42
図13 河道出土遺物	20	図36 土坑2	42
図14 包含層出土遺物	20	図37 中世検出遺構全体図	43
第3章		図38 小溝群・溝1～3検出状況	43
図15 井戸の調査風景	21	図39 小溝群	43
図16 B地点検出遺構全体図	23	図40 溝1～3・溝2出土遺物	44
図17 C地点検出遺構全体図	23	図41 江戸時代検出遺構全体図	45
図18 土層断面の位置	24	図42 土坑3・4	46
図19 土層断面	25	図43 円覚寺門前例と鹿田例	48
図20 井戸1、土坑1・2	27	図44 井戸1の土層と出土遺物	50
図21 井戸1・土坑1出土遺物	28		

第4章

図45 鹿田遺跡第10・14・18次調査で 出土した木材の顕微鏡写真(1)	55	図47 鹿田遺跡第10・14・18次調査で 出土した木材の顕微鏡写真(3)	57
図46 鹿田遺跡第10・14・18次調査で 出土した木材の顕微鏡写真(2)	56	図48 鹿田遺跡第10・14・18次調査で 出土した木材の顕微鏡写真(4)	58
		図49 鹿田遺跡第10次調査B地点出土人骨	59

表 目 次

表1 杭群構成材〈南群〉一覧	19	表4 井戸1における祭祀の段階と出土遺物	50
表2 第18次調査B・C地点遺構一覧	24	表5 鹿田遺跡第10・14・18次B地点で 出土した木製品の樹種	54
表3 円覚寺門前例と鹿田例の比較	49		

写真図版目次

図版1 第10次調査 出土遺物 (土器・陶磁器ほか)	図版4 第18次調査B地点 出土遺物2 (土器・土製品・瓦・石器)
図版2 第10次調査 出土遺物2 (木製品)	図版5 第18次調査B地点 出土遺物3 (楕形木製品)
図版3 第18次調査B地点 出土遺物1 (土器・陶磁器ほか)	図版6 第18次調査B地点 出土遺物4 (河道出土木製品)

例言

1. 本書は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、医学部共同溝新営に伴って実施した鹿田遺跡第10次調査および岡山大学病院中央診療棟建設関連工事に伴う第18次調査B・C地点の発掘調査報告書である。両地点は、岡山市北区鹿田町2丁目5番1号に所在する。各調査地点の位置・調査期間・調査面積は下記の通りである。
 - 〈第10次調査〉A地点（CD・CE10～12区）1999年6月21日～7月6日 面積40.2㎡
 - B地点（DD～DF16～22区）1999年5月7日～20日、9月6日～10月14日 面積206.9㎡
 - 〈第18次調査〉B地点（CG～CI9・10区）2007年10月16日～11月1日 面積43.2㎡
 - C地点（CM～CN9・10区・CO10・11区）2007年12月27日～2008年1月16日 面積56㎡
2. 発掘調査は岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会・運営委員会の指導のもとに行われ、報告書作成に関しても運営委員会の指導を得た。委員・幹事諸氏に御礼申し上げる。
3. 本書作成にあたっては、木材の樹種同定を能城修一氏（森林総合研究所）に、人骨鑑定を橋本裕子氏（京都大学霊長類研究所）に依頼し玉稿を頂いた。また猫形木製品については加納克己氏に教示頂いた。猫形木製品のX線撮影では岡山大学大学院保健学科・丸山敏則氏の御協力を得た。記して感謝申し上げます。
4. 調査時の遺構実測・写真撮影は第10次調査は豊島直博、第18次調査は光本順・野崎貴博が行った。
5. 報告書作成にあたっての主な担当は以下の通りである。
 - 〈遺物〉実測・浄写・観察表：光本・野崎・山本悦世・西本尚美・岩崎志保
 - 写真：光本・野崎・山田佑生
 - 〈遺構〉光本・野崎・西本
6. 本書の執筆分担は目次に示した。
7. 編集は新納泉副センター長・山本悦世調査研究室長の指導のもとに第10次調査・18次調査C地点を野崎、第18次調査B地点を光本が担当し、全体編集は岩崎志保が行った。
8. 調査の概要は『岡山大学構内遺跡調査研究年報』17および『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2007』において一部報告しているが、本書をもって正式なものとする。
9. 本書で使用した地形図は、建設省国土地理院発行の1/25000の地形図「岡山北部」と「岡山南部」（平成6年発行）を合成して使用したものである。
10. 本書に掲載した調査の記録・出土遺物はすべて当センターで保管している。

凡例

1. 本書で用いる高度値は海拔標高であり、方位は国土座標第V座標系（世界測地系）の座標北である。
2. 遺物番号は、遺構別に番号を付すが、土製品にはT、石器にはS、木製品にはW、金属製品にはMをつけて調査次毎に通し番号とする。
3. 遺物に関するデータは観察表にまとめ、実測図と組み合わせて掲載している。
観察表の表記基準は下記の通りである。
 - ①内外面の色調を併記する場合は「内面／外面」の順で表示する。
 - ②胎土は微砂：砂粒径0.5mm未満、細砂：同0.5～1mm未満、粗砂：同1～2mm未満、細礫同2mm以上を基準とする。
 - ③法量は1/4以上残存の場合は復元した。残存値には*を付した。
 - ④木製品の表中の「OKUF」は樹種同定の資料番号にあたり、第4章第1節と対応する。
4. 遺構は挿図などで以下のように記号で種類を表記する場合がある。
井戸：SE 土坑：SK 溝：SD 柱穴：P
5. 土層注記では鉄分をFe、マンガンをMnで表記した。
6. 巻末図版の遺物番号は本文中の遺物番号に一致する。
7. 本文中の時期の表記について平安時代中頃～戦国時代を中世、江戸時代（1600年以降）を近世、明治～大正時代を近代と表していることがある。

第1章 歴史的・地理的環境

第1節 遺跡の位置と周辺遺跡

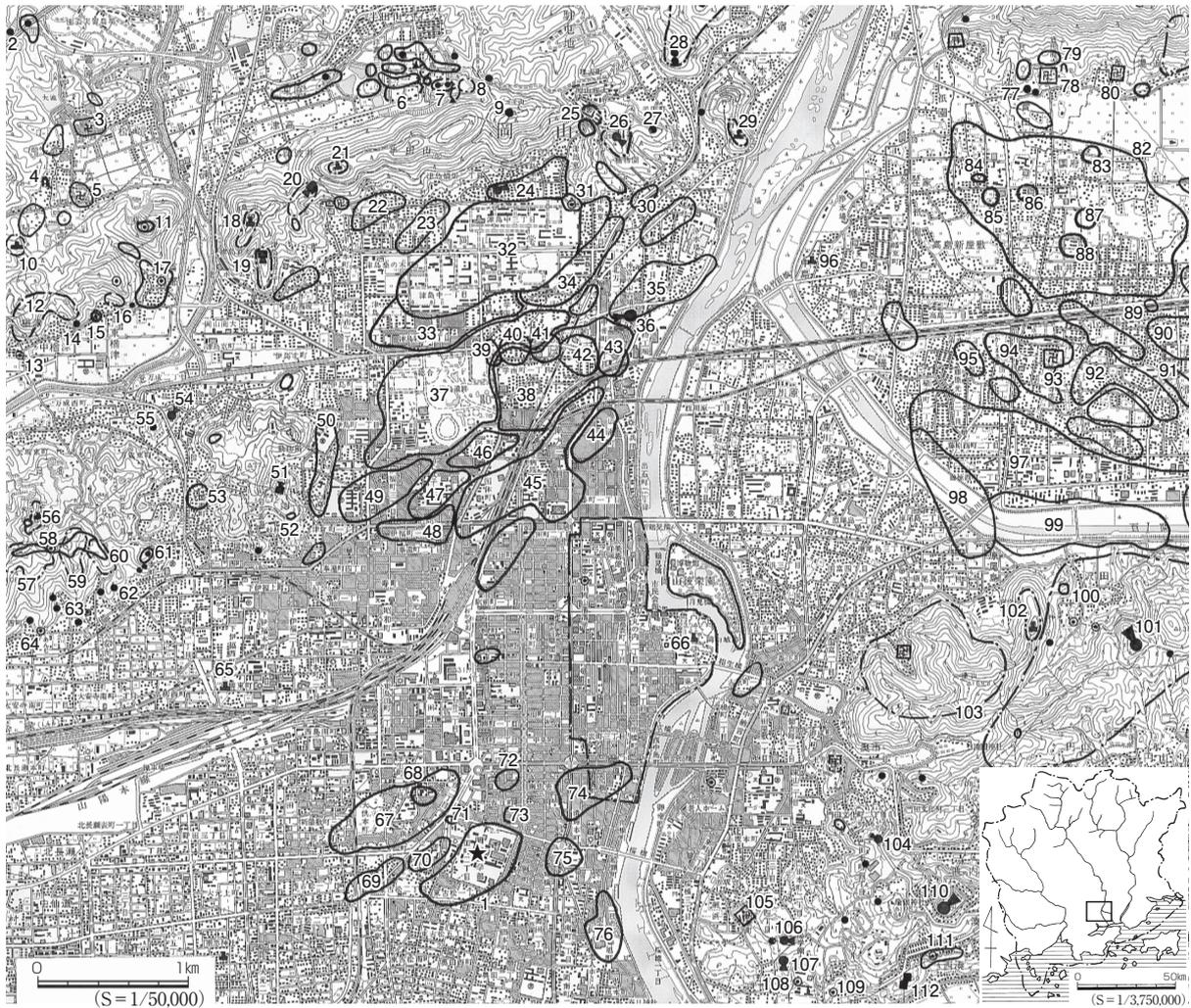
鹿田遺跡は岡山市街地南部に所在する岡山大学鹿田地区（岡山市北区鹿田町2丁目5番1号）のほぼ全域と、その周辺に広がりをもつ縄文時代～近世の複合遺跡である。鹿田遺跡が位置する岡山平野は、その中央を南流する旭川の堆積作用によって形成された沖積平野である。平野の周囲は半田山、龍ノ口山、操山など、標高150～250m前後の山塊によって囲われ、南は児島湾に面する。旭川は中国山地を開析しながら、狭い河谷を抜けて南流する。丘陵から平野へと遷る岡山市北区三野付近から、流れは幾筋もの小河川となり、その間に自然堤防と後背湿地が点在する複雑な地形を形成した。近世以降の大規模な干拓により平野は南へと拡大し、さらに現在では急速な市街地化も相俟って平野の古地形をうかがいしることは難しい。本遺跡は旭川の西岸約1km、児島湾からは北へ約7kmの位置にあるが、近世の干拓以前には瀬戸内海とは至近の位置にあった。

本遺跡の周辺で確認されている人間活動の痕跡は旧石器時代までさかのぼる。現在のところ、その証はわずかで、操山山塊でナイフ形石器や細石器が採集されているのみである⁽¹⁾。最終氷期が終わり、気候が温暖化に転じると、氷河の溶融に伴う海進が始まる。海進のピークは縄文時代前期頃であり、現在の岡山平野の広い範囲が水没したと考えられる。この時期、半田山の裾部には朝寝鼻貝塚が形成された⁽²⁾。その後、中期中頃には津島岡大遺跡において遺構・遺物が確認される。そして後期には津島岡大遺跡⁽³⁾、百間川沢田遺跡⁽⁴⁾などで住居址や貯蔵穴などの居住痕跡が認められる。いずれも半田山や操山の山裾部に近い微高地に限られた立地であり、沖積化の進行とともに形成されていく平野の大半ははまだ居住に適さない環境であったとみられる。そうしたなかで鹿田遺跡では中期前半から晩期の土器がわずかに確認されており⁽⁵⁾、狭小な高まりが点在していたことを窺わせる。

縄文時代の終わり頃、北部九州で受容された水稲農耕が列島各地へ伝えられるなか、瀬戸内地域では比較的早い段階に水稲農耕を受容している。岡山平野における水田遺構として、旭川西岸では弥生時代早期にさかのぼる可能性が指摘されている津島江道遺跡⁽⁶⁾、弥生時代前期の津島遺跡⁽⁷⁾とその一帯の遺跡群⁽⁸⁾、旭川東岸では百間川遺跡群⁽⁹⁾などがある。これらの調査成果から、前期にはかなり広範囲に水田が営まれていたことが明らかとなったが、現在までに集落が確認されているのは津島遺跡のみである。

その後、旭川西岸域では微高地上に新たな集落が出現し、平野の南へと展開していく。その背景には沖積化の進行により、居住可能な微高地が南へと広がったことが予想される。前期後半頃からの遺跡としては南方遺跡群⁽¹⁰⁾や天瀬遺跡⁽¹¹⁾、中期以降には絵図遺跡⁽¹²⁾や上伊福遺跡⁽¹³⁾、伊福定国前遺跡⁽¹⁴⁾などを挙げるができる。鹿田遺跡では中期後半から竪穴住居や井戸、土坑が確認される⁽¹⁵⁾。後期になると同遺跡⁽¹⁶⁾や近隣の大供中道遺跡⁽¹⁷⁾で水田畦畔が検出されており、集落の広がりとともに水田域も拡大していった状況を示している。旭川河口に近い天瀬遺跡や鹿田遺跡など臨海性の集落での生業は、海に近い立地をいかしたものと考えられてきたが、水稲農耕も含めた複合的な生産活動を行っていたことがわかってきた。

弥生時代末から古墳時代前期には、岡山平野を囲む山塊に弥生墳丘墓や前方後円（方）墳が数多く築かれ、複数の首長墓系譜を読み取ることができる。旭川西岸では半田山山塊上に都月坂2号墳丘墓⁽¹⁸⁾、都月坂1号墳⁽¹⁹⁾、七つ坑古墳群⁽²⁰⁾が、旭川東岸では北側の龍ノ口山塊上に備前車塚古墳⁽²¹⁾が、南側の操山山塊上に操山109号墳⁽²²⁾、網浜茶臼山古墳⁽²³⁾が築かれる。これらの首長墓の系譜は平野内に点在する集落を営んだ集団に対応すると考えられており、鹿田遺跡を営んだ集団との関連が考えられているのは操山109号墳、網浜茶臼山古墳である⁽²⁴⁾。岡山平野における大型前方後円墳の築造は古墳時代前期後半から中期初頭に最盛期をむかえるが、中期の造墓活動は低調で縮小傾向にある。後期に入ると、周辺の山塊に横穴式石室を有する中小の円墳が多数築かれる。旭川西岸では平



- | | | | |
|---------------------------|----------------------------|------------------------------|---------------------------|
| 1. 鹿田遺跡 (弥生～近世) | 31. 朝寝鼻貝塚 (縄文前～後期) | 60. 正野田古墳群 (古墳後期) | 88. 中井・南三反田遺跡・古墳群 (弥生～室町) |
| 2. 富原西奥古墳 (古墳) | 32. 津島岡大遺跡 (縄文中期～近世) | 61. 関西高校裏山古墳群 | 89. 雄町遺跡 (弥生～古墳) |
| 3. 荒神庵寺 (飛鳥～平安) | 33. 津島新野遺跡 (弥生) | 62. 若宮古墳 (古墳後期) | 90. 乙多見遺跡 (弥生) |
| 4. 上の段窯跡 (奈良) | 34. 津島江道遺跡 (縄文～近世) | 63. 乞食谷古墳 (古墳後期) | 91. 関遺跡 (弥生) |
| 5. 矢望城庵寺 (奈良) | 35. 北方長田遺跡 (弥生～近世) | 64. 貝塚 (不明) | 92. 赤田東遺跡・関遺跡 (弥生～室町) |
| 6. 佐良池古墳群 (古墳後期) | 36. 神宮寺山古墳 (古墳前期) | 65. 高柳城跡 (室町?) | 93. 幡多庵寺 (飛鳥～平安) |
| 7. 播鉢池古墳群 (古墳後期) | 37. 津市遺跡 (弥生～近世) | 66. 岡山城跡 (室町～近世) | 94. 赤田西遺跡 (弥生～室町) |
| 8. 奥池古墳群 (古墳後期) | 38. 北方上沼遺跡 他 (弥生～近世) | 67. 大供本町遺跡 (古代～近世) | 95. 原尾島遺跡 (弥生～室町) |
| 9. タイミ山古墳 (古墳中期?) | 39. 北方下沼遺跡 (弥生～室町) | 68. 大供東浦遺跡 (弥生～室町?) | 96. 中島城跡 (室町) |
| 10. 蜂矢城 (室町) | 40. 北方横田遺跡 (弥生～室町) | 69. 鹿田本町遺跡 (仮称) | 97. 百間川遺跡群 (縄文～近世) |
| 11. 坊主山遺跡 (古墳～室町) | 41. 北方中溝遺跡 (弥生～室町) | 70. 鹿田遺跡 (県立岡山病院) | 98. 百間川原尾島遺跡 (縄文中期末～近世) |
| 12. 中橋津古墳群 (古墳後期) | 42. 北方地藏遺跡 (弥生～近世) | 71. 散布地 (旧名: 大供遺跡) (弥生) | 99. 百間川沢田遺跡 (縄文中期～近世) |
| 13. 貝塚 (不明) | 43. 北方藪ノ内遺跡 (弥生～近世) | 72. 大供中道遺跡 (弥生～室町) | 100. 操山219号遺跡 (旧石器) |
| 14. 若宮八幡裏古墳 (古墳) | 44. 広瀬遺跡 (弥生) | 73. 散布地 (弥生他) | 101. 金蔵山古墳 (古墳中期) |
| 15. 東橋津貝塚 (不明) | 45. 南方遺跡他 (弥生～近世) | 74. 天瀬遺跡 (弥生～近世) | 102. 妙禪寺城跡 (戦国) |
| 16. 東橋津1号・2号墳 (古墳後期) | 46. 絵図遺跡 (弥生～平安) | 75. 新道遺跡 (奈良～近世) | 103. 操山古墳群 (古墳後期) |
| 17. 首部 (白山神社) 首塚 (鎌倉～室町?) | 47. 上伊福遺跡 (弥生・古墳) | 76. 二日市遺跡 (弥生～近世) | 104. 操山103号墳 (古墳前期) |
| 18. 鳥山城 (笹ヶ迫城) 跡 (室町) | 48. 上伊福 (立花) 遺跡 (弥生～室町) | 77. 唐人塚古墳 (古墳後期) | 105. 網浜庵寺 (飛鳥～平安) |
| 19. 七つ坑墳墓・古墳群 (弥生～古墳) | 49. 上伊福遺跡・伊福定国前遺跡 (弥生～近世) | 78. 賞田庵寺 (飛鳥～室町) | 106. 網浜茶白山古墳 (古墳前期) |
| 20. 都月坂墳墓・古墳群 (弥生～古墳) | 50. 上伊福西遺跡・尾針神社南遺跡 (弥生～平安) | 79. 賞田庵寺窯跡 (奈良) | 107. 操山109号墳 (古墳前期) |
| 21. 半田山城 (戦国) | 51. 津倉古墳 (古墳前期) | 80. 浄土寺 (奈良～室町) | 108. 操山202号遺跡 (平安～奈良) |
| 22. 津島福居遺跡 (古墳～室町) | 52. 妙林寺遺跡 (弥生) | 81. 湯迫古墳群 (古墳前期) | 109. 貝塚 (鎌倉～室町?) |
| 23. お塚 (様) 古墳 (古墳中期) | 53. 石井庵寺 (奈良?～室町) | 82. 備前国府関連遺跡 | 110. 湊茶白山古墳 (古墳前期) |
| 24. 津島東遺跡 (縄文～室町) | 54. 青陵古墳 (古墳前期) | 83. 北口遺跡 (弥生～室町) | 111. 湊荒神遺跡 (奈良～室町) |
| 25. 津島3丁目第1地点 (弥生・古墳) | 55. 十二本木塚古墳 | 84. 備前国庁跡 (奈良～平安) | 112. 大塚山経塚 (鎌倉～室町) |
| 26. 一本松古墳 (古墳中期) | 56. 富山城跡 (室町～江戸) | 85. 備前国府推定地 (南国長) 遺跡 (弥生～鎌倉) | |
| 27. 不動堂古墳 | 57. 矢坂山西古墳群 (古墳後期) | 86. 南古市場遺跡 (奈良～平安) | |
| 28. 宿古墳群 (古墳前期・後期) | 58. 矢坂山山頂遺跡 (弥生) | 87. ハガ (高島小) 遺跡 (奈良～室町) | |
| 29. 妙見山城跡 (戦国) | 59. 矢坂山東古墳群 (古墳後期) | | |
| 30. 釜田遺跡 (弥生他) | | | |

図1 周辺遺跡分布図

遺跡名と内容は「改訂岡山県遺跡地図〈第6分冊岡山地区〉」2003岡山県教育委員会に準拠し一部加筆した。

野西部の京山・矢坂山山塊に、東岸では龍ノ口山塊、操山山塊に中小の横穴式石室墳が築造される。なかには沢田大塚古墳のような大型の横穴式石室をもつものや、唐人塚古墳²⁹のような切石造りの石室を有する有力な古墳が認められる。

古墳時代の集落の消長をみると、初頭の集落は弥生時代から継続するものが多く、旭川東岸では百間川遺跡群²⁶、旭川西岸では津島遺跡²⁷、鹿田遺跡²⁸、伊福定国前遺跡²⁹などがある。これらの集落は前期から中期を通して縮小もしくは断絶する。中期後半になると、旭川東岸で百間川原尾島遺跡³⁰、旭川西岸で津島遺跡³¹、津島岡大遺跡³²などが確認される。後期の集落は旭川東岸では百間川原尾島遺跡³³、旭川西岸では伊福定国前遺跡³⁴、津島遺跡³⁵、津島江道遺跡³⁶、津島岡大遺跡³⁷などで確認されている。

飛鳥・奈良時代には官衙や寺院などの拠点的な施設が造営され、領域の管理を目的とする条里制が施行されるが、これらから同時期の地方支配の一面をうかがうことができる。同時期の寺院については、旭川の東西において、数のうえで不均等な状態にあることが指摘されてきた。すなわち、旭川西岸では明確な寺院は確認されていない³⁸が、旭川東岸では飛鳥時代に創建され、平城宮式瓦が出土した賞田廃寺³⁹のほか、幡多廃寺⁴⁰、網浜廃寺など5カ寺が知られている。官衙とみられる遺跡や寺院の発掘調査では、特に旭川東岸において備前国府に関連する官衙とみられるハガ遺跡⁴¹、総柱建物や「市」の墨書がある土器を出土した百間川米田遺跡⁴²などの成果がある。旭川西岸では鹿田遺跡⁴³で集落が確認されるほか、同遺跡の東約600mに位置する河口近くの新道遺跡⁴⁴で8世紀頃の火葬遺構を含む遺構が確認された。旭川河口周辺では先述の網浜廃寺を含め、特殊な遺構・遺物の受容がみられ、後の鹿田庄の成立を考えるうえで注目される。

平安時代から鎌倉時代には、岡山平野の南半部においては鹿田庄をはじめとするいくつかの荘園が成立したことが知られる。鹿田庄は藤原摂関家殿下渡領の一つとして藤原氏長者が代々領してきた荘園である。その所在については歴史地理学研究成果から岡山市北区鹿田町周辺が有力な比定地とされてきた。この一帯では鹿田遺跡に加え、新道遺跡⁴⁴、大供本町遺跡⁴⁵などの調査事例が増し、当該期の資料が蓄積されてきている。新道遺跡では12世紀後半の大型井戸から「□□御庄久延弁」と書かれた木簡が出土している。大供本町遺跡では鹿田周辺の地割に合致する区画溝が確認され、輸入陶磁器・墨書土器等が出土している。旭川河口西岸の二日市遺跡⁴⁶でも、古代末～中世の井戸や柱穴が確認されている。このように考古学的に鹿田庄の領域や内容を明らかにするための資料的基盤が整いつつある。旭川東岸では百間川遺跡群において当該期の集落遺跡が知られている。

室町時代以降江戸時代にいたるまで集落の様相は判然としていない。近年、鹿田遺跡（県立岡山病院）の調査成果から、14世紀初頭頃、広範囲にわたる火災があったらしいことがわかり、その後集落の再編が行われた可能性が指摘されている⁴⁷。また、鹿田遺跡第20次調査地点⁴⁸では区画溝で囲まれた戦国期の屋敷地や、大供本町遺跡でも同時期の屋敷地の並びが確認されている。この時期の集落についても具体的な様相が明らかになりつつある⁴⁹。

江戸時代以降、岡山城や城下町の整備が進められた。南方遺跡、新道遺跡の調査成果からは城下町の様相を知ることができる。新道遺跡では、遺構・遺物の内容から絵図に記載された城下町の南端部にあたる屋敷地であることが判明した⁵⁰。南方遺跡（裁判所地点）で検出された遺構も絵図との対照により近世後期の武家屋敷であることが明らかになる⁵¹など、城下町の姿を示す調査成果が蓄積されている。城下町の整備とともに旭川の治水と城下町の防衛をになう堀や用水の開削がなされ、江戸時代前期には城下町の西縁を南流する西川が整備される。西川は防衛、生活用水の供給、下流域の灌漑、水運などの機能を有しており、西川から分岐し、鹿田地区東辺を南流する枝川もそうした機能をになうものであったと考えられる。鹿田遺跡では枝川周辺に位置する調査地点で、船着き場やため池など水運に関わる遺構が検出されている。平野のより南部では大規模な干拓が進められ、海岸線は大きく南に後退した。そうしたなか、城下町外縁にあたる鹿田遺跡周辺では農村景観へと変化がみられる。

第2節 鹿田遺跡

1. 構内座標の設定

本センターでは、鹿田遺跡の所在する岡山大学鹿田地区構内の調査にあたり、周辺の市街地街区および構内の建物主軸に合致させた局地座標として、鹿田地区構内座標を設定している（図2）。鹿田遺跡の調査における位置関係の記録は、すべてこの構内座標系に基づくものである。

1983年から2002年度までの構内座標は、国土座標第V座標系（日本測地系）の（ $X=-149,800\text{m}$ 、 $Y=-37,400\text{m}$ ）を原点とし、同座標軸の北を東へ15度回転させた座標軸を基軸とする局地座標であった。2002年4月1日の改正測量法施行にともない、本センターでも2003年度以降に刊行する報告書からは世界測地系を採用することとしたが、日本測地系によって設定した構内座標系を踏襲したまま、日本測地系に基づく座標値のみを世界測地系へと変換することとした⁵²。すなわち、地図上に投影される局地座標系の相対的位置関係を保持したまま、座標値のみを世界測地系へと置き換えた結果、構内座標原点の座標は（ $X=-149,456.3718\text{m}$ 、 $Y=-37,646.7700\text{m}$ ）と変換された。ただし、日本測地系と世界測地系では、基準となる楕円体や測地座標系が異なるため、両者の座標軸は一致しない。したがって、日本測地系に基づいて設定した局地座標を用いる本構内座標の北は日本測地系に基づく座標北であり、世界測地系の座標北ではない。

構内座標は、原点から5m間隔で座標軸に平行するグリッドラインを設定して細分する。ライン名については、東西ラインでは2文字のアルファベットの組み合わせ、南北ラインは2桁のアラビア数字で表記している。すなわち、原点を通る東西ラインをAA、それより南へ5mごとにAB、AC、…、AZ、BA、BB、…、BZとし、原点を通る南北ラインを00、それより西へ5mごとに01、02、…、79、80とする。これらのラインの交差によって形成される5m四方の区画は、その北東角で交わる2方向のライン名を組み合わせ、AA00区、AB01区、AC02区、…、と呼称する。

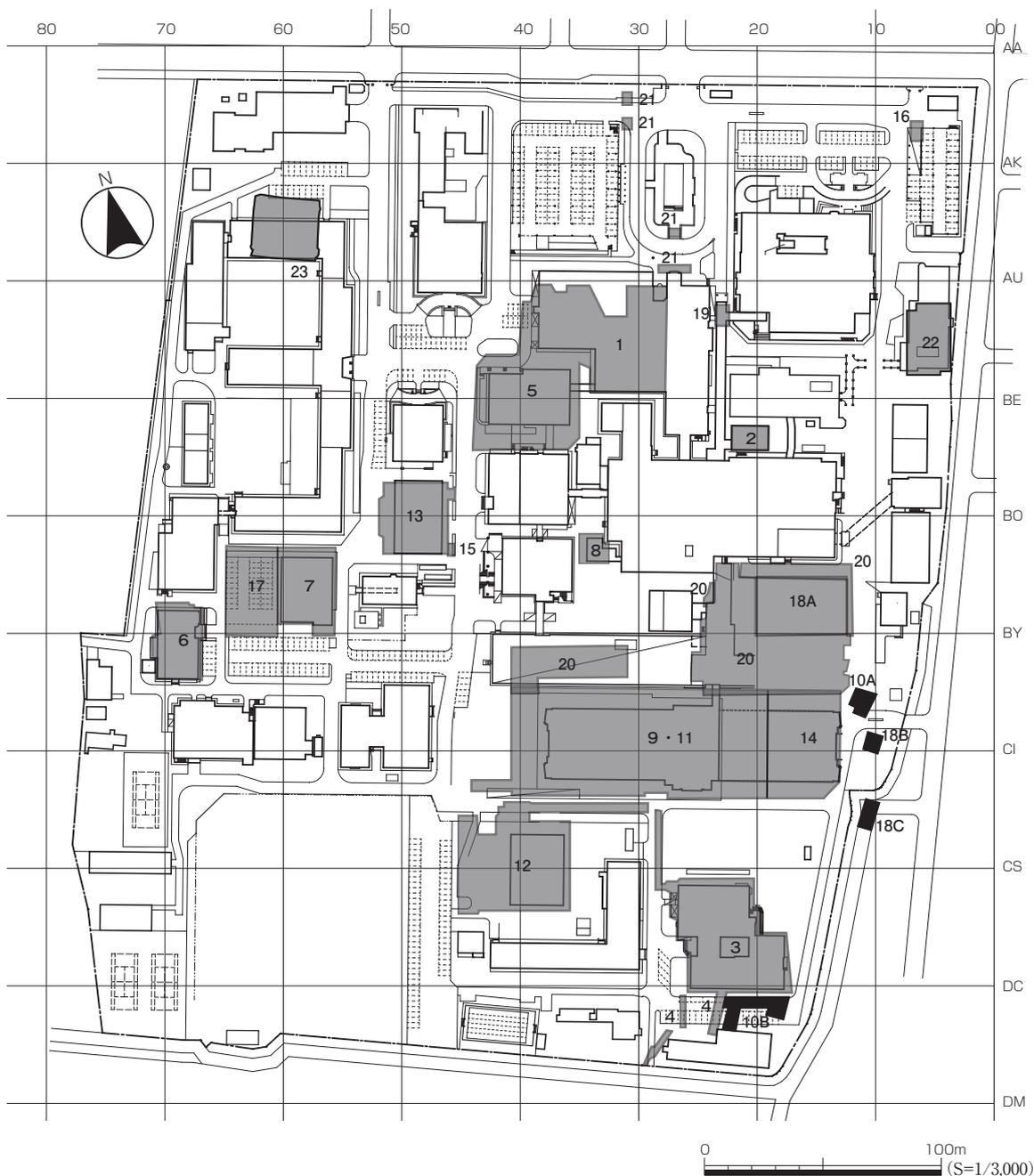
2. 鹿田遺跡（岡山大学鹿田地区）の調査概要

鹿田遺跡の範囲は『岡山県遺跡地図（第6冊、岡山地域）』（岡山県2003）⁵³では、岡山大学鹿田地区を中心に、県立病院地点（岡山県古代吉備文化財センターによる調査；図1-70）⁵⁴、NTTドコモ中国ビル地点（岡山市教育委員会による調査）⁵⁵を含む。

本センターでは、岡山大学鹿田地区において2012年度前半までに23回の発掘調査を実施している。同地区では弥生時代中期後半～近世にいたる遺構・遺物が確認される。その中で、第1・5次調査地点（図2）では弥生時代中期後半～古墳時代初頭、飛鳥時代、奈良時代末～室町時代の遺構・遺物が重複して調査されており、当地点が遺跡の中核の居住域にあたっていることをうかがわせる。この北端は東西方向に走る河道で区切られる⁵⁷。

弥生時代中期～後期では同地点に居住域が展開し、その南側にあたる第9・11・12・14次調査地点（図2-9・11・12・14）では畦畔や溝の存在から後期の水田域のひろがりが見込まれる⁵⁸。

古墳時代初頭では居住域は第1次調査地点を核としてその周囲に向かってひろがりを見せるが、本地点周辺には及ばない。居住域が展開する微高地間には低位部が入り込み、第13次調査地点（図2-13）では大規模な土器だまりが形成されている⁵⁹。その後、集落は中断期を経て、飛鳥時代には第1次調査地点周辺に小規模な集落として姿を現すが、継続性は弱く、次に居住域のひろがりが見られるのは平安時代前半を中心とする時期である。第1・2・5次⁶⁰調査地点（図2-1・2・5）などで掘立柱建物群、井戸、溝などが確認されている。こうし



- | | | |
|----------------------|------------------------|-------------------------|
| 1. 第1次調査：外来診療棟 | 9. 第9次調査：病棟 | 17. 第17次調査：基礎研究棟 |
| 2. 第2次調査：NMR - CT室 | 10. 第10次調査：共同溝関連 | 18. 第18次調査：中央診療棟 |
| 3. 第3次調査：医療短期大学部【校舎】 | 11. 第11次調査：病棟 | 19. 第19次調査：渡り廊下 |
| 4. 第4次調査：医療短期大学部【配管】 | 12. 第12次調査：エネルギーセンター | 20. 第20次調査：中央診療棟関連 |
| 5. 第5次調査：管理棟 | 13. 第13次調査：総合教育研究棟 | 21. 第21次調査：外来診療棟周辺他環境整備 |
| 6. 第6次調査：アイソトープセンター | 14. 第14次調査：病棟 | 22. 第22次調査：地域医療総合支援センター |
| 7. 第7次調査：基礎研究棟 | 15. 第15次調査：総合教育研究棟【外溝】 | 23. 第23次調査：Jホール |
| 8. 第8次調査：R I 治療室 | 16. 第16次調査：立体駐車場エレベーター | |

※建物名称は調査次の呼称による。

※AA00は、日本測地系によるX=-149,800,000m、Y=-37,400,000mの交点を原点として設定したものである。
2003年から世界測地系による座標に移行したため、現在の表記となっている。

図2 発掘調査地点と構内座標

た地点では大型の井戸の周囲に大小の掘立柱建物群が軸を揃えて立ち並ぶ状況が復元されることや、墨書土器、転用硯、木簡などの遺物が出土していることが特に注目される。また、同地点から約250m南の第3・4次調査地点(図2-3・4)では東西方向に流れる大規模な河道で橋脚や杭が確認されている⁶¹⁾。橋脚は径約30cmにおよび、橋脚の配列から架け替えも想定される。架橋地点は通行量の多い要所であることが想定される。鹿田遺跡一帯は古くから藤原摂関家の殿下渡領の一つである鹿田庄の比定地とされてきたが、これらの遺構・遺物は鹿田庄との関連を物語るものと考えられる。鹿田庄の成立した時期は不明だが、現在知られている史料⁶²⁾から、少なくとも平安時代のはじめから藤原氏の支配下にあったとみられる。前述の第1次調査地点で確認された建物群と大型井戸は、おおよそ8世紀後半から9世紀代と考えられ、鹿田庄揺籃期の遺構の可能性が考えられる。

平安時代後半、10世紀代～11世紀前半には遺構は極めて少なくなるが、本遺跡の西側に位置する県立病院地点では該期の遺構密度が高まり、本地点から集落が移動した可能性が指摘されている⁶³⁾。11世紀後半～12世紀にかけては、第1・5次、第3次、第6次⁶⁴⁾、第7次⁶⁵⁾、第9・11・14次、第12次、第13次調査地点等(図2)で周囲を溝によって区画する屋敷地が出現する。区画の方向は、古くから「鹿田庄」の位置を考える際に注目されてきた正方位からおよそ15度傾く現在の地割にほぼ一致している。13世紀～14世紀代には第6次・7次調査地点等で区画溝の大型化が見られ、屋敷地の再編が窺われる。こうした地点の調査にくわえ、第7次調査地点出土の猿形木製品や、今回報告する第18次調査B地点出土の猫形木製品といった特殊な遺物や絵図資料⁶⁶⁾から人や物資が集中する賑わいのある集落が想定される。

戦国時代には第18・20次調査B地点において濠に囲まれた屋敷地が確認されている⁶⁷⁾。猿形水滴の出土は当時の集落の性格を考える上で注目される。江戸時代に入ると、岡山城下町の整備が進められる一方で、その南西に位置する本遺跡一帯は農村に変化したことが畦畔や野壺などから読みとれる。そうしたなか、近年の調査では、第18次・20次調査地点において近世後半の居住域の様相が、また今回報告する第18次調査B地点や第22次調査地点では、入り江状遺構や池等が確認されており、該期の集落に対する評価に一石を投じている。

註

- (1) 鎌木義昌 1962「第一編 原始時代」『岡山市史(古代編)』
- (2) 富岡直人 1998『朝寝鼻貝塚発掘調査概報』加計学園埋蔵文化財調査室発掘調査報告書2
- (3) a 山本悦世編 1992『津島岡大遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第5冊
b 阿部芳郎編 1994『津島岡大遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第7冊
c 岩崎志保編 2005『津島岡大遺跡16』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第21冊
- (4) a 二宮治夫編 1985『百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59
b 平井 勝編 1993『百間川沢田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84
- (5) 吉留秀敏・山本悦世編 1988『鹿田遺跡1』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊
- (6) a 高畑知功 1988『津島江道遺跡』岡山県埋蔵文化財報告18
b 草原孝典 1999『津島江道(岡北中)遺跡』『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1997(平成9)年度』
- (7) a 津島遺跡調査団 1969『昭和44年岡山県津島遺跡調査概報』
b 岡山県教育委員会 1970『岡山県津島遺跡調査概報』
c 島崎 東ほか 1999『津島遺跡I』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告137
d 平井 勝 2000『津島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告151
e 島崎 東ほか2003『津島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173
f 岡本泰典ほか 2004『津島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告181
- (8) a 前掲註(3) a 文献
b 山本悦世編 2004『津島岡大遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第19冊
c 岡田 博編 1998『北方下沼遺跡 北方横田遺跡 北方中溝遺跡 北方地蔵遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126
d 高田恭一郎編 2000『北方地蔵遺跡2 北方藪ノ内遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告149
e 柳瀬昭彦 1988『中溝遺跡』『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』日本考古学協会静岡大会実行委員会
f 柳瀬昭彦 1988『南方釜田遺跡』『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』日本考古学協会静岡大会実行委員会
- (9) a 宇垣匡雅編 1999『百間川原尾島遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88
b 平井 勝編 1995『百間川原尾島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97
- (10) a 岡山市遺跡調査団 1971『南方遺跡発掘調査概報』
b 岡山市遺跡調査団 1981『南方(国立病院)遺跡発掘調査概報』
c 柳瀬昭彦・岡本寛久 1981『南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告40
- (11) 出宮徳尚 1986『天瀬遺跡』『岡山県史』考古資料
- (12) 内藤善史編 1996『絵図遺跡 南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告110
- (13) a 中野雅美 1984『上伊福(ノートルダム清心女子大学構内)遺跡』岡山県埋蔵文化財報告14
b 中野雅美・根木 修 1986『上伊福九坪遺跡』岡山県史 考古資料
- (14) a 杉山一雄編 1998『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告125

- b 金田善敬編 2005『伊福定国前遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告188
 c 亀山行雄編 2010『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告224
 (15) 前掲註(5)文献
 (16) a 小林青樹 2000「鹿田遺跡第9次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』16 1998年度
 b 喜田 敏・岩崎志保 2000「鹿田遺跡第9次調査追加」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』17 1999年度
 (17) 河田健司 2000『大供中道遺跡発掘調査概報』
 (18) 近藤義郎 1986「都月坂二号弥生墳丘墓」『岡山県史 考古資料』
 (19) 近藤義郎 1986「都月坂一号墳」『岡山県史 考古資料』
 (20) 七つ坑古墳群発掘調査団 1987『七つ坑古墳群』
 (21) 近藤義郎 1986「備前車塚古墳」『岡山県史 考古資料』
 (22) 宇垣匡雅 1990「網浜茶臼山古墳・操山109号墳の測量調査—古備の前期古墳Ⅲ—」『古代吉備』第12集
 (23) a 前掲註(22)文献
 b 神谷正義・安川 満 2007『神宮寺山古墳 網浜茶臼山古墳』
 (24) 松木武彦 1993「岡山平野における弥生～古墳時代の地域集団」『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊
 (25) 伊藤 晃 1986「唐人塚古墳」『岡山県史 考古資料』
 (26) a 江見正巳ほか 1980「旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査Ⅰ」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39
 b 正岡睦夫編 1984『百間川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56
 c 柳瀬昭彦編 1996『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106
 d 高田恭一郎編 2008「百間川原尾島遺跡7 百間川二の荒手遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告215
 (27) 前掲註(7)文献
 (28) 前掲註(5)文献
 (29) 前掲註(14)文献
 (30) 前掲註(26) b、c、d 文献
 (31) 前掲註(7)文献
 (32) 山本悦世・岩崎志保編 2003『津島岡大遺跡』11
 (33) 前掲註(26) c、d 文献
 (34) 前掲註(14)文献
 (35) 前掲註(7)文献
 (36) 前掲註(6) a 文献
 (37) 前掲註(32)文献
 (38) 石井庵寺がその可能性を残す。
 (39) 高橋伸二 2005『史跡賞田庵寺跡』
 (40) 出宮徳尚ほか 1975『幡多庵寺発掘調査報告』岡山市遺跡発掘調査団
 (41) 草原孝典 2004「ハガ遺跡」
 (42) a 岡山県教育委員会 1981『百間川長谷遺跡 当麻遺跡Ⅰ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告46
 b 岡山県教育委員会 1982『百間川当麻遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52
 c 岡山県古代吉備文化財センター 1989『百間川米田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告74
 (43) 前掲註(5)文献
 (44) 草原孝典 2002『新道遺跡』
 (45) 岡山市教育委員会 2006「大供本町遺跡発掘調査現地説明会資料」
 (46) 出宮徳尚 1985「岡山県二日市遺跡」『日本考古学年報』35
 (47) a 亀山行雄ほか 2007『鹿田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告207
 b 河合 忍ほか 2007『鹿田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告210
 (48) 山本悦世ほか 2011「鹿田遺跡第20次発掘調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2009』
 (49) 前掲註(45)文献
 (50) 前掲註(44)文献
 (51) 氏平昭則編 2012『南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告234
 (52) 光本 順 2004「日本測地系から世界測地系への移行に伴う構内座標の変更について」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002』
 (53) 古代吉備文化財センター 2003『改定 岡山県遺跡地図(第6分冊 岡山地区)』
 (54) 前掲註(47)文献
 (55) 神谷正義 2007『鹿田遺跡—ドコモ中国東古松ビル新築工事に伴う発掘調査—』
 (56) 前掲註(5)文献
 (57) a 高田貫太 2006「鹿田遺跡第16次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004』
 b 光本 順 2012「鹿田遺跡第21次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010』
 (58) a 小林青樹 2000「鹿田遺跡第9次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』16
 b 喜田 敏・岩崎志保 2000「鹿田遺跡第9次調査・鹿田遺跡第11次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』17
 c 山本悦世 2001「鹿田遺跡第12次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』18
 (59) 光本 順編 2010『鹿田遺跡6』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第26冊
 (60) 山本悦世編 2007『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊
 (61) 山本悦世編 1990『鹿田遺跡Ⅱ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊
 (62) 「鹿田」の初出は817(弘仁4)年、興福寺南円堂で行なわれた法華会の料米72石を「鹿田地子」であてたとする記事、「鹿田庄」の初出は900(昌泰3)年、鹿田庄の地子を興福寺長講会料にあてたとする記事にみられるもので、いずれも『興福寺縁起』による。
 鈴木景二 2002「備前国鹿田庄・荒野史料と絵図」『新道遺跡』
 (63) 河合 忍 2007「総括」『鹿田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告210
 (64) 松木武彦・山本悦世 1997『鹿田遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊
 (65) 前掲註(60)文献
 (66) 荒野庄絵図 鈴木景二 2002「備前国鹿田庄・荒野史料と絵図」『新道遺跡』
 (67) a 山本悦世ほか 2008「鹿田遺跡第18次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2007』
 b 前掲註(48)文献

第2章 第10次調査

第1節 調査の経過と概要

1. 調査地点の位置

調査地点は、鹿田キャンパスの東端部に近いA地点と、南東角付近に位置するB地点の2カ所である(図3)。A地点の東隣に、またB地点の東～南側には現在、枝川が用水路として流れている。両地点ともに鹿田遺跡の周縁部にあたる。

A地点の西側では現在までに第9・11・14・18・20次調査が実施されている。B地点では隣接した第3・4次調査地点の報告がなされている⁽¹⁾。同報告およびキャンパス東端の護岸工事立会の成果⁽²⁾から、平安時代の河道が入っていることが判明している。

注

- (1) 山本悦世1990『鹿田遺跡Ⅱ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (2) 横田美香2001「第4節立会調査 鹿田地区」『岡山大学構内遺跡調査研究年報18』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

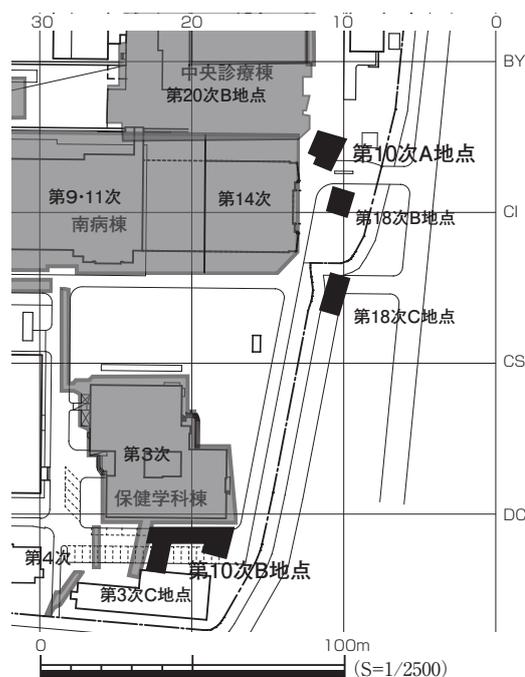


図3 調査地点の位置

2. 経緯と経過

1999年度に鹿田地区の基幹整備に伴い、敷地南東部において共同溝関連施設の設置がA・B2地点に計画された(図3)。A地点周辺では古代・中世の包含層の広がりがあり、またB地点周辺では、近接する第3次調査C地点で報告された平安時代の橋脚や杭群に関連する遺構の存在が注意された。こうした周辺調査の成果をうけ、発掘調査を実施することとした。

発掘調査は工事の進行に合わせて順次進めることとなった。B地点は工事工程の関係上3区に細分し、それぞれの工区をB1～B3区と呼称する(図4)。B地点では矢板を四周に打った後、重機によって表土を掘削した。調査はまずB地点1区(54㎡)を1999年5月に実施し、続いて6～7月にA地点(40㎡)、B地点2区(45.7㎡)を9月、同3区(107.2㎡)を9月末～10月に順次終了させた。B地点では中世層以下、全域が河道となっていたことが確認された。調査員1名が担当した。

3. 調査と報告書作成体制

調査主体	岡山大学	学 長	小坂二度見 (1999年6月13日まで) 河野伊一郎 (1999年6月14日から)
調査担当	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	センター長	稲田 孝司
調査研究員	〃	助 手	豊島 直博 (調査主任)

管理委員会（発掘年度：1999年度）

【委員】

学 長	小坂二度見(1999年6月13日まで)	農学部長	稲葉 昭次
	河野伊一郎(1999年6月14日から)	環境理工学部長	阪田 憲次
副学長	松畑 熙一(1999年6月13日まで)	文化科学研究科長	工藤進思郎
	佐藤 公行(1999年6月14日から)	自然科学研究科長	中島 利勝
文学部長	稲田 孝司	資源生物科学研究所長	本吉 總男
教育学部長	森川 直	附属図書館長	岩美 基弘
法学部長	石島 弘	医学部附属病院長	荒田 次郎
経済学部長	建部 和弘	歯学部附属病院長	佐藤 隆志
理学部長	山崎比登志	固体地球研究センター長	河野 長
医学部長	難波 正義	医療技術短期大学部長	太田 武夫
歯学部長	松村 智弘	事務局長	諸橋 輝雄
薬学部長	原山 尚	埋蔵文化財調査研究センター長	稲田 孝司
工学部長	大崎 紘一		

【幹事】

総務部長	山崎 洋輔	施設部長	遠藤 久男
経理部長	菊地 俊彦		

運営委員会（発掘年度：1999年度）

（報告書刊行年度：2012年度）

【委員】

センター長	稲田 孝司	センター長	北尾 善信(～12月まで)
文学部教授	倉地 克直		門岡 裕一(2013年1月より)
理学部教授	柴田 次男	副センター長	新納 泉
農学部教授（調査研究専門委員）	千葉 喬三	大学院社会文化科学研究科教授	久野 修義
医学部教授	村上 宅郎	大学院医歯薬学総合研究科教授	大塚 愛二
環境理工学部教授	名合 宏之	大学院環境学研究科教授（調査研究専門委員）	
埋蔵文化財調査研究センター	新納 泉		沖 陽子
	(調査研究室長)	大学院自然科学研究科教授	柴田 次夫
事務局施設部長	遠藤 久男	埋蔵文化財調査研究センター教授	山本 悦世
			(調査研究室長)
		事務局施設企画部長	秋山 明寛

4. 調査の概要

A地点では西半部の大半で攪乱が深くまで及び、包含層は1.2×1.7mの範囲にのこるのみであった。これに対し、東半部では造成土下に近代層以下の包含層が残存していた。検出した遺構は、近世の溝1条、弥生時代の土坑1基のほか、東壁でピット2基を確認した(図5)。出土遺物は土器1箱(1箱約27kg)であった。

B地点では平安時代以前は全域が河道となっていたことを確認した。またB2区で河道内におおむね南北方向に列をなす杭群を検出した(図4右)。時期は平安時代前半であり、既報告地点の橋脚遺構との関連が窺える。遺

物はB地点全体で土器2箱、土製品2点、木器3点、杭58本が出土した。

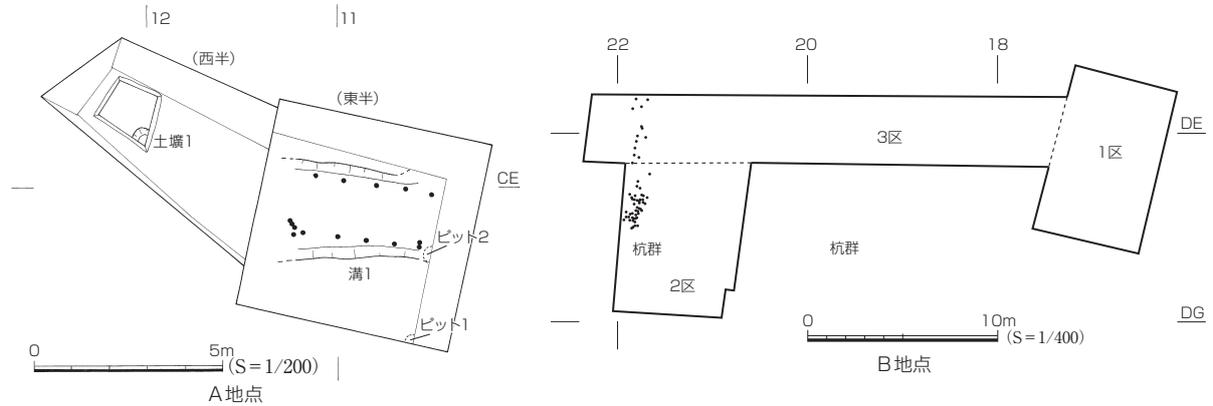


図4 検出遺構全体図

第2節 A地点の調査

1. 層序

層序は調査区東半東壁および北壁土層断面の観察結果による（図5）。

- 1層：近代以降の造成土である。現地表面から約1mの厚みで確認された。上面の標高は約2.3mである。
- 2層：淡灰色弱砂質土で小礫を多く含む。近代に比定される。上面の標高は約1.3mで、層厚は0.05~0.1mである。
- 3層：灰茶褐色弱砂質土で鉄分を多く含む。近世陶磁器片を包含しており、近世層と考えられる。上面の標高は約1.25~1.3mで、層厚は0.05~0.1mである。
- 4層：暗灰茶色弱砂質土でマンガンを多く含む。近世陶磁器片を包含しており、近世層と考えられる。上面の標高は約1.2mで、層厚は0.15~0.2mである。4層は北壁では細分可能で、上層の4 a層は灰茶色弱砂質土で鉄分を多く含み、下層の4 b層は暗灰茶色弱砂質土でマンガンを多く含む土層である。4 a層の上面の標高は約1.2m、層厚は約0.1mである。4 b層上面の標高は約1.1m、層厚は約0.5mである。
- 5層：灰黄褐色砂質土で、マンガンを多く含む。近世陶磁器片を含まず、中世土器を含むことから、中世層と考えられる。上面の標高は約1.05mで、層厚は約0.1mである。

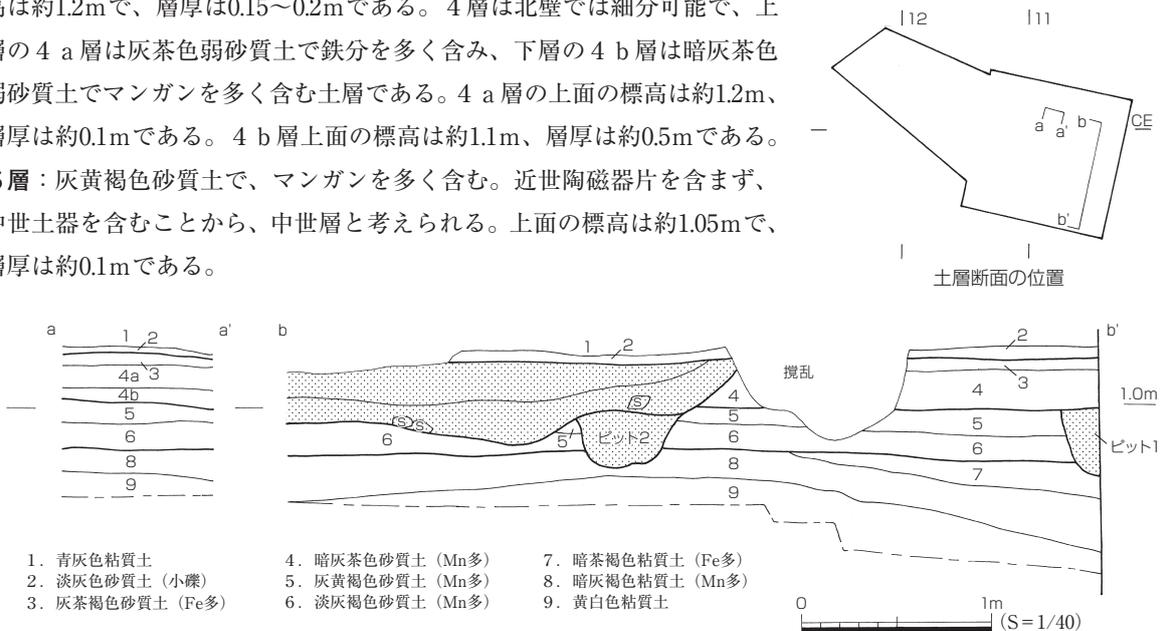


図5 A地点土層断面

- 1. 青灰色粘質土
- 2. 淡灰色砂質土 (小礫)
- 3. 灰茶褐色砂質土 (Fe多)
- 4. 暗灰茶色砂質土 (Mn多)
- 5. 灰黄褐色砂質土 (Mn多)
- 6. 淡灰褐色砂質土 (Mn多)
- 7. 暗茶褐色粘質土 (Fe多)
- 8. 暗灰褐色粘質土 (Mn多)
- 9. 黄白色粘質土

6層：淡灰褐色弱砂質土で、マンガンを多く含む。中世土器を含むことから、中世層と考えられる。上面の標高は約0.85～0.95mで、層厚は約0.05～0.15mである。

7層：東壁南半で確認された暗茶褐色粘質土で、鉄分を多く含む。少量の弥生土器小片を含む。上面の標高は約0.7～0.75mで、層厚は約0.2mである。弥生時代後期頃と考えられる。

8層：暗灰褐色粘質土で、マンガンを多く含む。少量の弥生土器小片を含む。上面の標高は約0.5～0.75mで、層厚は約0.2～0.25mである。弥生時代後期頃と考えられる。

9層：黄白色粘質土で、鉄分を多く含む。上面の標高は約0.25～0.75mで、層厚は0.3m以上である。

2～6層はほぼ水平堆積を示すが、8・9層は、東壁断面では南にむかって下がる。調査区の南には低位部が広がっているものと推測される。8層の低い部分にのみ堆積が認められる7層は、6層による削平で土層の上面は失われており、本来は8・9層と同様、微高地から低位部にむかって下がる土層であったと考えられる。

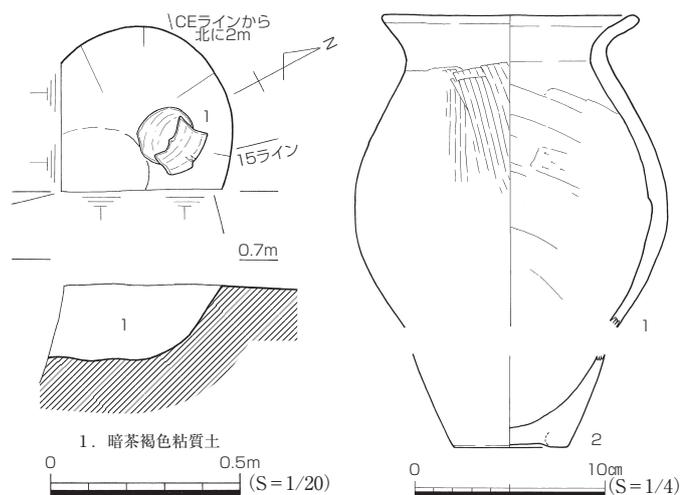
2. 遺構・遺物

(1) 弥生時代

土坑1 (図6)

調査区西半部、CD11・12区に位置する。検出面は8層上面で、標高は0.64mである。攪乱によって大きく破壊されており、北西の約1/4程度が残存するのみであった。残存部の形状から、本来楕円形の土坑であったと推測される。残存部の規模は、東西約0.45m、南北約0.44m、深さ約0.21mである。断面形は底面がほぼ平らで、法面は緩く立ち上がる。埋土は暗茶褐色粘質土である。

出土した遺物は土坑の北側、埋土上部から検出された弥生時代後期前半の甕の口縁部～胴部下半片1点、底部片1点である。色調、胎土、焼成が類似し、同一個体と考えているが、接点を有さないこと、底部から胴部へ立ち上がる器壁の角度が不自然になることから、別個体である可能性も排除しきれない。



番号	種類・器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態・手法他	胎土	色調
1	弥生・甕	13.4	-	-	(口)横ナデ(外)肩部ハケ(内)ケズリ、口縁1/3、胴部2/3残存	微～細砂	淡黄褐
2	弥生・甕	-	6.0	-	(外)摩滅、被熱による変色(内)摩滅、1/2残存	微砂	暗灰/橙褐

図6 土坑1・出土遺物

(2) 室町時代

ピット (図5)

調査区東半東壁で断面のみで2基を確認した。ピット1は東壁南端にあたり、断面で北半のみを確認した。掘削面は5層上面で、径は不明、深さは0.3mである。埋土は炭を含む暗褐色粘質土である。ピット2は上位に溝が重複しており、掘削面は不明である。埋土はピット1と近似しており、暗褐色粘質土である。径0.5m、深さ0.3mを測る。ピット1・2は底面の標高0.7mと共通点が多く同時期のものと考えたい。遺物はなく、層位から室町時代以降、江戸時代以前と考えられる。

(3) 江戸時代

溝 1 (図 7)

調査区東半部、CD・CE10・11区に位置する。検出面は3層上面で、掘削面の上端は東壁で1.26mを測る。東西方向の溝で、幅2.3~2.65m、深さ0.35~0.47mである。断面形は東壁断面では底面に凹凸が認められる。底面の最深部のレベルは東端が0.82m、西端が0.76mで、東から西へ下がる。溝の埋土は2層に分層される。1層は灰色砂

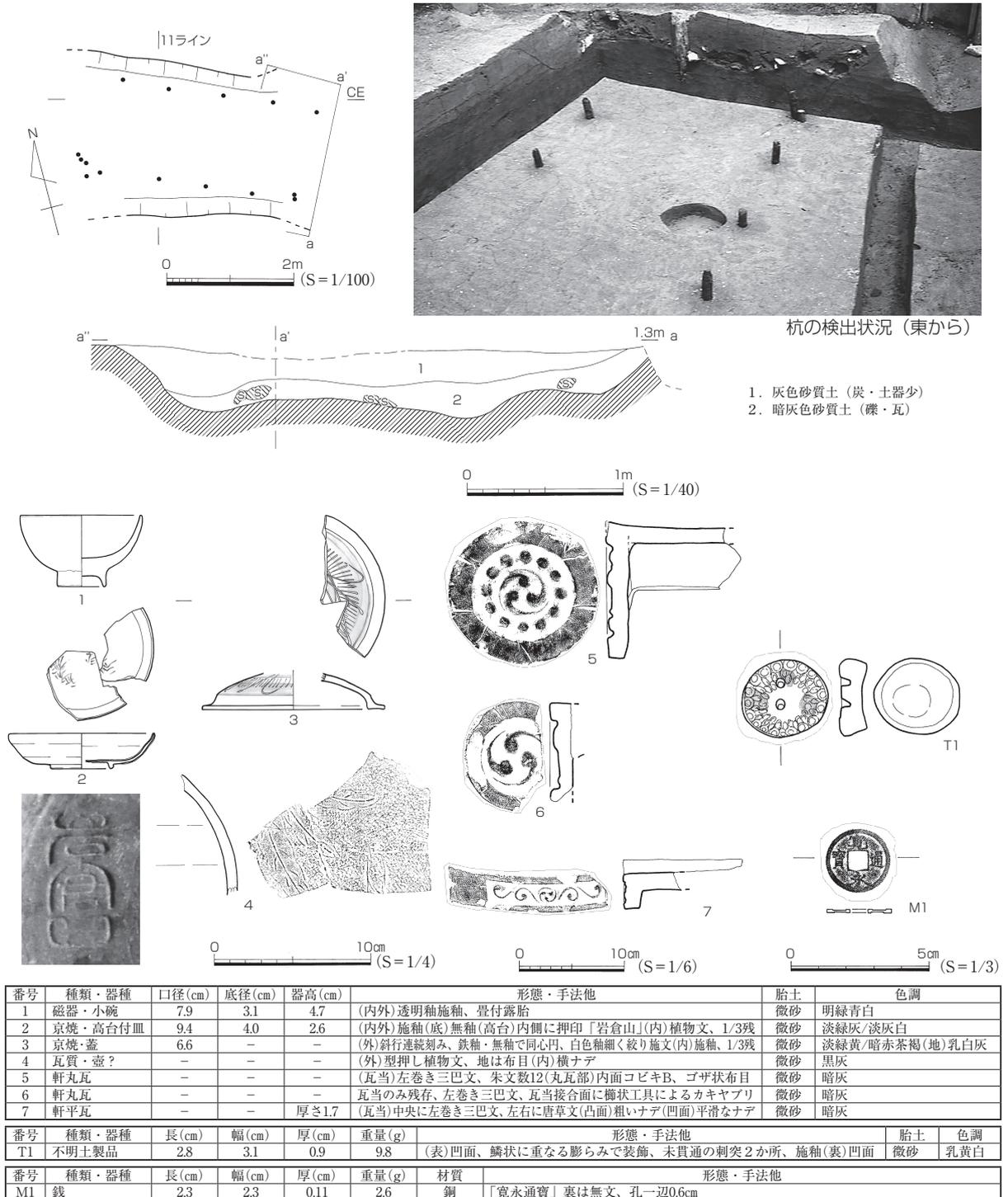


図 7 溝 1・出土遺物

質土で、炭、土器を少量含む。2層は暗灰色砂質土で、底面付近には拳大から人頭大の角礫や瓦を多く含んでいる。

溝の南北の下端より0.1～0.2m内側では、溝の方向に沿って並行する東西方向の杭列2条が確認された。杭列の幅は1.5mである。杭の間隔は北列で0.7～0.93m、南列で0.74～0.88mである。杭の検出レベルは約0.8～0.95mで、底面のレベルとほとんど差はなく地中に打ちこまれた部分のみ残存したものと考えられる。杭の打ち込み深度については計測を行っていない。

本溝は断面の形状に凹凸が認められる点や角礫等を埋土に含む特徴を有している。杭列はその方向が一致していることから溝に伴うものと考えられる。これらの機能については水路とすると、底面の凹凸や、より西に位置する第14次調査地点に継続する溝がみつかっていないことから断定が難しい。

遺物は約1箱（約27㍻）が出土した。その多くは近世陶磁器片、近世瓦片である。そのほかに土製品1点、寛永通宝1点が出土した。近世陶磁器のうち2は高台内に「岩倉山」銘が押印される。京焼の一つである岩倉焼のもので、江戸後期から幕末に製作されたものである。出土遺物から本溝は江戸時代後期から幕末に属するものと考えられる。

第3節 B地点の調査

1. 層序

本報告での土層説明は河道に直交して設定されたB1区・2区の東辺断面を用いることとする（図8・9）。

土層は、近代以降の造成土、近代層、近世～中世層、古代の河道埋土に大別できる。このうち河道内の細分層については、調査区東側の断面①、西側の断面②の間では約20mの間隔があり対応関係を明らかにしがたい。

1層：近代以降の造成土である。現地表から約1.4mの厚みで確認された。上面の標高は約2.65mである。

2層：近代の土層である。断面①では3層（2a～2c層）、断面②では2層（2a・2c層）に細分される。2a層は断面①では青灰色粘質土、断面②では暗灰色土である。暗黄褐色粘質土ブロックを多く含む。上面の標高は1.16～1.26m、層厚は0.15～0.2mである。2b層は断面①でのみ観察される黄灰色粘質土である。鉄分の沈着が著しく、マンガンを多く含む。上面の標高は約1.1m、層厚は0.1mである。2c層は断面①では灰色粘質土、断面②では淡灰褐色砂質土である。上面の標高は0.98～1.04m、層厚は0.1～0.15mである。

3層：近世の土層である。断面①、②ともに2層に細分される。3a層は断面①では黄灰褐色粘質土、断面②では灰褐色砂質土である。マンガンを極めて多く含む。上面の標高は約0.9m、層厚は0.04～0.07mである。3b層は断面①では灰赤褐色粘質土、断面②では灰褐色砂質土である。鉄分の沈着が著しい。上面の標高は0.84～0.86m、層厚は0.06～0.12mである。

4層：断面①では暗灰色粘質土、断面②では灰黄褐色砂質土である。鉄分の沈着は少ない。上面の標高は0.74～0.78m、層厚は0.13mである。中世の土層である。

<河道内の堆積状況>

調査区内で確認された4層下面より下位の土層はすべて河道の堆積物である。河道上面は断面①では標高約0.65m、断面②では標高約0.61mである。

断面①では粘質土層間に粗砂層が入り込む状況が観察された。粗砂の堆積は⑦・⑩層において認められる。そのうち⑦層は層厚約0.3～0.4mであり、多量の砂が運ばれる強い水流が一時的に引き起こされたことを示すものとみられるが、全体としては粘質土層が厚く堆積しており、比較的緩やかな水流が長期にわたって保たれていた状

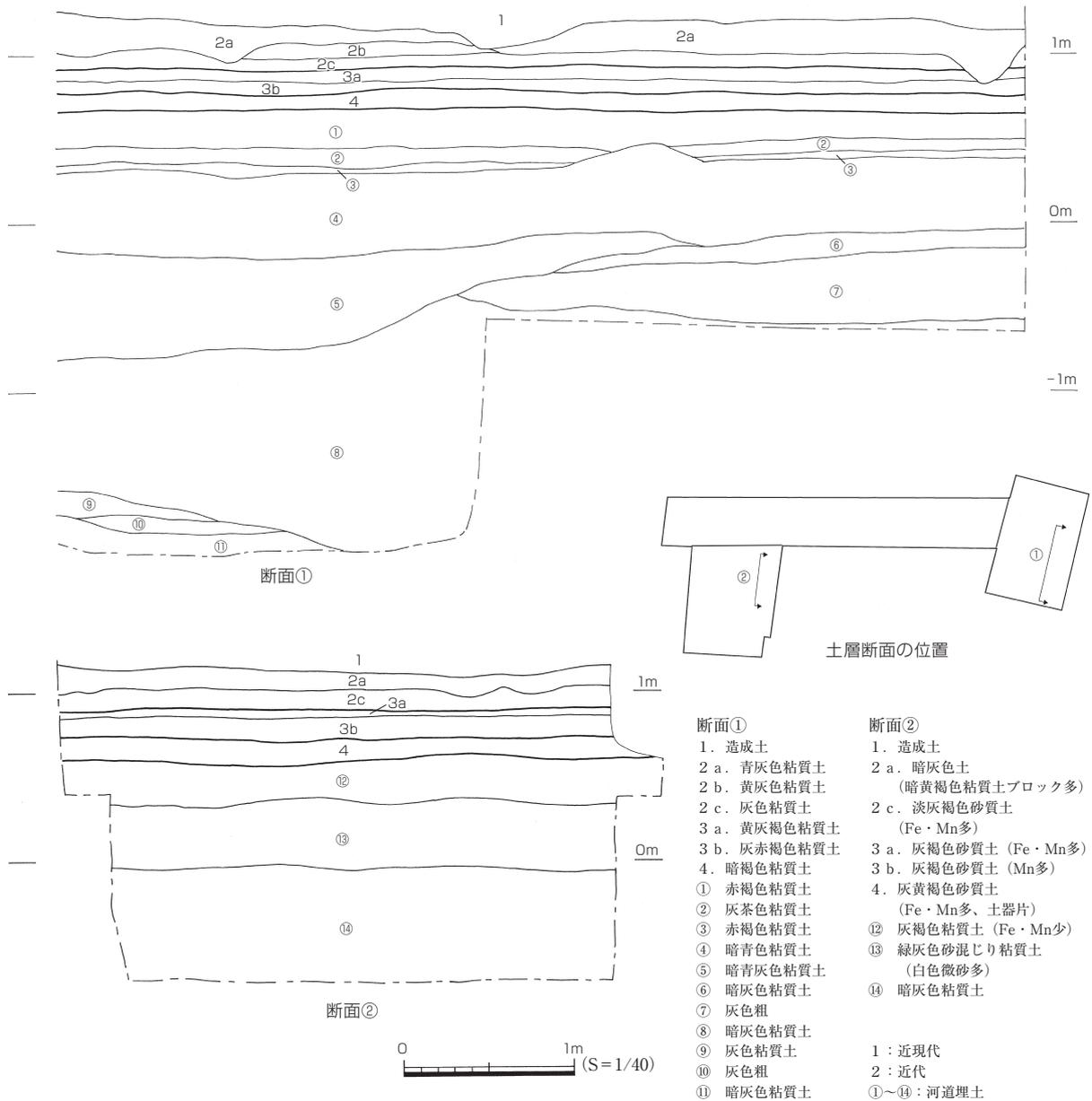


図8 B地点土層断面図(1)

態であったことが推測される。

断面②では、上位から緑灰色粘質土、明灰色粘質土、暗灰色粘質土の順に厚く堆積しており、本地点の土層には砂や砂質土の堆積はみられない。砂が入っていない状況から杭列の存在との関連も窺える。河道の検出レベルはB 1区で標高0.67m、B 2区で0.58m、B 3区で約0.55~0.6mである。

<河道の規模> 河道の法面や落ち際ラインは調査区内では確認されなかった。規模については、河道北側の落ちを確認した第3次調査C地点の成果から、南北幅は12m以上と推定される。2000年に実施した鹿田地区南端の擁壁改修工事でも本河道と一連のものと考えられる河道の堆積が確認され、敷地外に広がることが明らかとなっているが、南北幅の確定には至っていない。また、河道の深さについては、断面①で標高-1.94mまで約2.6mを掘削しており、発掘停止面以下に底面があると考え、約2.6m以上の深度を有することとなる。

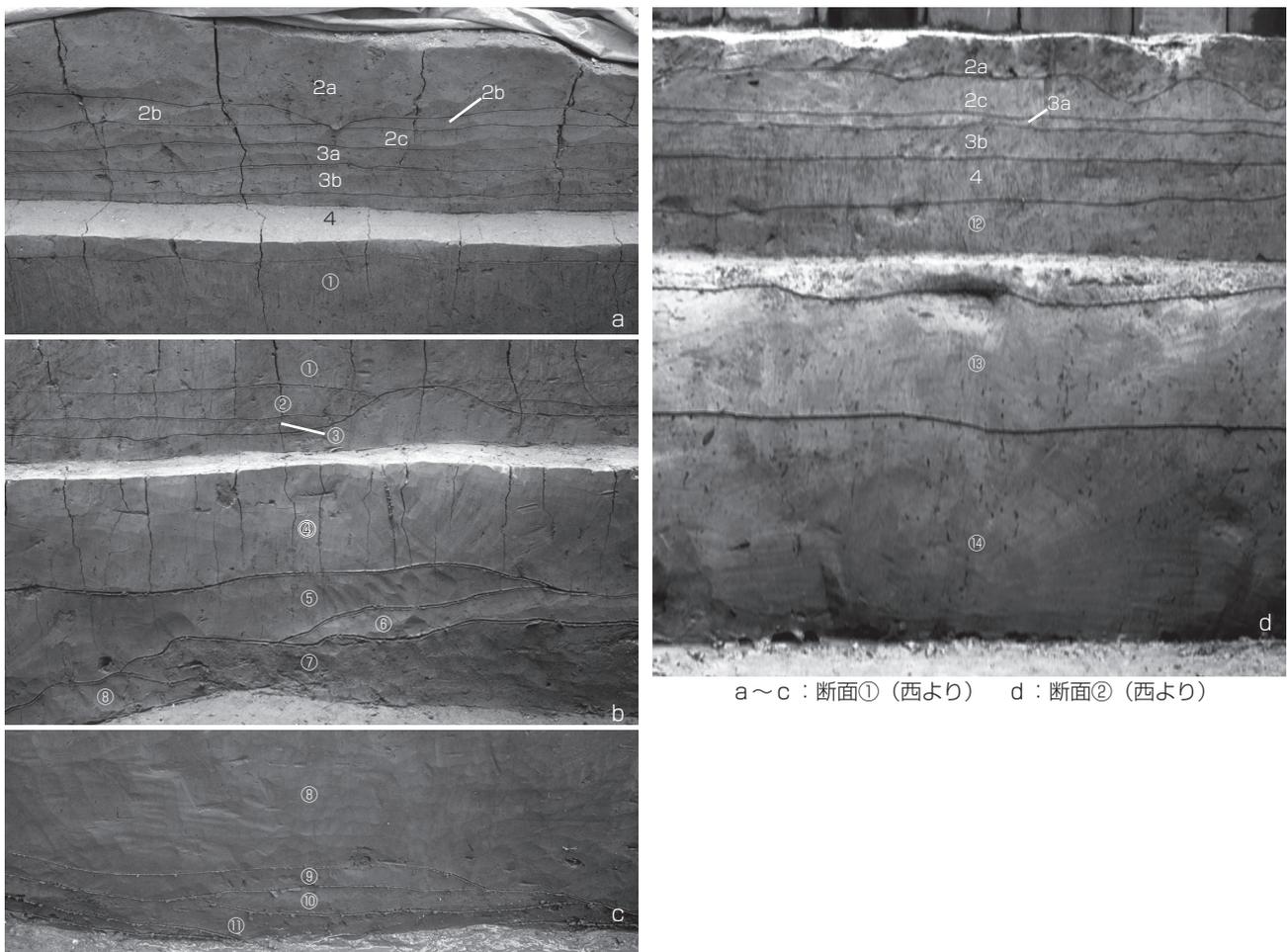


図9 B地点土層断面図(2)

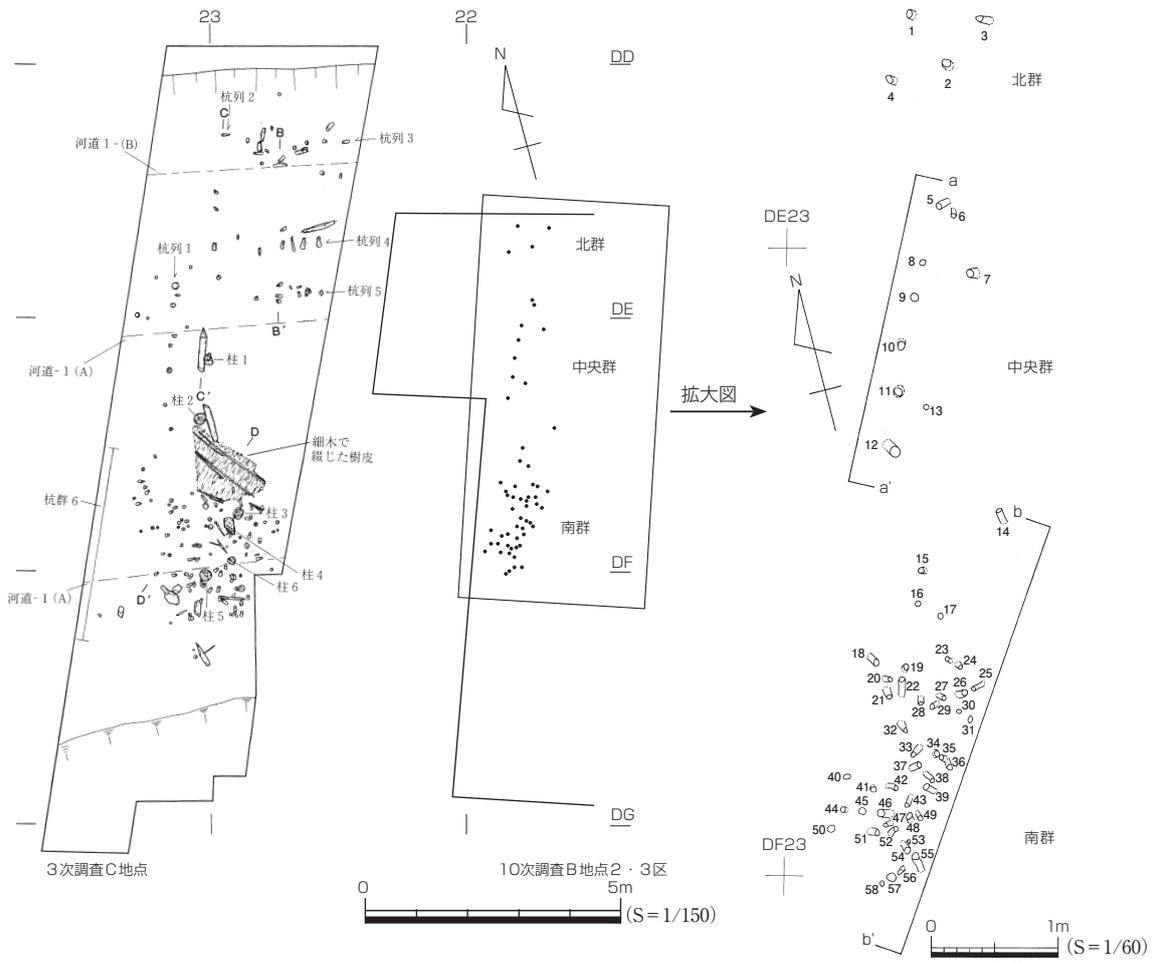
2. 遺構・遺物

(1) 平安時代の杭群 (図10)

B 2・3区 (DD~DF21区) で河道に打ちこまれた杭群を検出した。この杭群を構成する杭の総数は58本である。調査区西辺に沿って、おおむね南北方向に分布しており、本河道の水流方向に直交するように施工されている。これらの杭群は平面的には約1m前後の空隙を挟んだ3群にまとまり、北群 (図10-②1~4: 4本)、中央群 (同5~13: 9本)、南群 (同14~58: 45本) に大別できる (図10②)。このうち中央群は南北方向の列状、南群は密集した分布を示す。杭の検出レベルは高さを計測できた48本のうち、約55%にあたる31本が標高-0.05~0.05mの間に集中し、図10の13層中にあたる。杭先端の到達レベルを計測した中央群を構成する杭の残存長は100~168cmをはかり、比較的長さの長い杭を用いている。杭の到達レベルは特定の高さに偏在せず、標高-0.23~-1.71mまで約1.5mの幅のなかに散在する。

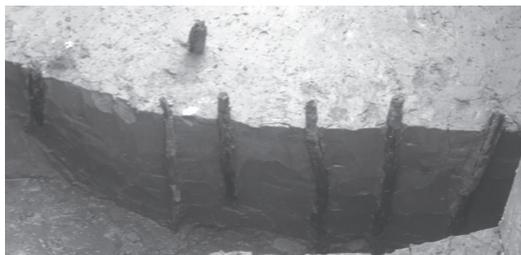
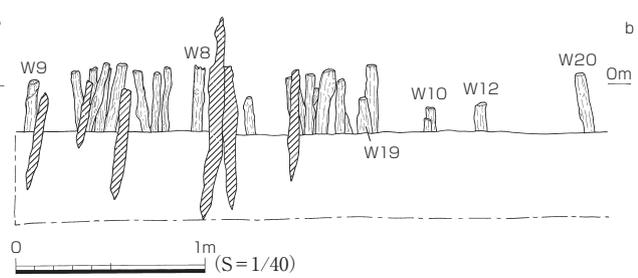
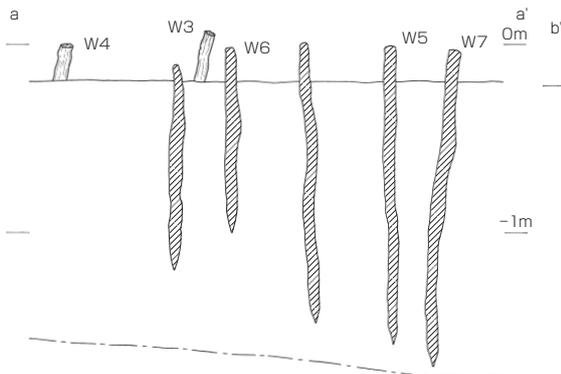
杭は出土した58本のうち、W17のみ木取りが柂目取りの板材を転用したもので、他はすべて丸木取りの自然木を用いたものである (図11~12)。これらの丸木取りの杭は径5~8cmのものが約3/4を占めて主体をなす。加工は先端部と枝打ちを行っただけの簡略なもので、樹皮が観察されるものも多くある。先端加工は端部を斜めに切り出して尖らせるもので、加工面は2~6面が観察されるが、そのうち4・5面を加工したものが約7割を占め

第10次調査



① 第3次調査C地点との位置関係
(山本悦世1990『鹿田遺跡II』図8に加筆)

② 杭群検出状況

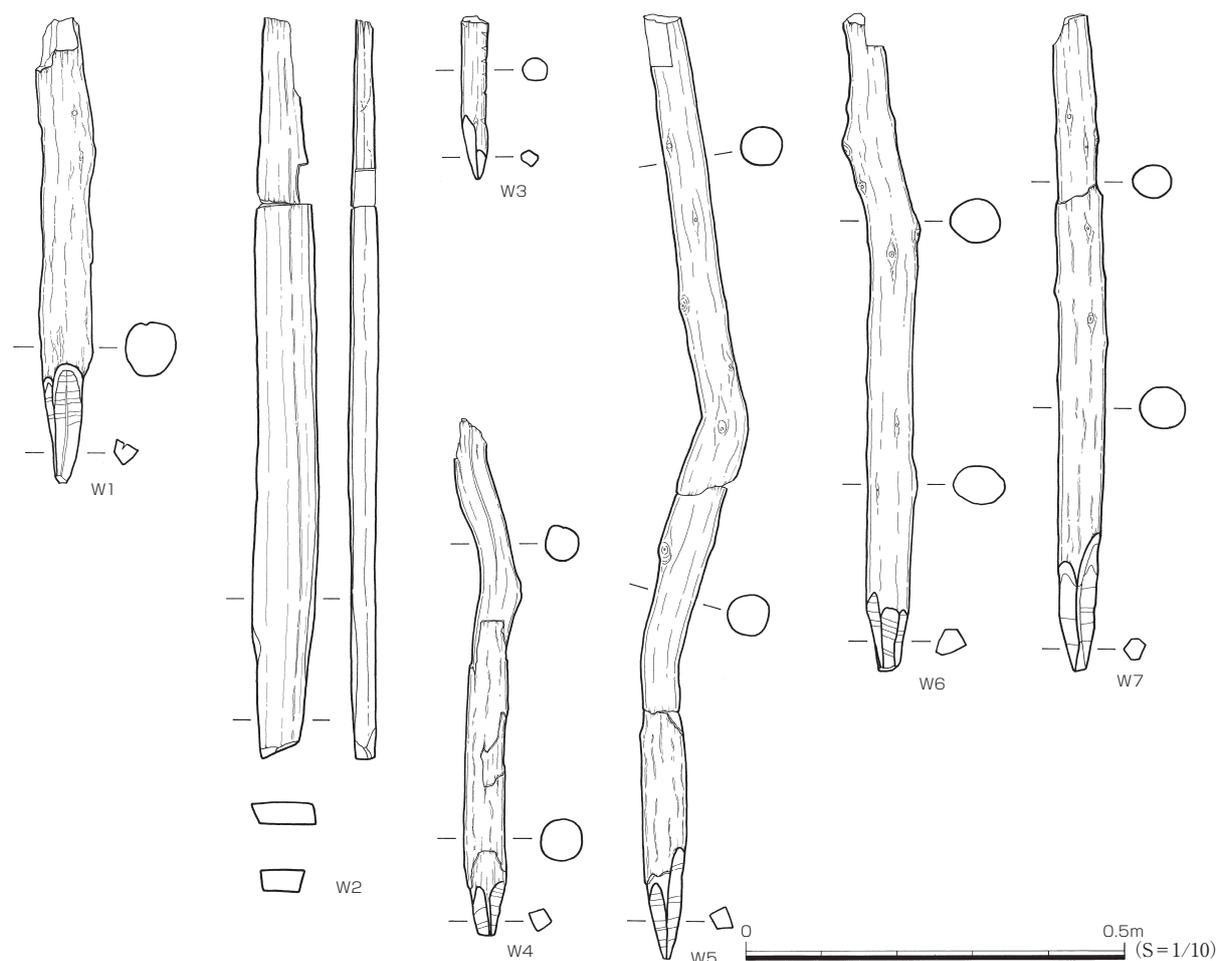


③中央群 (a-a') 打ち込み状況



④南群 (b-b') 打ち込み状況

図10 杭群検出状況



*OKUFは樹種同定の資料番号にあたり、第4章第1節に対応する

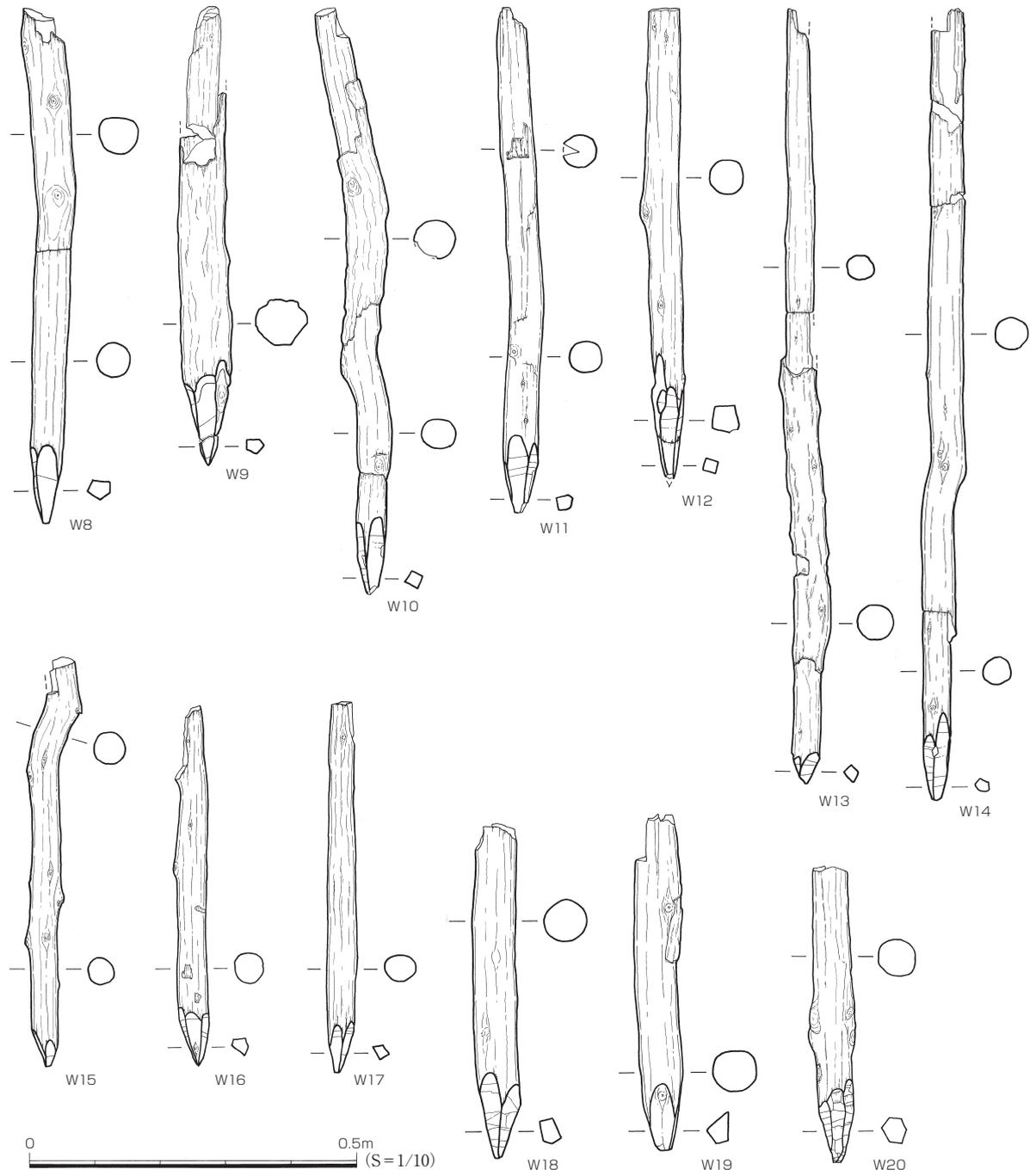
番号	器種	標高 (m)		残存長 (cm)	幅/径 (cm)	厚さ (cm)	先端加工面数	樹種	木どり	出土位置	図12②報告番号	OKUF
		上端	下端									
W1	杭	-	-	61.7	7.0	7.0	4	コナラ属クスギ節	丸木	北群	4	1424
W2	杭	0.136	-0.923	97.6	8.2	3.9	4	ツブラジイ	榎目	北群	4	1443
W3	杭	0.057	-0.882	21.6	3.4	3.0	5	コナラ属クスギ節	丸木	中央群	7	1446
W4	杭	-0.020	-0.720	68.5	5.4	5.6	4	コナラ属クスギ節	丸木	中央群	5	1436
W5	杭	-0.010	-1.590	124.6	7.5	5.4	4	コナラ属クスギ節	丸木	中央群	11	1437
W6	杭	-0.020	-1.000	87.5	7.0	5.6	5	ノグルミ	丸木	中央群	9	1434
W7	杭	-0.040	-1.710	87.2	6.9	5.9	5	コナラ属クスギ節	丸木	中央群	12	1441
-	杭	-	-	27.4	3.1	3.1	-	コナラ属コナラ節	丸木	北群	2	1425
-	杭	0.024	-	50.1	6.8	3.7	2+	コナラ属クスギ節	丸木	北群	3	1449
-	杭	-0.110	-1.200	74.5	5.6	4.1	1?	モチノキ属	丸木	中央群	8	1430
-	杭	0.010	-1.480	73.7	6.0	4.6	-	コナラ属クスギ節	丸木	中央群	10	1440

図11 杭群構成材1 (北群・中央群)

る。樹種は多種にわたるが、そのうちコナラ属クスギ節が約半数を占める。北・中央・南群での樹種構成の違いは特にはみられなかった。

本調査区の西に隣接する第3次調査C地点では、古代に属する橋脚遺構とその周辺に打ちこまれた杭列が確認されている(図10①)。その分布は本調査区と同様、おおむね南北方向の分布を示し、その内部の構成を詳細にみると、河道の法面側に近い北半部は列状の構成が見られ、河道の深部に向かう南半部では密集した分布を示すことがうかがわれる。本調査区で検出された杭群も同様の傾向を読み取れる。北群については調査区外に延びる可能性があり傾向がつかめていない。このように第3・4次調査との共通性が高く、橋脚周辺以外で杭列や杭群は形成されていないことから、本調査区で検出した杭群は橋脚遺構に関連するものと考えられる。時期については、杭自体の年代測定は行っておらず、後述するように河道出土遺物の時期から考えると、9世紀代を中心とする時

第10次調査



*OKUFは樹種同定の資料番号にあたり、第4章第1節に対応する

番号	器種	標高 (m)		残存長 (cm)	幅/径 (cm)	厚さ (cm)	先端加工面数	樹種	木どり	出土位置	図12②報告番号	OKUF
		上端	下端									
W8	杭	-0.263	-1.070	79.4	6.5	5.4	5	ノグルミ	丸木	南群	44	1480
W9	杭	-0.023	-0.770	70.6	8.0	7.1	5	コナラ属クスギ節	丸木	南群	57	1469
W10	杭	-0.169	-1.110	90.7	6.7	5.6	4	コナラ属クスギ節	丸木	南群	16	1458
W11	杭	0.020	-1.000	78.0	5.3	5.1	5	アワブキ	丸木	南群	33	1454
W12	杭	-0.106	-1.072	72.8	6.0	5.5	5	ノグルミ	丸木	南群	15	1460
W13	杭	0.025	-1.160	120	5.8	5.5	4	コナラ属クスギ節	丸木	南群	51	1477
W14	杭	-0.210	-0.328	122.4	5.8	5.0	3	コナラ属クスギ節	丸木	南群	41	1471
W15	杭	0.027	-1.145	63.3	6	5	6	コナラ属クスギ節	丸木	南群	42	1466
W16	杭	-0.043	-0.605	50.5	5.2	4.8	5	コナラ属クスギ節	丸木	南群	28	1457
W17	杭	0.031	-0.800	57.4	4.7	4.0	4	ノグルミ	丸木	南群	47	1456
W18	杭	-	-	51.7	6.8	6.6	4	クマシデ属イヌシデ節	丸木	南群	35	1432
W19	杭	-0.108	-0.620	52.0	7.8	6.1	4	クスノキ科	丸木	南群	24	1447
W20	杭	-0.033	-0.475	46.0	7.3	5.9	6	アカマツ	丸木	南群	14	1473

図12 杭群構成材2 (南群)

表1 杭群構成材〈南群〉一覧

*OKUFは樹種同定の資料番号にあたり、第4章第1節に対応する

番号	器種	標高 (m)		残存長 (cm)	幅/径 (cm)	厚さ (cm)	先端加工面数	樹種	木どり	出土位置	図12②報告番号	OKUF
		上端	下端									
-	杭	-0.205	-0.700	25.0	4.3	4.3	2	コナラ属クスギ節	丸木	南群	17	1450
-	杭	-0.158	-0.331	-	-	-	-	-	-	南群	18	-
-	杭	-0.010	-0.740	-	-	-	-	-	-	南群	19	-
-	杭	-0.153	-1.095	82.0	5.5	4.8	5	クマシデ属イヌシデ節	丸木	南群	20	1472
-	杭	-0.040	-0.860	77.9	6.7	6.1	5	クスノキ科	丸木	南群	21	1467
-	杭	-0.048	-0.464	46.7	3.8	3.8	3	ノグルミ	丸木	南群	22	1464
-	杭	0.057	-0.710	72.9	5.0	4.6	4	コナラ属クスギ節	丸木	南群	23	1448
-	杭	-0.033	-0.230	-	-	-	-	-	-	南群	25	-
-	杭	0.037	-0.675	46.6	6.0	4.5	5	ツブラジイ	丸木	南群	26	1444
-	杭	0.017	-0.580	33.3	4.7	4.5	3	×	丸木	南群	27	1452
-	杭	0.015	-1.087	62.5	5.5	4.9	3	コナラ属クスギ節	丸木	南群	29	1451
-	杭	0.040	-0.755	50.8	4.8	4.7	4	クスノキ科	丸木	南群	30	1438
-	杭	-0.060	-0.905	78.7	7.0	5.9	5	サカキ	丸木	南群	32	1459
-	杭	0.045	-0.850	74.0	6.0	5.8	5	スタジイ	丸木	南群	34	1435
-	杭	0.216	-0.900	-	-	-	-	-	-	南群	35	-
-	杭	0.045	-	22.3	4.5	3.4	-	コナラ属クスギ節	丸木	南群	36	1426
-	杭	0.035	-0.605	38.9	5.7	5.1	4	カエデ属	丸木	南群	37	1455
-	杭	0.032	-0.705	45.6	3.5	3.4	2	コナラ属クスギ節	丸木	南群	38	1442
-	杭	-0.233	-1.250	101.8	7.0	6.3	3	コナラ属クスギ節	丸木	南群	40	1478
-	杭	0.025	-1.150	100.4	7.9	3.7	3	×	丸木	南群	43	1461
-	杭	-0.205	-1.147	91.8	6.9	6.8	4+	イボタノキ属	丸木	南群	45	1474
-	杭	0.031	-0.978	103.3	7.4	6.2	5	コナラ属クスギ節	丸木	南群	46	1468
-	杭	0.040	-0.985	81.0	4.9	4.8	3	コナラ属クスギ節	丸木	南群	52	1453
-	杭	-0.035	-0.590	-	-	-	-	-	-	南群	53	-
-	杭	0.007	-0.659	-	-	-	-	-	-	南群	54	-
-	杭	-0.035	-0.575	-	-	-	-	-	-	南群	55	-
-	杭	-	-	38.8	5.7	5.1	2	コナラ属クスギ節	丸木	南群	56	1427
-	杭	-0.060	-0.600	33.3	5.6	5.3	3	コナラ属クスギ節	丸木	南群	58	1476

期が考えられる。この時期は既調査の年代観に近似するものである。

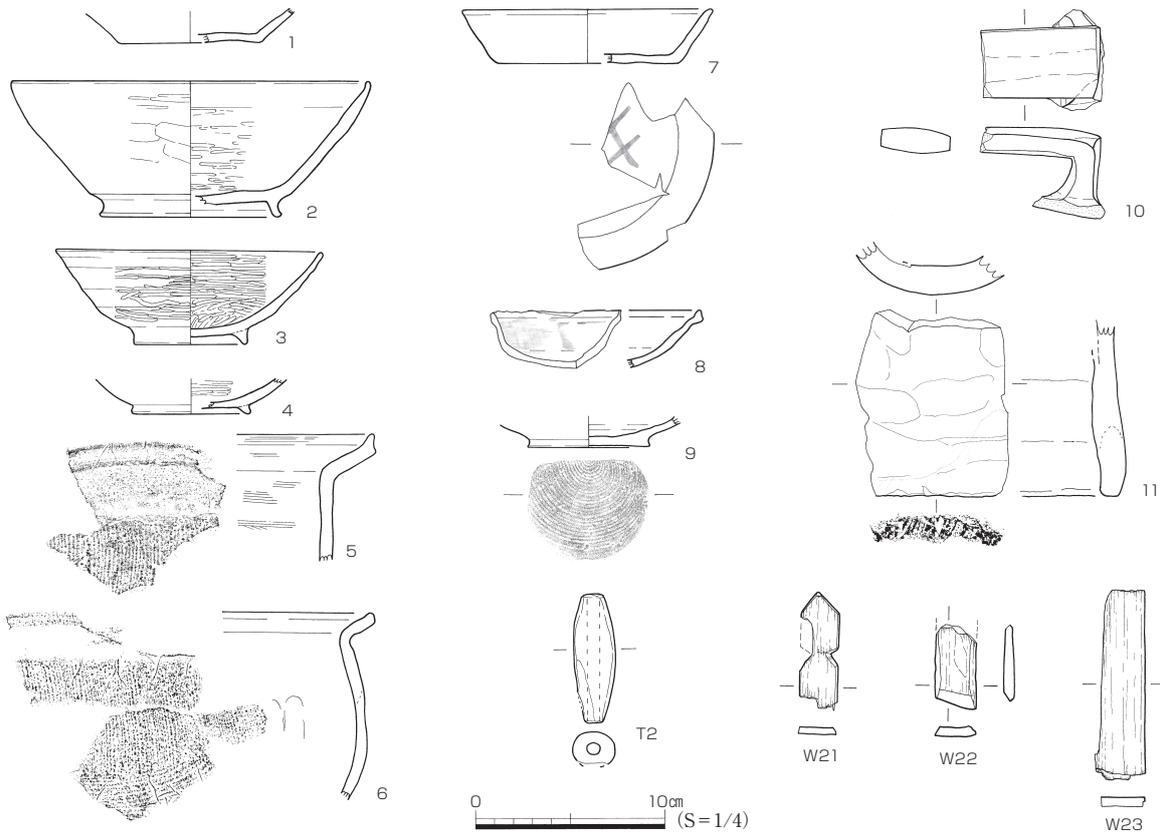
(2) 河道出土遺物 (図13)

土器約1.3箱(約27¹/₂箱)、木器3点、58本、人骨片、獣骨細片である。土器のうち土師器は杯3片・甕9片、須恵器は杯身5片・杯蓋1片・杯蓋転用硯1片・大甕19片・平瓶1片、そのほか黒色土器4片、土師質土器片、須恵質土器片である。1・2の杯・椀は8世紀後半～9世紀代と考えられる。2は黒色化の意識が認められるもので、黒色土器の範疇と考えている。7の須恵器杯身には底部外面に「土」または土偏の文字の墨書が認められる。8は須恵器杯蓋を利用した転用硯と考える。その他に9についても内面に墨の付着が認められることから硯としての利用された可能性がある。11は外面一部に被熱痕跡・煤の付着が見られ、形状から炉壁の一部の可能性が考えられる。

本河道から出土した遺物は8世紀末～12世紀代と時期幅が認められる。8世紀代(10)～9世紀代のもの(1・2・6～8)は河道の下半部から、また10世紀代のもの(3・4)は上半部から出土している。9は最上層から出土している。堆積状況とあわせてみると、河道は9世紀代までは流れがみられ、10世紀後半以降、湿地状へとかわり12世紀代にはその姿は消えていることが窺える。また転用硯(9)・墨書土器(7)等の文字関係資料の出土も注目される。転用硯は第3次調査、第4次調査から各1点、墨書土器は第3次調査から1点、第4次調査から4点出土している。この河道からの転用硯および墨書土器の当該期の出土点数は今回のものを含めると転用硯3点、墨書土器6点と多く、付近に関連する施設等の存在を窺わせるものである。また11のような窯に関連する遺物は、第18次調査B地点土坑(本書32頁)でも認められ、本調査地点の周辺での作業空間の存在を窺わせる。

木器には先述の杭のほか、齋串1、板材2がある。齋串は厚さ約5mmの薄板の頭部を山形に切り出し、側縁に左右から抉りを入れるものである。下半は失われている。板材はいずれも平滑な面が確認される薄板である。

人骨は子供の後頭骨である。河道のなかでも下層にあたる砂層から出土しているが、調査時には他の遺物とともに一括して取り上げており、出土地点の位置、出土状況は記録されていない。形質的特徴の詳細は第4章において報告している(本書59頁)。そのほか獣骨と思われる細片が出土した。(岩崎志保)

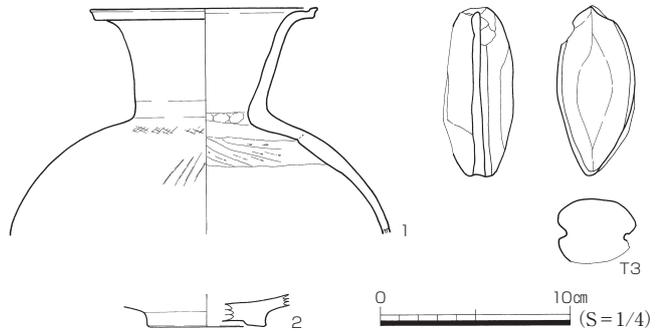


番号	器種・種類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態・手法他	胎土	色調	
1	土師器・杯	-	7.6	-	横ナデ・丹塗り(底外)鈍キリ後軽いなデか、1/3残存	微砂	淡乳灰褐(橙黄褐)	
2	土師器・碗	19.0	9.6	7.2	(口)強い横ナデ(外)ケズリ(外底)ミガキ(内底)工具ナデ、口縁1/6・高台1/4残存	微砂	暗橙灰~黒	
3	黒色土器・碗	14.1	6.0	5.1	ミガキ(外底)横ナデ、黒斑(内)平滑、口縁1/3残存、高台部完存	微砂	黒/淡乳灰褐	
4	黒色土器・碗	-	6.4	-	(外)ナデ、被熱痕?(内)ミガキ、高台1/4残存	微砂、赤色粒	黒/淡橙茶白	
5	土師質・甕	-	-	-	(口)横ナデ(外)タテハケ後下方横ハケ・全面に煤(内)タテナデ上げ	細砂	黄灰褐/暗灰~黒	
6	土師質・甕	-	-	-	(外)口縁部横ナデ、胴部ハケ、スス付着(内)ナデ	細~粗砂	黄灰褐/暗灰	
7	須恵器・杯	13.1	9.5	2.9	横ナデ(底外)墨書「土」?、口縁部1/4残存	微砂	淡灰	
8	須恵器・転用硯	-	-	-	横ナデ(外)下方ケズリ(内)全体に墨・磨な摺り痕なし(口縁)重ね焼き痕	微砂	灰	
9	須恵質・碗	-	6.4	-	横ナデ(底外)回転糸切り・ロクロ回転石<(内)墨付着、底径1/4欠	微砂、僅少	灰白	
10	須恵器・平瓶	-	-	-	把手の一部、ケズリ・ナデ	細砂	青灰(断面：暗紫灰)	
11	土師質・甕壁?	-	-	-	押圧、ナデ(外)被熱・スス付着(接地面)植物圧痕	細~粗砂	灰褐/赤褐~灰褐	
番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	特徴	胎土	色調
T2	土錘	6.8	2.25	1.95	27.5	管状土錘、孔径5mm	微砂	淡橙褐
番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	樹種	特徴		
W21	齋申?	*6.15	2.0	0.3	ヒノキ	頭部：山形に切り出し、両端挟りこみ、下部欠損		
W22	板材	*4.5	2.2	0.6	スギ	下端に斜めにカットした面あり		
W23	板材	*10.1	*2.6	*0.45~0.5	不明	片面、側縁の一部のみ残存		

図13 河道出土遺物

(3) 包含層出土遺物 (図14)

1は須恵器長頸壺で、側溝から出土した。8世紀後半に位置付けられる。2はごくわずかに緑釉が残る。削り出しの蛇の目高台をなし、時期としては9世紀前半の可能性が考えられる。T2は有溝土錘である。中世層から出土した。浅い溝が側縁を全周する。溝の中には整形痕がのこる。



番号	種類・器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	重量(g)	形態・手法他	胎土	色調
1	須恵器・長頸壺	11.8	-	-	-	(口~頸部)横ナデ(肩部外)格子タタキ(肩部内)押圧、鈍ケズリ	微砂	灰
2	緑釉陶器・皿?	-	6.3	-	-	(外)ナデ(内)ナデ、一部に淡緑色釉(底)ケズリ、蛇の目高台	均質	淡灰
T3	土錘	長6.75	幅3.1	厚2.6	*53.8	有溝土錘、溝幅3~4mm、端部~背面欠損	細砂	茶褐

図14 包含層出土遺物

第3章 第18次調査B・C地点

第1節 調査の経過と概要

1. 経緯と経過

医学部附属病院中央診療棟新営工事および病棟周辺の整備が2007年度に計画された。中央診療棟本体工事部分をA地点、防火水槽設置工事地点をB地点、東門周辺整備工事地点をC地点として、それぞれ発掘調査を実施した（調査地点の位置は第2章図3参照：8頁）。

(1) B地点

経緯 病棟周辺整備工事の一環で、防火水槽が病棟東側の、東門付近に設置されることとなった。防火水槽設置のためには、約40㎡の範囲を、現地表面より4mほど掘削する工事が必要とされた。当該地点は、周知の遺跡である鹿田遺跡の範囲内であり、これまでの調査成果から当該地点にも遺構・遺物の存在が予想されたため、事前の発掘調査を実施することとなった。調査面積は、43.2㎡（7.2×6.0m）である。防火水槽工事時の掘削が深くなる都合から、調査区四周は発掘調査前の時点で矢板によって囲まれることとなった。調査は、調査研究員1名が担当することとなった。

経過 表土掘削は、2007年10月15日に実施した。発掘調査は、翌日の10月16日に開始し、最終的に調査が終了したのは11月1日となる。発掘調査前の、本調査地点周辺の北側と東側において2007年度に実施した立会調査（ガス管理設）では、中世段階の井戸（または土壌墓）や溝が検出されていた¹⁾。こうした遺構は、鹿田遺跡において通有なものであり、本調査地点にも同様の遺構および包含層が広がることが調査前に想定された。

しかしながら表土剥ぎを行い発掘調査を開始した結果、調査区四周の側溝を整備する中で、周囲の立会調査で確認した包含層とは異なる土層が調査区の大部分において厚く堆積することが判明した。この土層については、近世瓦を含むことと、想定した標高から中世以前の包含層が検出されないこと、および土質から、近世段階の河道埋土と推定した。河道埋土の面的広がりや深度を把握するため、側溝幅を拡張しながら調査を行った結果、調査区北辺において河道の北肩と護岸と考えられる横木を検出した（10月17日）。翌日からは、河道内の規模・構造を確認することをめざした。側溝箇所のみを深く掘削することは困難であったため、平面的な掘削と側溝を下げる作業を繰り返した。なお、瓦を主体とする河道内遺物の多くは、河道斜面直上にみられたため、河道埋土の上層の掘り下げについては手掘りとともに重機も併用した。調査4日目（10月22日）には、調査区南辺の側溝において、本調査区でもっとも河道が深くなる箇所を確認した。

これにより調査地点内における河道の様相が判明し、河道が本調査地点に入り江状に入り込むという様相が明らかとなった。10月23日以降、河道埋土の掘り下げを継続し、北岸の護岸施設等の構造について調査を行った。25日には、近世の全体写真を撮影した。

北岸斜面の調査中、炭層と古代後半の土器が集中する箇所の存在が注意された。河道の形成時期が古代後半まで遡る可能性も考慮しつつ、10月26日からこの土器・炭層集中箇所の調査をした結果、土器および炭層は、河道に上半部が削平されるかたちで残存していた平安時代中頃の井戸と土坑に伴う



図15 井戸の調査風景

ものであることが判明した。井戸の調査とあわせて、北壁において河道により掘削されることなく残存した近世以前の包含層の調査を実施した。11月1日に平安時代中頃の全体写真を撮影し、すべての調査を終了した。

(光本 順)

註 (1) 光本 順2008「環境整備（道路等）工事」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2007』pp.40-42

(2) C地点

経緯 病棟の新規開設にあわせた周辺環境整備工事の一環として、敷地東側を南北に通る一般道からの円滑なアクセスをはかる道路敷設が計画された。これは枝川用水の一部を地中化して通路とするもので、既設の護岸および市道の一部を掘削・改修する計画である。対象範囲はいずれも岡山大学の敷地外にあたるが、岡山大学の施設整備工事に起因することから、岡山市教育委員会との協議の結果、当センターが発掘調査を実施することとなった。掘削対象となる範囲のうち、市道部分は約11×5m（調査面積：約56㎡）の範囲を発掘調査とし、調査員1名が調査にあたることとした。護岸部分は約12mの範囲で擁壁を改修する内容で、大規模な掘削を行わない計画であったため、発掘調査終了後に調査員1名が壁面調査を中心とした立会調査で対応することとした。

経過 造成土の除去は2007年12月25日・26日に行い、発掘調査は12月27日から着手した。本地点の北に位置する第18次調査b地点では、近世の河道が東から西へ入り込んでいる状況が確認されており、本調査区にも河道や谷のような低地が連続することが予測された。そこで、土層の堆積状況を確認するため、先行して調査区北半の東西辺に沿った側溝を掘削した。断面観察の結果、本調査地点では河道や谷などの低湿地性の堆積物は確認されず、下層に至るまで比較的安定した微高地状の堆積を示していることが判明した。

遺構検出は、近世土坑が確認された造成土下面、断面観察で遺構を確認した6・7層および弥生時代の基盤層と考えられる11層上面で実施した。その結果、造成土下において土坑2基、6層上面で溝3条、7層上面で小溝群、11層上面で土坑2基を確認した。すべての記録を作成し、2008年1月16日に発掘調査を終了した。（野崎）

2. 調査と報告書作成体制

【発掘調査】（発掘調査年度：2007年度）

調査主体	岡山大学	学 長	河野伊一郎
調査担当	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	センター長	梶原 憲次
	〃	副センター長	稲田 孝司
調査研究員：調査主任（B地点）	〃	助 教	光本 順
調査主任（C地点）	〃	助 教	野崎 貴博
運営委員会			
センター長	梶原 憲次	環境理工学部学部長	沖 陽子
副センター長	稲田 孝司		(調査研究専門員)
大学院社会文化科学研究科教授	新納 泉	埋蔵文化財調査研究センター准教授	山本 悦世
大学院社会文化科学研究科教授	久野 修義		(調査研究室長)
大学院医歯薬学総合研究科教授	大塚 愛二	事務局施設企画部長	入江 良広
大学院自然科学研究科教授	柴田 次夫		

【報告書刊行】（報告書刊行年度：2012年度）

運営委員会			
センター長	北尾 善信（12月まで）	門岡 裕一（2013年1月より）	

副センター長	新納 泉	大学院環境学研究科教授	沖 陽子
大学院社会文化科学研究科教授	久野 修義		(調査研究専門委員)
大学院医歯薬学総合研究科教授	大塚 愛二	埋蔵文化財調査研究センター教授	山本 悦世
大学院自然科学研究科教授	柴田 次夫		(調査研究室長)
		事務局施設企画部長	秋山 明寛

3. 調査の概要

(1) B地点

本調査地点で検出した遺構は、平安時代中頃の井戸1基、土坑2基、江戸時代後半の入り江状遺構である(図16)。平安時代中頃よりも古い遺構は、本調査地点内では見つかっていない。調査区内は、江戸時代後半の入り江状遺構が大部分を占めていたため、中世以前の基本土層自体の多くは失われていた。

平安時代中頃 当該期の遺構は、調査区中央付近の井戸1基と土坑2基からなる。土坑1・2は井戸1を切る形で構築されている。両遺構の上部については入り江状遺構により削平を受けたものである。これらの遺構からは土器の良好な一括資料が得られた他、井戸1において猫形木製品が出土した点が注目される。

近世・近代 近世遺構として入り江状遺構を検出した。時期は出土遺物から江戸時代後半期～明治・大正時代に属する。調査区では北岸部分および北岸から南へ落ちる河道部分を検出した。北岸には板と杭等による護岸がなされていた。河道が最終的に埋まった時期は明治～大正時代に降る。埋没した河道上には耕作地が形成された。

(2) C地点

本地点では弥生時代・鎌倉時代・江戸時代の遺構を確認した(図17)。

弥生時代の遺構は土坑2基である。鎌倉時代の遺構は小溝群1列・溝3条でいずれも南北方向に延びるものである。江戸時代の遺構は土坑2基で、調査区北東部で確認した。

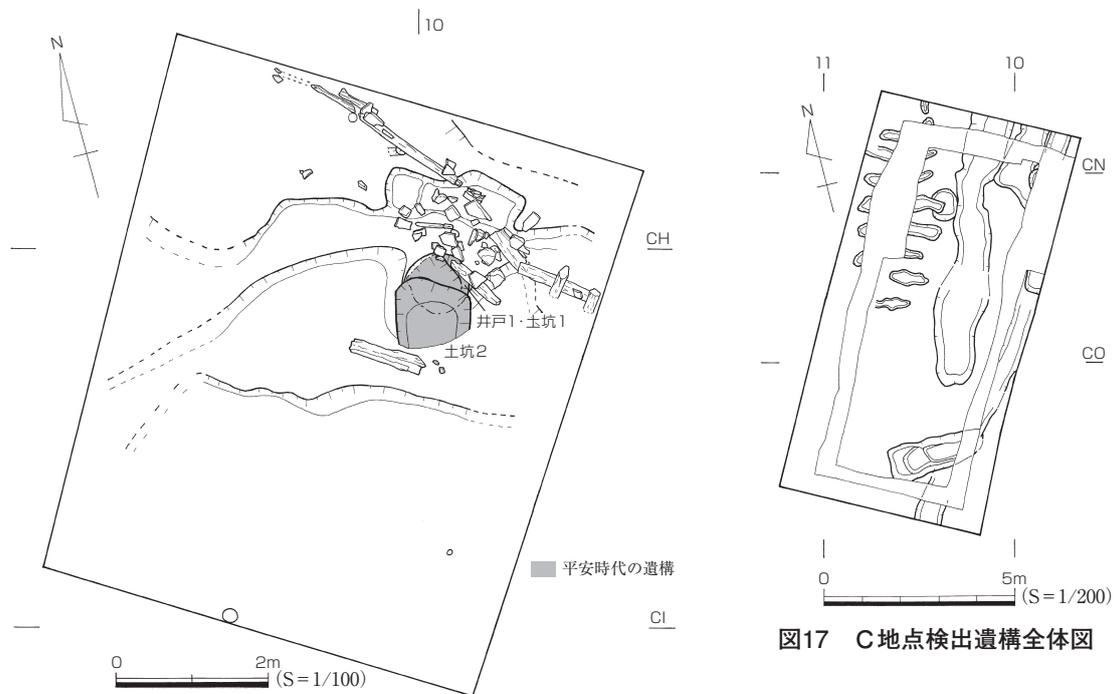


図16 B地点検出遺構全体図

図17 C地点検出遺構全体図

表2 第18次調査B・C地点遺構一覧

a B地点

種類	番号	時期	上面形	長辺/短辺 (m) (残存値)	底面高 (標高m)	深さ (m)	断面形
井戸	1	平安時代中頃	隅丸方形	0.76~0.77	-1.46	1.57	Y字形
土坑	1	平安時代中頃	隅丸方形	0.46/0.50	-0.27	0.38	掃鉢状
土坑	2	平安時代中頃	不整長方形	1.89/(1.42)	-0.29	0.30	U字形

b C地点

種類	番号	時期	平面形	規模 (m) (現存値)	底面高 (標高m)	深さ (m)	断面形	軸方向
土坑	1	弥生	不整隅丸長方形	2.59/0.97	0.31	0.31	逆台形 (有段)	-
土坑	2	弥生	楕円形	0.84/0.65	0.44	0.15	底面凹凸	-
土坑	3	近世	(楕円形)	(0.66/0.2)	0.38	0.57	U字形	-
土坑	4	近世	(方形)	(0.58/0.55)	0.49	0.46	箱形	-
小溝群		中世	-	長さ4.8 幅2.25	0.8~0.9	0.1~0.2	皿状	南北
溝	2	中世	-	長さ2.2 幅 (0.85)	0.64~0.7	0.26	皿状	南北
溝	2	中世	-	長さ7.2 幅1.16	0.64~0.82	0.16~0.33	皿状	南北
溝	3	中世	-	長さ8.5 幅 (0.78)	0.67~0.73	0.27	皿状	南北

第2節 B地点の調査

1. 層序

本調査地点は、近世段階の河道が大部分を占めていた関係で、弥生時代～江戸時代段階の基本土層（包含層）については、調査区北辺付近のみに残存していた。したがって、本調査地点内において時期別に旧地形を復元することは困難である。以下、基本層序と河道埋土の内容について述べる（図18・19）。

1層 (近代)：造成土で、主に1917（大正6）年の岡山医学専門学校が鹿田キャンパスに移転された際のものである。上面標高は3.3m、厚さは1.9m前後となる。

2層 (近代)：青灰色～灰色砂質土となる。調査区全体に広がる土層で、上面標高は1.40～1.50mとなり、ほぼ水平堆積を呈する。厚さ10～15cmとなる。既往の調査から、造成がなされる直前の近代耕作土と考えられる。

3層 (近代)：緑灰黄色～灰黄色砂質土で、鉄分を多く含む。2層同様、調査区全体に広がる土層である。上面標高は1.30～1.40mで、厚さは10～20cmを測る。近世・近代の河道の上に形成された層であることから、所属時期は近代と考えられる。灰色を呈し、鉄分を多く含むことから、耕作土と考えられる。

4層 (江戸時代)：明黄灰色砂質土で、鉄分を多く含む。調査区北東部のみに残存した。北壁では2層に細分されたが、いずれも黄灰色系の色調をなす土層である。上面標高は1.20mで、厚さは25～28cmを測る。本層上面まで江戸時代河道の肩があるため、所属時期は江戸時代と考えられる。

5層 (平安時代)：暗灰褐色～淡灰黒色粘質土である。調査区北東部のみに残存した。北壁では2層に細分した。上面標高は0.92mで、厚さは15cmを測る。出土遺物が認められないため、層の時期は定かでないが、層序および近隣の調査との対応を想定すれば、平安時代の範囲に含まれるものと推定しうる。なお、上部が河道によって削平された井戸1・土坑1・2が、本層上面から掘り込まれていたものと仮定すれば、本層の形成時期は平安時代中頃までに形成されたものと考えられる。

6層 (古墳時代)：暗灰色～暗灰黄色粘質土で、調査区北東部のみに残存する層である。上面標高は0.75mで、厚さは8～10cmを測る。出土遺物はない。層序および周辺調査との対応を想定するならば、

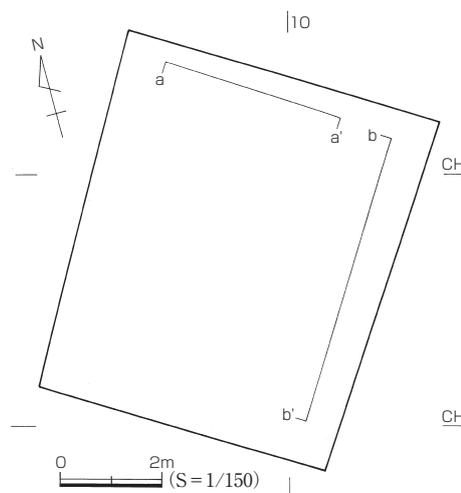
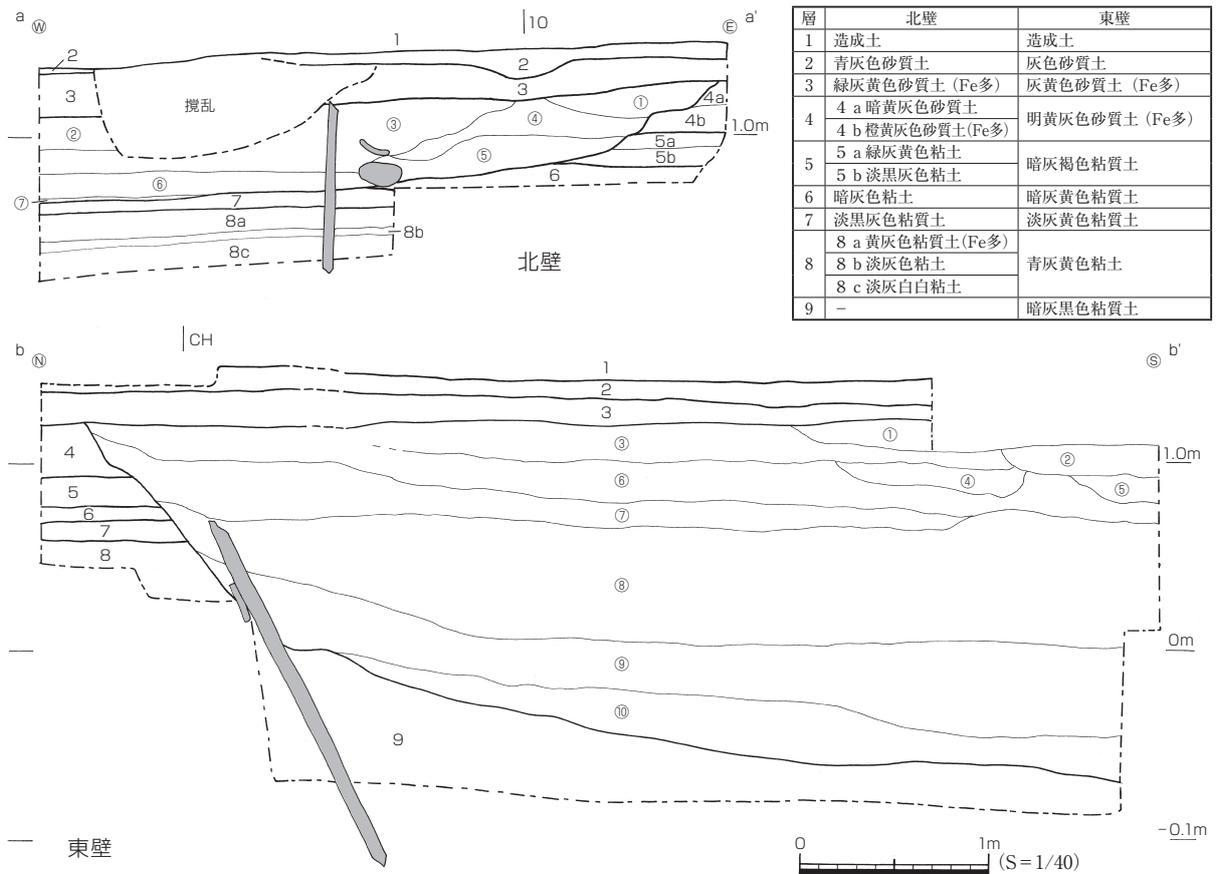


図18 土層断面の位置



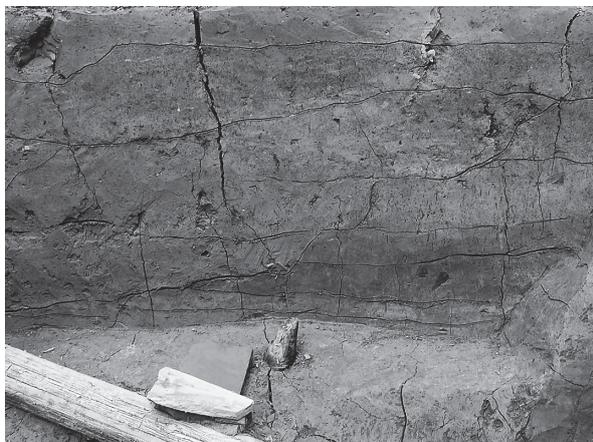
河道〈北壁〉

- ① 淡茶褐色砂質土 (Fe多、灰色粘土ブロック多)
- ② 暗青灰色砂質土 (Fe多)
- ③ 暗青灰色粘質土 (Fe多、白色砂・黄色砂・暗青灰色砂ブロック多)
- ④ 淡青灰色粘質土
- ⑤ 淡青灰色粘質土
- ⑥ 暗青灰色粘質土 (黄色砂・暗青灰色砂ブロック多)
- ⑦ 暗灰色粗砂

*河道埋土番号は、北壁と東壁で別々に付与

河道〈東壁〉

- ① 橙褐色砂質土 (灰色砂ブロック)
- ② 暗灰色砂質土 (灰色砂ブロック多)
- ③ 茶灰褐色砂質土 (灰色砂ブロック多)
- ④ 灰褐色砂質土 (灰色砂ブロック多)
- ⑤ 暗灰色砂質土 (灰色砂ブロック多)
- ⑥ 黄灰色粘質土 (Fe多、灰色砂ブロック多、青灰色粘土ブロック)
- ⑦ 黄灰色粘質土 (Fe多、灰色粘土・青灰色粘土ブロック多)
- ⑧ 暗緑灰色粘質土 (粗砂多)
- ⑨ 淡灰黒色粘質土 (微砂多、砂と粘土互層)
- ⑩ 暗灰色砂質土 (微砂多)



①北壁断面 (南から)



②東壁断面 (西から)

図19 土層断面

本層の時期は古墳時代初頭頃の包含層と推定される。

7層（弥生時代後期）：淡黒灰色～淡灰黄色粘質土で、鉄分を多く含む。黒みがかった土質から、湿地状の環境に於ける堆積が推定される。調査区北壁周辺に残存する。上面標高は0.70mで、厚さは10～13cmを測る。出土遺物はないが、同様の層は本書収載の周辺地点、すなわち第10次調査A地点、第18次調査C地点においても確認されている。本層は弥生時代後期前半までに形成されたものと考えられる。

8層（弥生時代中期以前）：青灰黄色粘土を主体とする層である。調査区北側に残存した。北壁では3層に細分したが、いずれも灰色系統の粘土ないしは粘質土である。本層の上面標高は0.58mで、厚さは30cm前後と考えられる。出土遺物はないが、周辺の調査成果から推定すれば、弥生時代中期以前の無遺物層と考えられる。

9層（弥生時代中期以前）：暗灰黒色粘質土で、東壁・西壁で確認した。土質から、湿地状の堆積環境を示すものと考えられる。層上面が河道によって切られているためその標高は定かとはいえないが、0.20m前後と考えられる。出土遺物はないものの、8層同様に弥生時代中期以前に属するものと考えられる。

<河道の堆積状況>（図19）

河道は4層から掘り込まれる形で形成されていた。近世・近代に属し、入り江状遺構に伴うものである。上面標高は1.20m、最深部の標高は-0.70m、深さは1.90mを測る。河道内の土層は、東壁で1～10層、北壁で1～7層を確認した。なお層番号はそれぞれの壁面で別個に付与したものである。河道の堆積状況は以下の通りとなる。

東壁では、土質から下半に堆積する8～10層と、それらより上層に二大別しうる。8～10層は、粗砂または微砂を含む層である。上半の層は、標高で-0.70～0.80mの範囲に位置する。9層では、砂と粘土が互層となる状況が確認された。一方、上半の1～7層は、いずれの層においても鉄分の沈着が認められるとともに、灰色砂ブロック（1～5層）、灰色粘土ブロック・青灰黄色粘土ブロック（6・7層）が含まれる。下半の層は標高で0.63～1.24mの範囲にある。以上の土質からみると、8～10層については河道の自然堆積に由来し、1～7層については河道を埋めた際の埋土であるものと推定される。

北壁では、河道の北岸付近の土層の堆積状況が窺える。最下層として薄く堆積する7層は粗砂からなるもので、東壁における下半の8～10層と同じく、河道内の自然堆積層であるものと考えられる。一方、1～6層については、しばしば砂質のブロックを含む層である。またその堆積範囲は標高で0.68～1.28mであり、東壁における上半の層と同様の位置にある。したがって、北壁1～6層に関しては、東壁と同じく河道を埋める際の埋土としての性格が推定される。

2. 遺構・遺物

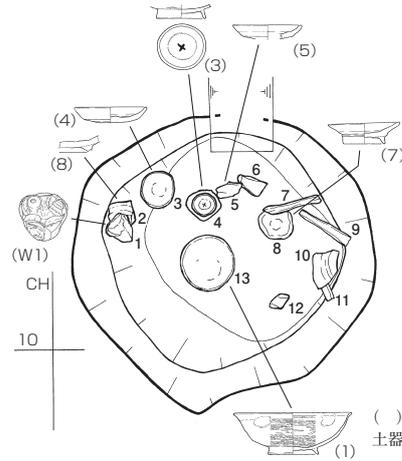
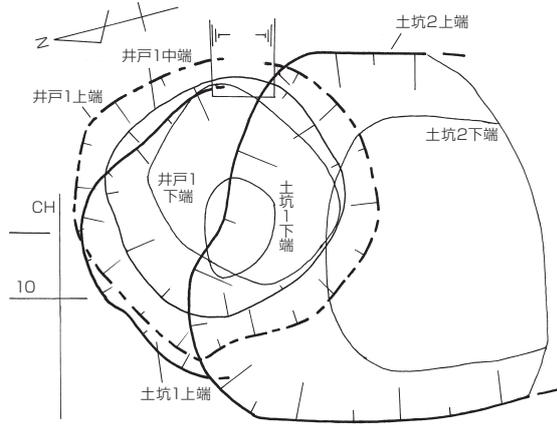
(1) 平安時代

平安時代中頃の遺構として、井戸1基、土坑2基を検出した。土坑2基については井戸上半を切って作られたものである。土坑1については、調査当初は井戸1埋土の一部と認識していたが、土坑2との底面標高がほぼ等しい点と、土坑2と同様に炭層や炉壁を有する点から、井戸1とは分離し、土坑として認識するに至った。これら井戸と土坑について、以下では層位の切り合い関係を明示する意味で、一連の平面図・土層図において示すこととした。

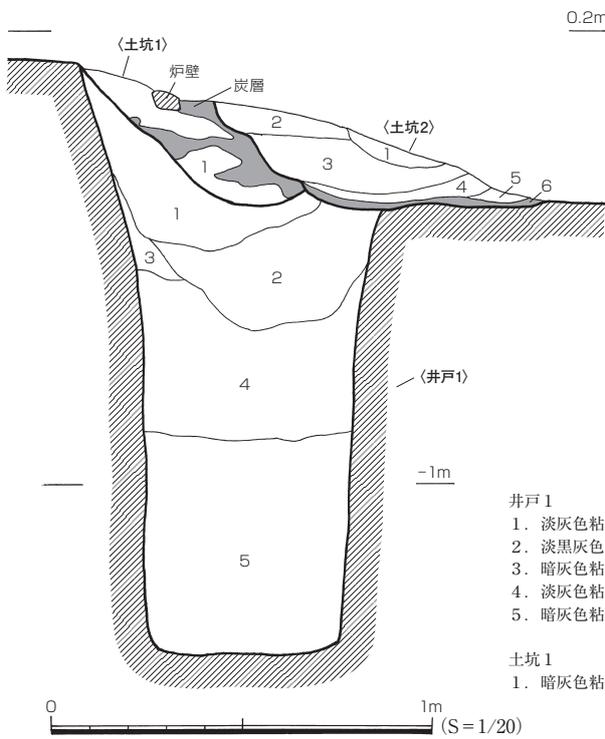
a. 井戸

井戸1（図20～22）

CH9区に位置する。土坑1・2および江戸時代～明治時代の入り江状遺構に井戸上部は切られていた。検出面は、入り江状遺構北岸の緩やかな斜面部分となる。上面標高は0.11mを測る。古代・中世層と推定される5層上面が0.92mであることから、本井戸は上部が80cmほど削平を受けたものと考えられる。標高-1.28m以下（井戸底



()は図21・22番号に対応
土器・木製品：S=1/10



井戸1

1. 淡灰色粘質土 (黄色粘土ブロック)
2. 淡黒灰色粘質土 (黄色粘土ブロック多)
3. 暗灰色粘質土 (黄灰色粘土ブロック)
4. 淡灰色粘質土
5. 暗灰色粘質土 (有機質多)

土坑1

1. 暗灰色粘質土 (灰・灰縞状)

土坑2

1. 緑青灰色粘質土
2. 青灰色粘質土
3. 暗緑灰色粘質土 (灰色粘土ブロック、下面に有機質)
4. 暗灰色粘質土
5. 暗茶灰色粘質土
6. 黒灰色砂質土 (炭・灰多)

遺物出土位置一覧

遺構名	位置番号	器種	上端	下端	図21・22内の掲載番号
井戸1	1	猫形木製品	-0.226	-0.285	W1
井戸1	2	土師質台付杯	-0.308	-0.327	8
井戸1	3	土師質皿	-0.371	-0.390	4
井戸1	4	土師質椀	-1.190	-1.230	3
井戸1	5	土師質皿	-0.529	-0.543	5
井戸1	6	土師質鍋	-0.548	-0.588	-
井戸1	7	木片	-0.72	-	-
井戸1	8	土師質台付皿	-0.800	-0.830	7
井戸1	9	木片	-0.84	-0.845	-
井戸1	10	土器	-0.384	-0.345	-
井戸1	11	木片	-0.757	-	-
井戸1	12	土器	-1.1	-1.205	-
井戸1	13	土師質椀	-1.225	-1.290	1
井戸1	-	土師質皿	-0.930	-1.010	6
井戸1/ 土坑1	-	須恵質瓦	-	-	9
井戸1/ 土坑1	-	土師質椀	-	-	2



井戸1 完掘状況 (南から)



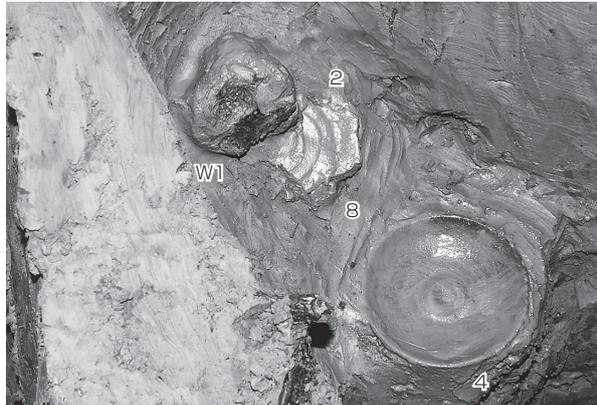
井戸1 土層断面 (西から)

図20 井戸1、土坑1・2

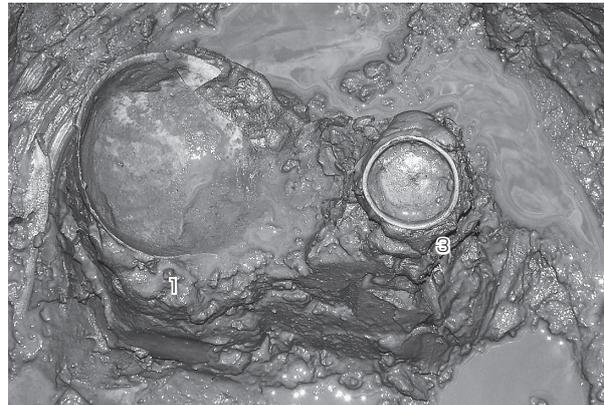
面から18cm上)の井戸壁面が湧水砂層となる。

平面形については、直線的なラインが上端・中端でみられるため、隅丸方形と捉えられる。規模は上面で南北幅0.77m、東西幅0.76m、底面幅は0.47mとなる。深さは1.57mを測る。断面形はY字状を呈する。

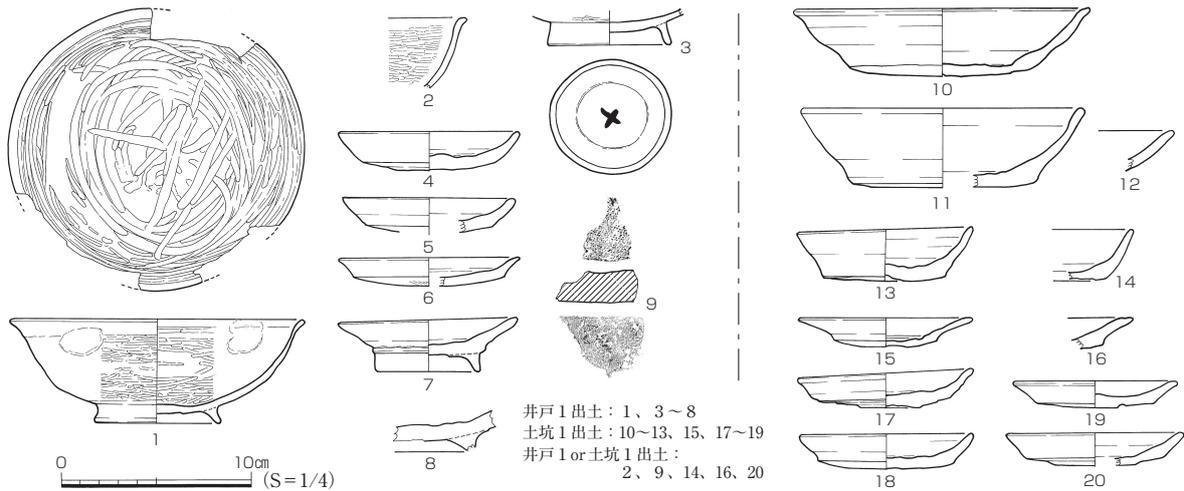
埋土は5層からなる。土質と堆積状況から、埋土は1・2層、3～5層の2つのグループに大別することが可能である。1・2層は、黄色粘土ブロックを含む層で、1層が淡灰色粘質土、2層が淡黒灰色粘質土となる。1・



井戸1 猫形木製品・土器出土状況 (西から)



井戸1 底面付近の土器出土状況



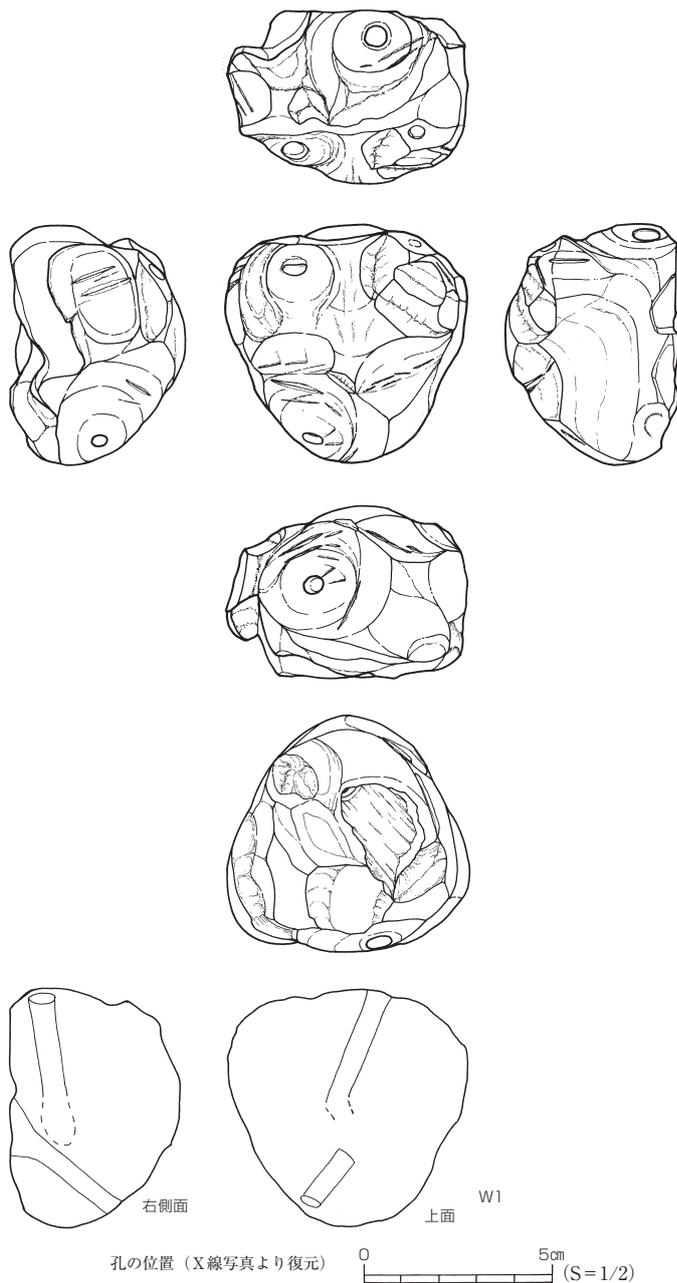
井戸1出土：1、3～8
土坑1出土：10～13、15、17～19
井戸1 or 土坑1出土：2、9、14、16、20

番号	器種	口径	底径	器高	特徴	色調：内/外	胎土
1	土師質・椀	15×15.6	6.7×6.8	5.5～5.6	器壁厚不均一、補修痕(内)・ミガキ幅広・見込み部は「×」(外)凹凸残・ミガキ幅狭く密、ほぼ完存(口)丁寧な横ナデ(内外)ミガキ密、器壁厚均一	淡黄灰白/白	微砂少、硬質
2	土師質・椀	-	-	-	(内)平滑・ミガキ密(高台)直線的形態・内面中央に「十」の墨書、1/1残	黄白、<断>黒	微砂少、硬質
3	土師質・椀	-	6.3×6.5	-	(内)平滑・ミガキ密(高台)直線的形態・内面中央に「十」の墨書、1/1残	淡灰(褐)	微砂少、硬質
4	土師質・皿	9.7	7	2	横ナデ(底内)横ナデの凹凸◎(底外)匱キリ2回転・中央は工具ナデ、完存	灰褐(一部黒褐)	微砂
5	土師質・皿	9.1	6.7	1.8～1.9	横ナデ(底外)ヘラキリ(外)重焼痕による変色、1/3残	乳灰褐	微砂、金雲母
6	土師質・皿	9.5	8	1.5	(底内)ナデ、体部ナデ前に調整(底外)周縁匱キリ・中央匱キリ後工具ナデ、1/3残	淡乳灰白	微砂、硬質
7	土師質・台付皿	9.5	5.6	2.6～2.85	(内)底部周縁に凹みが巡る(底内外)中央は押圧(高台)直線的、ほぼ完存	白	微砂、硬質
8	土師質・台付杯	-	-	-	横ナデ	淡黄灰褐	微砂多、角閃石?
9	須恵質・瓦	-	-	-	(上面)布目(下面)ナデ+タタキ?	淡灰	微砂
10	土師質・杯	15.5	10	3.6	口縁に面を形成(底外)匱キリ後ナデ、ロクロ回転左(内)タール状付着物、1/2残	(乳)灰褐/黒灰褐	微砂角閃石多
11	土師質・杯	15	10.6	4.2	横ナデ(底外)匱キリ後軽いナデ、1/3残	淡乳灰褐	微砂、金雲母?
12	土師質・杯or皿	-	-	-	丁寧な横ナデ	暗灰褐	微砂、角閃石
13	土師質・杯	9.2×9.3	6.5×6.6	2.5～2.9	(底内)ロクロナデの凹凸◎(底外)匱キリ2回転・中央ナデ、ロクロ回転左、完存	淡乳灰褐	微砂、金雲母多
14	土師質・杯	-	-	-	横ナデ(底外)匱キリ・周縁押圧	黒灰褐/淡褐	微砂少、角閃石?
15	土師質・皿	9.2	5.4	3.5	(底内)押圧・周縁に沈線状凹み(底外)匱キリ後中央押圧+ナデ、仕上がりシャープ、1/2弱残	灰白/淡灰白	微砂少、硬質
16	土師質・皿	-	-	-	横ナデ(口内)面+凹みが巡る(底外)匱キリ	暗灰/灰褐	微砂、金雲母?少
17	土師質・皿	9.3	6.9	1.4～2.2	横ナデ(底外)匱キリ3回転、ロクロ回転左(口)一部黒色(煤?)、完存	淡黄灰(褐)	微砂、角閃石?少
18	土師質・皿	9.3	7.2	1.8～1.9	横ナデ(底内)中心部凹凸◎(底外)周縁ヘラキリ・中心部ナデ、2/3残	暗灰褐/灰褐色	微砂、金雲母?
19	土師質・皿	8.7	6	1.4	横ナデ(底内)仕上げナデ(底外)匱キリ2回転、ロクロ回転左、1/3残	淡黄灰白	微砂少、細かい
20	土師質・皿	9.4	7.3	1.7	横ナデ(底外)周縁匱キリ・中央ナデか?、やや軟質、1/3残	淡灰褐	微砂、金雲母

図21 井戸1・土坑1出土遺物

2層については、中央に向かって落ち込むように堆積していた。これについては、井戸を埋めた後に埋土が下がったことによるものと想定される。3～5層は暗～淡灰色の粘質土である。3・4層の下面ラインは、中央が僅かに下がるものの、ほぼ水平堆積をなす層である。5層の暗灰色粘質土中では有機質が多く認められた。

出土遺物は、土器・木製品からなる⁽¹⁾。遺物の出土状況については、主として1・2層中、5層上面、5層中(井戸底面付近)の3つのグループに分かれる。1・2層出土遺物としては、猫形木製品(図24-W1:位置番号1)と台付杯(図23-8:位置2)、土師質皿2点(4:位置3、5:位置5)、土師質鍋片(位置6)がある。



遺物は両層が堆積する落ちの傾斜面から底面を中心に分布する。猫形木製品は、1層中の傾斜面に位置し、右側面を下に、鼻を西に向ける形で出土した。こうした状況からみると、遺物を置いた後に2層を井戸に投入し、その後ふたたび猫形木製品などの遺物を置きつつ1層を投入したものと考えられる。5層上面では土師質台付皿1点(8:位置7)と2点の木片が出土した。井戸底面付近では、底面から約15~20cm上において土師質土器碗2点(1:位置13、4:位置3)が出土した。井戸底面付近の土師質土器碗については、正位の状態の完形品と、逆位となった底部のみの破片が並んだ状態でみつけた。これらの土器の出土標高は湧水砂層付近にあたるため、5層の中でも土器から井戸底面までに堆積する土層については井戸の使用段階に堆積した層である可能性が考えられる。このようにみると、井戸底面では土師質土器碗、5層上面および1・2層においては皿や台付皿、台付杯が置かれており、出土位置により器種構成に特色が認められる。

以上の土層の堆積および遺物出土状況から、次のような井戸を埋める過程が復元しうる。すなわち、①井戸底面に土師質土器碗2点を置き5層埋土を投入→②5層上面に土師質台付皿1点と木片を置き4層と3層の埋土を投入→③皿・土師質鍋と2層埋土を投入し、続けて猫形木製品・台付杯と1層を投入、という流れである。

出土遺物は、全体で土師質土器碗2～3個体・皿4個体・台付皿1個体・台付杯1個体・

器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	木取り	OKUF	樹種	特徴
猫形木製品	6.3	6.3	4.6	瘤芯持ち	1354	ウツギ属	全体形:元々の木瘤の形状と加工によって、鼻に向かってとがる全体形と各部位の形状が作られる。加工:両眼・両耳・右鼻に工具による明瞭な加工痕跡あり。左右側面は瘤の形状をいかに。底面の加工痕は木瘤の切断痕か。孔:髓の消失によって生じたもの。右鼻から底面に及ぶ孔と後頭部から中心に向かう孔の2箇所あり。

図22 井戸1出土遺物(木製品)

鍋片1点、須恵質瓦片1点、猫形木製品1個体の構成となる。土坑1・2と比較して、完形の土器が多く、かつ椀や皿を主体とすることを特徴とする。なお、図23-2の土師質土器椀と9の須恵質瓦については、本遺構または土坑1に属する可能性もある。ただし前者については器種構成から本遺構のものである可能性が高い資料である。また、本遺構からの出土品として注目されるのが猫形木製品である。これは猫の頭部をかたどっており、ウツギ属の木瘤の形状を利用しながら加工が施されたものである。加工痕跡は、両目、左耳、右側面、鼻に認められる。また、底面は木瘤を切り離した際についた可能性がある加工痕跡と、切り離しによって生じた未加工面がみられる。軸棒を挿入したものと推定される2箇所の穴については、ウツギ属の髓が自然に消失したものである⁽²⁾。井戸の廃絶時期は、出土土器から11世紀中頃の年代が与えられる。

註 (1) 井戸1および土坑1・2出土土器については、山本悦世・当センター調査研究室長からのご教示を得た。

(2) ウツギ属の性質については森林総合研究所・能城修一氏からご教示を得た。

b. 土坑

土坑1 (図21～23)

CH9区に位置する。本遺構は土坑2に南半部が切られており、かつ上半については近世・近代の入り江状遺構によって削平を受けていた。検出面は入り江状遺構北岸の緩やかな斜面部分となる。上面標高は0.11mを測る。平面形に関しては北半部を参照すれば隅丸方形を呈するものと考えられる。一辺の長さは、土坑2による南半の削平のため不明であるが、現状では北辺0.46m、西辺0.50mを測る。深さは0.38mとなる。断面形は楕円状を呈するが、井戸中央が本遺構の中心にあたるため、後世の陥没によって断面形が当時の形を反映していない可能性もある。

埋土は1層からなり、暗灰色粘質土で層中に炭層が縞状に含まれることを特徴とする。炭層中からは炉壁2点が出土した。炭層の堆積状況や炉壁の存在、また出土遺物や土坑壁面に被熱の痕跡が認められない点から、炭層は他の場所から本遺構へ持ち込まれたものと推定される。遺物出土状況については、遺構南半が土坑2によって消失してはいるものの、北側に偏る傾向が窺える。

出土遺物は、土師質杯7～8個体・皿6～8個体、土師質鍋片1点、炉壁片2点の他、木片8点からなる。なお、なお、図21-14・16・20の土師質土器皿・杯については、井戸1に属する可能性もあるものの、器種構成からみて本遺構に伴う可能性が高いものと考えられる。土器の器種に関しては、破片が多い点および土師質杯が主体をなす点が井戸1と異なる。木片については、小枝を払った痕跡のある棒状の枝である。本土坑の廃絶時期は、出土土器から11世紀中頃の年代が与えられる。

このように、本土坑は炭層と炉壁片を伴う様相から、火を用いた何らかの作業で生じた炭や木片、排土を埋めるために掘削されたものと推定される。また本土坑の時期が井戸1と同時期となることは、井戸1の廃絶と関連するものと考えられる。すなわち、本土坑の設定においては、井戸の上部が廃棄場所として選択されたものと推測される。

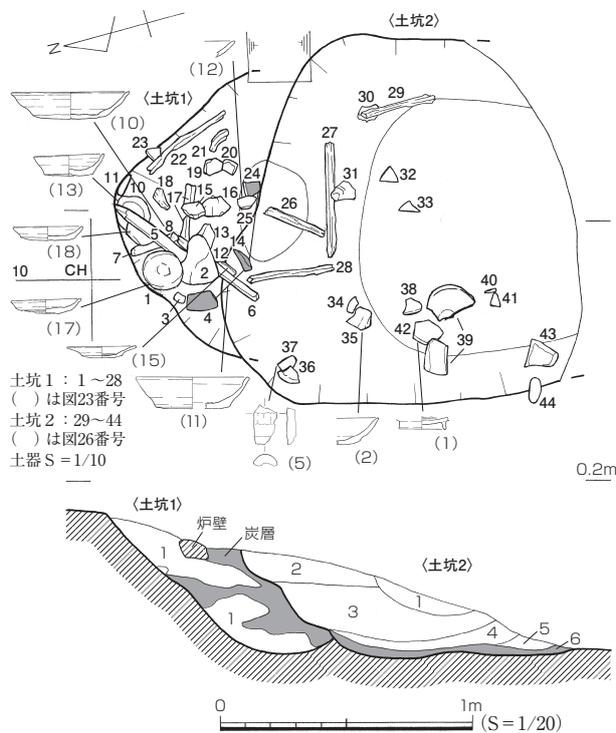
土坑2 (図23・24)

CH9区に位置する。井戸1の上部南半を切る形で構築されていた。本土坑は大部分が近世・近代の入り江状遺構によって切られており、底面付近を中心に残存していたものである。検出面は、入り江状遺構北岸の緩やかな斜面部分となる。上面標高は0.01mを測る。井戸1と同様に、古代・中世層と推定される5層上面から本来掘り込まれていたものと仮定すれば、本井戸の上部は入り江状遺構によって90cmほど削平を受けたものと考えられる。平面形は北側が直線状となることから、不整形な長方形を呈するものと推定される。平面規模は、東西幅0.99m、南北幅0.96mを測る。断面形はU字形と考えられる。深さは0.30mである。

埋土は6層に区分した。1・2層は土質の類似する層である。1層は緑青灰色粘質土で、2層は青灰色粘質土となる。3層は暗緑灰色粘質土で灰色粘土ブロックを含むとともに、下面に有機質の堆積が認められた。4・5



土坑1 遺物出土状況(西から)



土坑1 断面(西から)

土坑1 遺物出土位置一覧

遺構名	位置番号	器種	上端	下端	図23内の番号
土坑1	1	土師質皿	0.087	0.060	17
土坑1	2	石	0.087	0.015	-
土坑1	3	土師質杯	0.014	-0.008	-
土坑1	4	土師質杯	0.024	-0.027	11
	14		-0.156	-0.165	
	24		-0.194	-0.206	
土坑1	5	木片	0.104	0.063	-
土坑1	6	木片	-0.001	-0.094	-
土坑1	7	木片	0.058	-	-
土坑1	8	土師質杯	0.017	-0.012	10
	-	土師質杯	0.104	0.063	
	-	土師質杯	-	-	
土坑1	9	土師質皿	0.085	0.033	18
土坑1	9	土師質皿	-	-	-
土坑1	9	土師質皿	0.085	0.033	-
土坑1	10	土師質杯	0.027	-0.015	13
土坑1	11	土器	0.110	-0.008	-
土坑1	12	土師質皿	-0.067	-0.126	15
土坑1	13	土師質皿	-0.200	-	-
土坑1	15	炉壁	0.015	-0.035	-
土坑1	16	土師質鍋	-0.020	-0.055	-
土坑1	17	木片	-0.085	-0.096	-
土坑1	18	木片	-0.041	-0.069	-
土坑1	19	炉壁	-0.024	-0.044	-
土坑1	20	土師質杯	-0.102	-0.113	-
土坑1	21	木片	-0.126	-0.14	-
土坑1	22	木片	0.069	-0.104	-
土坑1	23	土器	0.055	0.026	-
土坑1	25	土師質杯	-0.074	-0.096	12
土坑1	26	木片	-0.212	-0.28	-
土坑1	27	木片	-0.175	-0.233	-
土坑1	28	木片	-0.174	-0.236	-
土坑1	-	土師質椀	-	-	-
土坑1	-	土師質杯	-	-	-
土坑1	-	土師質皿	-	-	19
井戸1/ 土坑1	-	土師質杯	-	-	14
井戸1/ 土坑1	-	土師質皿	-	-	16
井戸1/ 土坑1	-	土師質皿	-	-	20
井戸1/ 土坑1	-	炉壁	-	-	-

土坑2 遺物出土位置一覧

遺構名	位置番号	器種	上端	下端	図23内の番号掲載
土坑2	29	木片	-0.2	-0.248	-
土坑2	30	炉壁	-0.227	-0.257	-
土坑2	31	土器	-	-	-
土坑2	32	土師質鍋	-0.190	-0.200	-
	38		-0.06	-0.1	
	34		-0.02	-0.03	
土坑2	33	土器	-0.1	-0.17	-
土坑2	35	内黒杯	-0.040	-0.050	2
土坑2	36	土師質台付椀	-0.060	-0.070	-
土坑2	37	土師質窯道具	-0.090	-0.100	5
土坑2	39	土器	-0.022	-0.077	-
土坑2	40	土師椀	-0.200	-0.250	-
土坑2	41	土師質皿	-0.120	-0.130	-
土坑2	42	土師椀	-0.080	-0.090	1
土坑2	43	土器	-0.084	-0.096	-
土坑2	44	土師椀	-0.089	-0.107	-
土坑2	-	土師椀	-	-	-
土坑2	-	土師質杯	-	-	-
土坑2	-	土師質皿	-	-	3
土坑2	-	土師質皿	-	-	4

図23 土坑1・2

層は類似する層であり、4層が暗灰色粘質土、5層が暗茶灰色粘質土となる。6層は薄く底面に堆積する層であるが炭と灰に砂が混じるもので、黒灰色砂質土である。6層中から炉壁片2点が出土した。炉壁片が炭層とともに出土する状況は土坑1と同様である。

遺物は1点のみ3層から出土したが、他は1・2層中から出土したものである。遺物は土師質土器碗4個体・台付碗1個体・台付杯1個体・皿3個体、鍋1個体、窯道具1点、木片1点からなる。土器についてはいずれも破片となる。木片については、小枝を払った痕跡のある棒状の枝である。本土坑の廃絶時期は、出土土器から11世紀中頃の年代が与えられる。

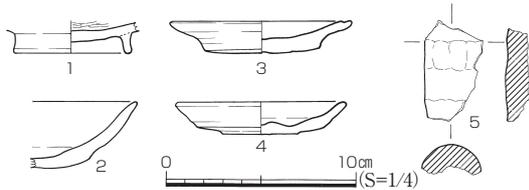
このように本土坑については、炭・灰層（6層）および炉壁片の存在、深さ、出土遺物の時期の点から、土坑1と同様の機能が想定される。すなわち本土坑は、土坑1廃絶後に、火を伴う何らかの作業に関わる炭・灰や木片、排土を埋める際に掘削されたものと推定される。



1. 土坑2プラン（南から）



2. 土坑2断面（西から）



番号	器種	口径	底径	器高	特徴	色調：内/外	胎土
1	土師質・碗	-	6.1×6.2	-	(内)ミガキ(外)横ナデ、高台内：中央はナデ、1/1残	白	微砂
2	黒色土器・杯	-	-	-	横ナデ(底外)丁寧なナデ・橙色化、1/5弱残	黒/暗灰褐	微砂
3	土師質・皿	9.6	6	1.4~1.7	横ナデ(口内)凹みが巡る(底外)ヘラキリ・中央凹み、ロクロ回転左、歪み有、1/4残	暗灰褐	微砂多、金雲母
4	土師質・皿	9	6.6	1.7	横ナデ(底外)鈍キリ後中央ナデ、ロクロ回転左、1/4残	暗灰褐～淡灰褐	微砂
5	窯道具	-	-	-	軽い押圧+ナデ、粘土は絞られた様子(剖面)被熱で桃白色化	淡乳黄(褐)	水澆状

図24 土坑2・出土遺物

(2) 江戸・明治時代

a. 入り江状遺構（図25～31）

人為的加工がなされた入り江と考えられる遺構の一部を4層上面において検出した。調査区で確認したのは護岸を有する入り江の北岸、および河道の底付近である。本調査区が現在の鹿田キャンパス東辺において北から南へと流れる枝川に近接することから、入り江状遺構は近世段階の枝川を分岐させて構築されたものと推定される。

入り江状遺構の平面形については、北岸の上端ラインおよび護岸の並びが北西～南東方向へのびることから、北側が北東にふくれる形となるものと考えられる。西岸については、東から西に向けて河道底面のレベルが緩やかに高くなっていることと、後述の斜面の段が南にカーブすること、調査区西方にある第14次調査地点において同様の河道が検出されていないことから、本調査区と第14次調査地点との間に位置するものと考えられる。入り江の南北幅は現状で7m（調査区の南北長）以上となり、仮に調査区南辺を川底の中心部付近とするならば、幅は推定で14m前後となるものと考えられる。深さは、最深部で1.9mを測る。

入り江の北斜面は、人為的加工によるものと考えられる3つの段が形成されていた。段1の平面形については、



1. 入り江状遺構全景（南西から）



2. 護岸（南から）

図25 入り江状遺構検出状況

東西方向にのびるラインを確認した。調査区西壁において段1が認められなかったため、段1の西端は南西側へと屈曲するものと考えられる。中位の段2の平面形はM字状を呈しながら、東西方向から南西方向へかけてのびる。段2には、長さ1.3m、幅約1.5m、高さ0.15~0.19mの、南に張り出す部分がつくりだされていた。張り出し部前面（南側）には、長さ約1mの薄い板材が、張り出しに並行する向きで出土した。この板材については張り出し部に伴うものと考えられる。張り出し部周辺からは、瓦が比較的多く出土している。これらの瓦は、意図的に敷かれた状況を呈するものではなく、投棄されたものと考えられる。上段の段3については、北西方向へのびるが、これは入り江北辺の上端ラインの方向を指向するものと考えられる。また張り出し部北側にあたる箇所では、段が約0.7m北側へ入り込む形状をなす。こうした形状は、張り出し部の機能と関連するものと考えられる。張り出し部の機能としては、段3の形状や前面の板材の存在から、水際へ接近するための階段としての性格が想定される。

北岸では、杭と板材・丸太材による護岸がなされていた。護岸で使用された杭は6本、横木は6個が残存していた。護岸の列は、全

体としては北西-南東方向にのびるが、一直線ではなく、横木1から2にかけて北西へ屈折する。こうした列の方向は、入り江の上端ラインと一致する。護岸の設置箇所に関しては、杭1から矢板1までは段2上に、横木3から杭6までは段3上となる。したがって、護岸の高さについては、前者が後者よりも低くなる。護岸は横位の板材または丸太材を斜面に貼り付け、それらの前面に杭を打ち込むことを基本とする。板材と斜面との間に生じた間隙には、瓦や板小片のほか、木製杓子（W14）が挟みこまれていた。横木1（W7）は杭1・2（W2）で固定されていた。杭1は、工事用矢板で下半が欠損していたが、杭2については長さ198.5cmを測る長杭である。横木2（W10）については、東端が横木1にかかる形で固定されているが、これを固定するための杭は確認されていない。横木2の西端については、北側へ逆凹状をなす段3の窪みの東南端に接する位置にある。矢板1（W12）としたものは、台形状の箱状製品の短辺を地中に約5cm埋め込み、斜めの状態で立っていたものであり、他の横木とは異なる固定法によるものである。これは、張り出し部の北側で、段3が北側へ窪む箇所に設置されていた。横木3（W4）は杭3（W5）と杭4（W6）によって固定されていた。これらはいずれもほぞとほぞ穴を有する丸太材が使用されており、杭についてはそれを転用して加工がなされたものである。横木4は西半部が工事用矢板の影響で欠損していたが、杭4と杭5・6（W12）によって固定されていた。横木5については、横木3・4と背後の斜面との間に挟み込まれたものである。

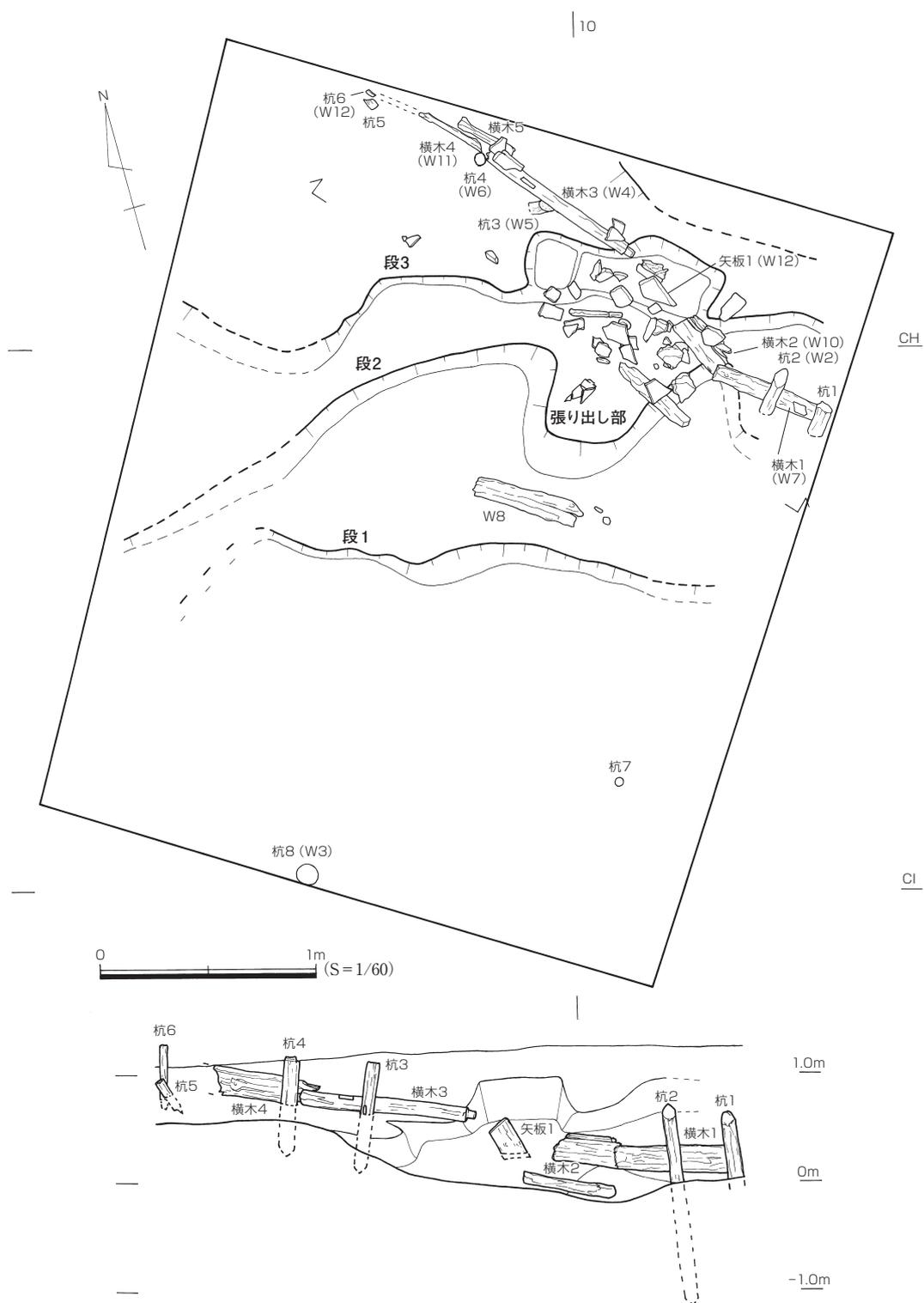
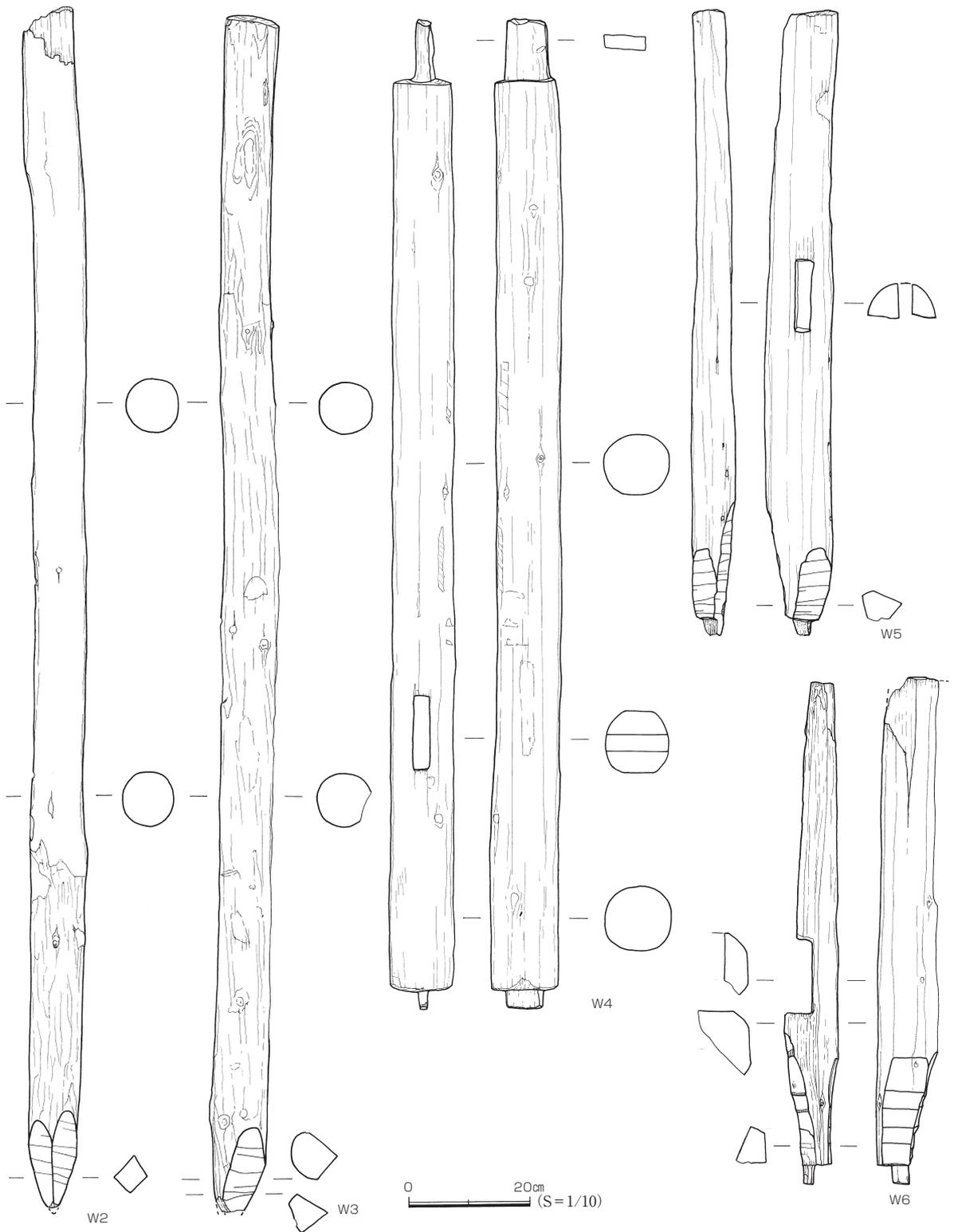
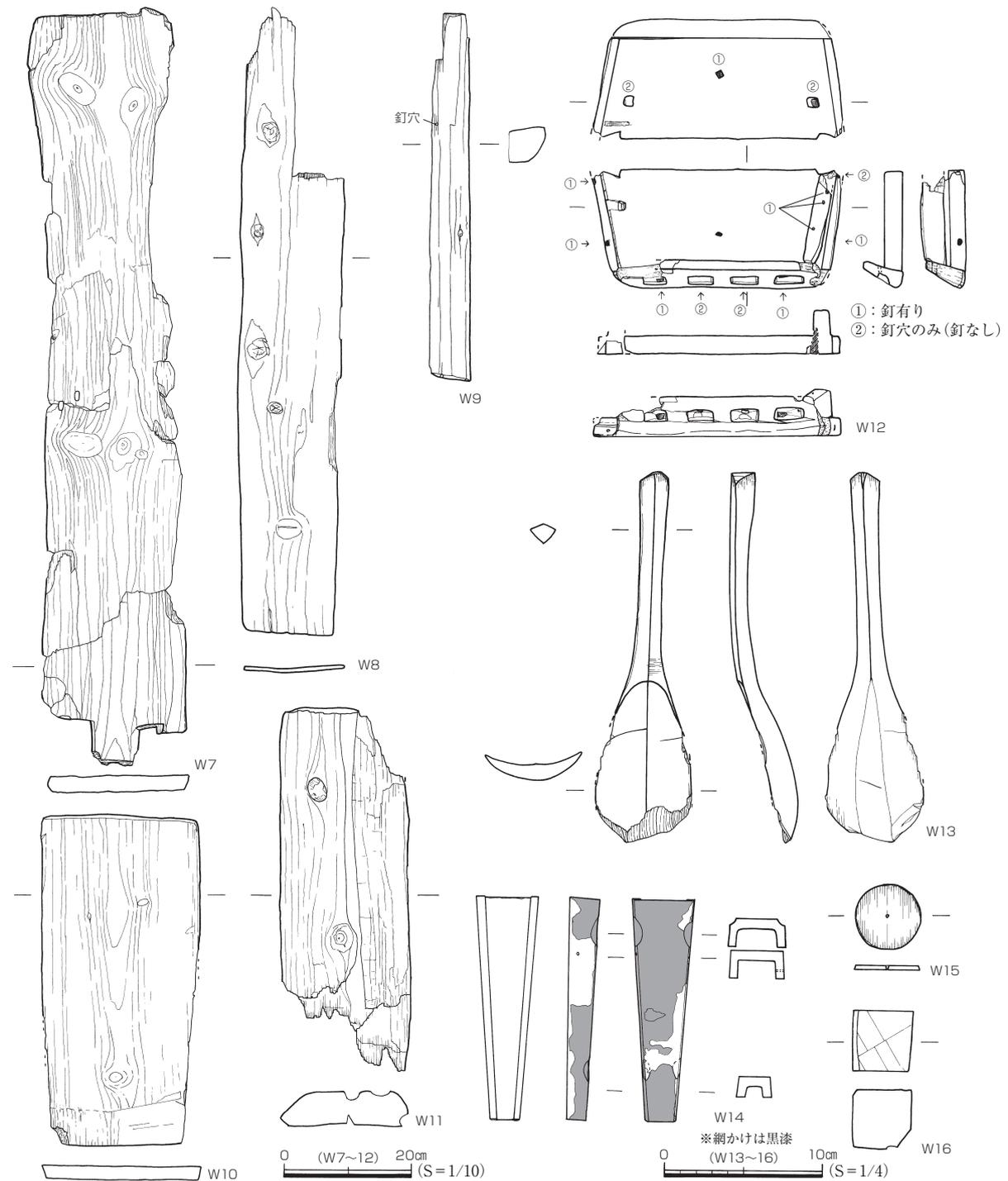


図26 江戸・明治時代遺構全体図



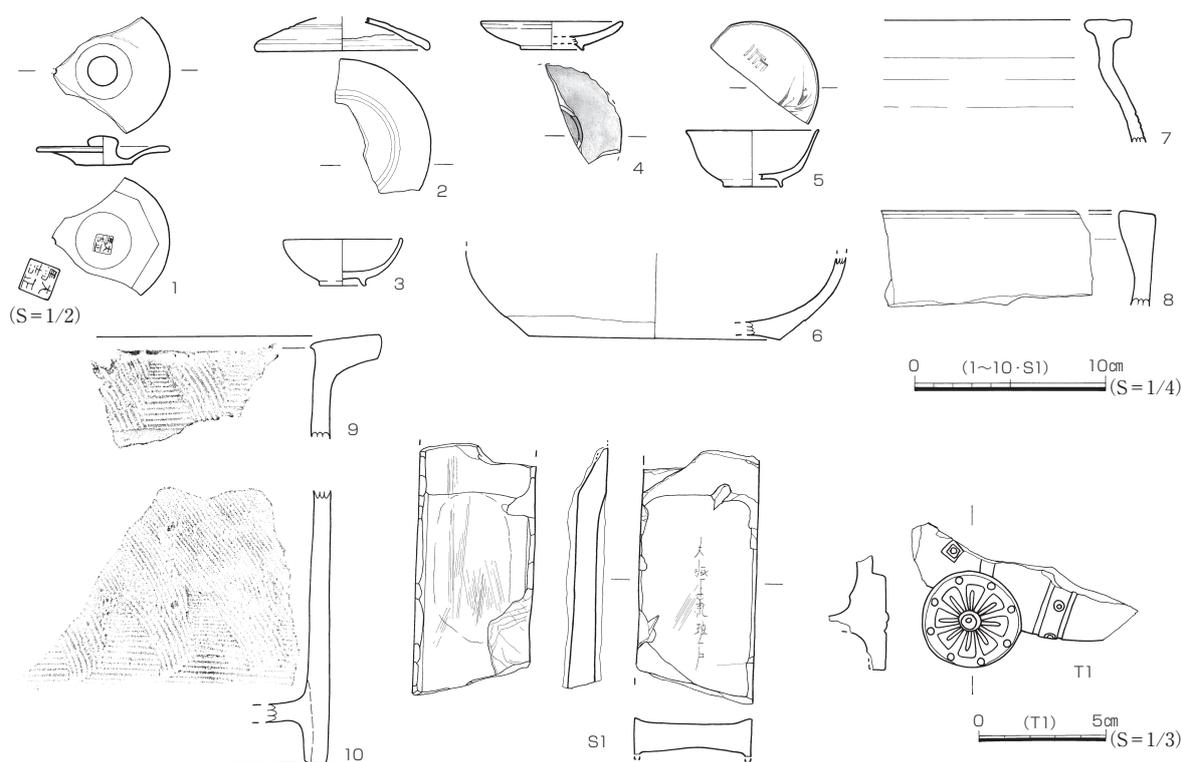
番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	木取り	OKUF	樹種	特徴
W2	杭	198.5	9.6	9	丸木	1362	アカマツ	先端4面加工。樹皮残る
W3	杭	197.6	9.6	8.9	丸木	1363	アカマツ	先端3面加工。樹皮残る
W4	横木	163.7	11.5	10.7	丸木	1364	スギ	方形のほぞ孔1カ所。両端にはぞ有り
W5	杭	10.3	10.7	6	半割	1367	スギ	転用杭。方形のほぞ孔1カ所・先端にはぞ残存。部材を半裁し、転用杭とし3面加工
W6	杭	83.5	8.9	10.8	みかん割	1366	スギ	転用杭。方形のほぞ孔1カ所・先端にはぞ残存。部材をみかん割後、先端を3面加工

図27 入り江状遺構出土遺物1



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	木取り	OKUF	樹種	特徴
W7	板材	121.2	23	2.8	板目	1370	アカマツ	切り込み加工有り
W8	板材	99.8	15.1	0.7	板目	1371	スギ	一部焼け焦げ有り
W9	杭	58.6	6.8	5.5	みかん割	1368	ヒノキ	釘穴1カ所有り
W10	加工痕ある板材	53	25.3	2.3	板目	1369	アカマツ	外面下端に極薄い加工痕有り
W11	板材	58.2	24	5.2	板目	1420	スギ	加工無し
W12	箱状木製品	19	39.7	7.2	柁目	1365	スギ	天地左右不明。残存する5つの材の組み合わせ。釘穴14カ所中8カ所に鉄釘残存
W13	杓子形木製品	23.7	1.8~6.2	1.8	柁目	1361	クワ属	柄部・四面ともに丁寧な仕上がり。匙部内外面刃物痕あり
W14	黒漆不明木製品	14.2	2.0~4.0	0.65	側面斜め/背面板目	1360	ヒノキ	天地不明・凹型に削り取り・左右4カ所くぼみ加工・左右2カ所穿孔
W15	紡錘車形木製品	4.1	4.2	0.35	柁目	1374	ヒノキ	中央穿孔あり
W16	加工痕ある木片	3.8	3.8	3.8	角材	1375	アカマツ	四角柱、加工面6面以上

図28 入り江状遺構出土遺物2・河道出土遺物1



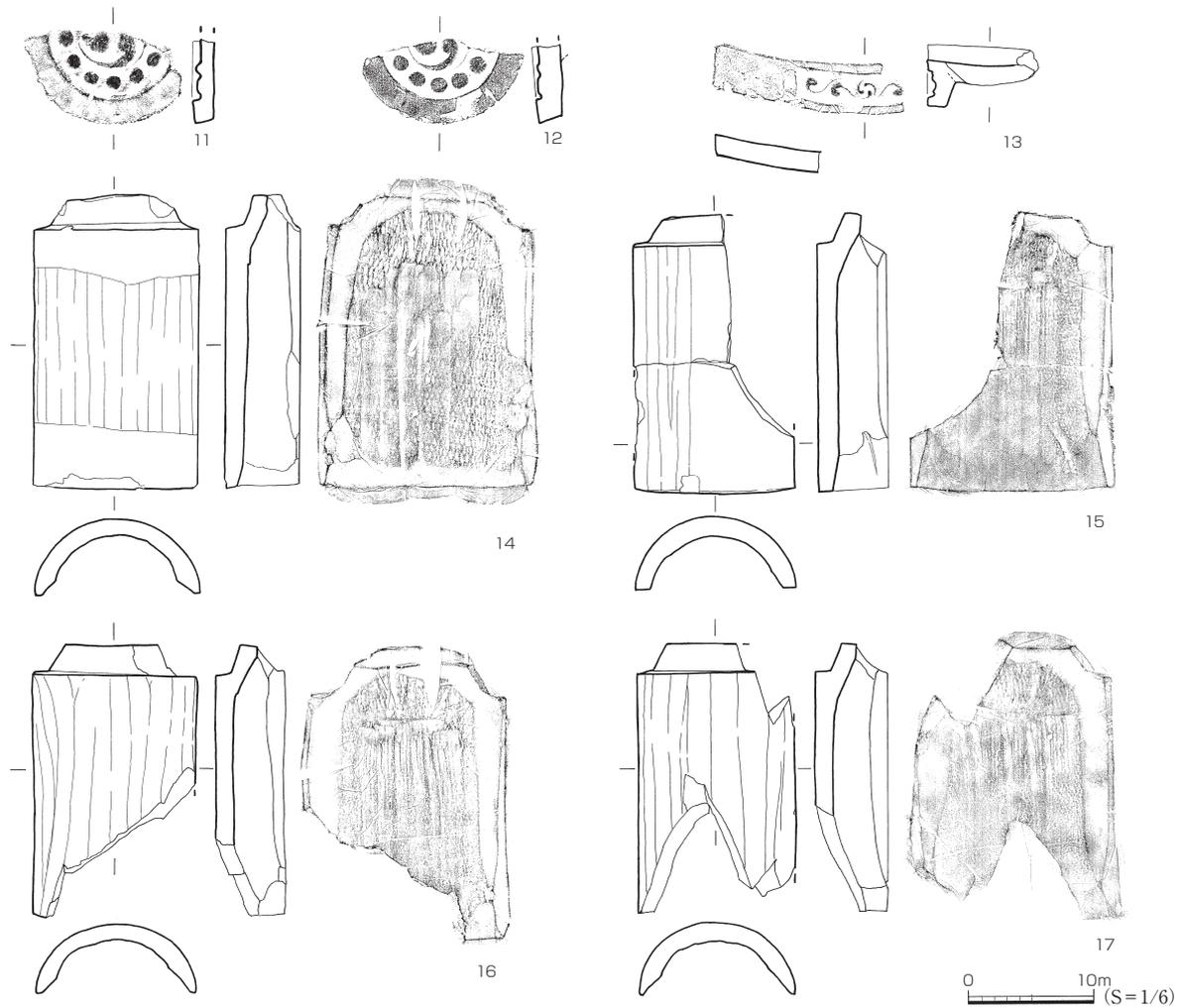
番号	種類・器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態・手法他	胎土	色調
1	施釉陶器蓋	*7.0	-	1.55	(内)施釉透明、貫入有り、中央に刻印 (外)緑釉絵付け、施釉透明、貫入有り、孔の一部有り	微砂	乳白色
2	施釉陶器蓋	*9.2	-	-	(内外)施釉、貫入有り	微砂	乳白色
3	施釉陶器碗	*6.3	*2.4	*2.45	(内外)施釉透明	微砂	白色
4	施釉陶器小皿	*7.5	3.3	*1.5	(内外)施釉緑金、釉変有り	微砂	乳黄色
5	施釉陶器碗	*7.0	*3.1	3	(内)植物は藍色で絵付け、風景金色で絵付け、口縁部金色で一周、内外施釉透明	微砂	白色
6	施釉陶器壺	-	*13.2	-	(内)施釉オリブ色(一部貫入) (外)施釉オリブ色	微砂	暗灰褐色
7	備前焼?甕	-	-	-	(内外)横ナデ、自然釉	微砂	乳褐色
8	瓦質火鉢	-	-	-	(内)煤 (外)赤色顔料	細砂	暗灰褐色
9	瓦質火鉢	-	-	-	(内)ハケメ、煤 (外)ナデ、被熱、赤色顔料。10と同一個体	微砂、赤色砂粒、角閃石	乳橙褐色
10	瓦質火鉢	-	*24	-	(内)ハケメ、煤 (外)ナデ、被熱、赤色顔料。9と同一個体	微砂、赤色砂粒、角閃石	乳橙褐色
番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S1	硯	13.4	6.2	2.0	261.4	粘板岩	両面加工し擦痕有り、片面に文字有り
番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	形態・手法 他	胎土	色調
T1	大甕形焼き物	8.9	2.3	0.6	自然釉の光沢有り。置物か。	微砂	暗灰色

図29 河道出土遺物2

護岸と段の構築時期については、間層が認められず、およそ同時期と考えられる一方で、階段状を呈する張り出し部周辺において矢板1が設置されることから、段の構築後、いくぶんの時期差をもって護岸がなされた可能性も存在する。

護岸以外にも、調査区南半の入り江中央付近において杭が2本打ち込まれていた。杭7は段1から南へ1.9mの地点に打ち込まれた小型のものである。一方、杭8(W3)については長さが197.6cmを測る長杭で、杭2と同様の大きさのものである。これは入り江の最深部において、地中に1.1m打ち込まれたもので、河底から約90cmの高さで上に伸びていた。この杭の先端部加工や大きさが、北斜面の杭と類似しているため、両者は同時期の所産と推定される。こうした杭8および杭7についても、機能としては舟を繋ぐ役割が考えられる。その場合、張り出し部を含む段については、舟に関する乗り降りに使用されたものと考えられる。

入り江の河道埋土からは、底面を中心に近世の瓦や陶磁器が出土した。陶磁器については、図29-4が緑釉小皿で高台の製作技法から江戸時代中期のものとして位置づけられる。他にも図化していないが、合成酸化コバルトで文様が描かれた磁器も少量存在するため、入り江の最終埋没磁器については近代にまで降るものと考えられる。



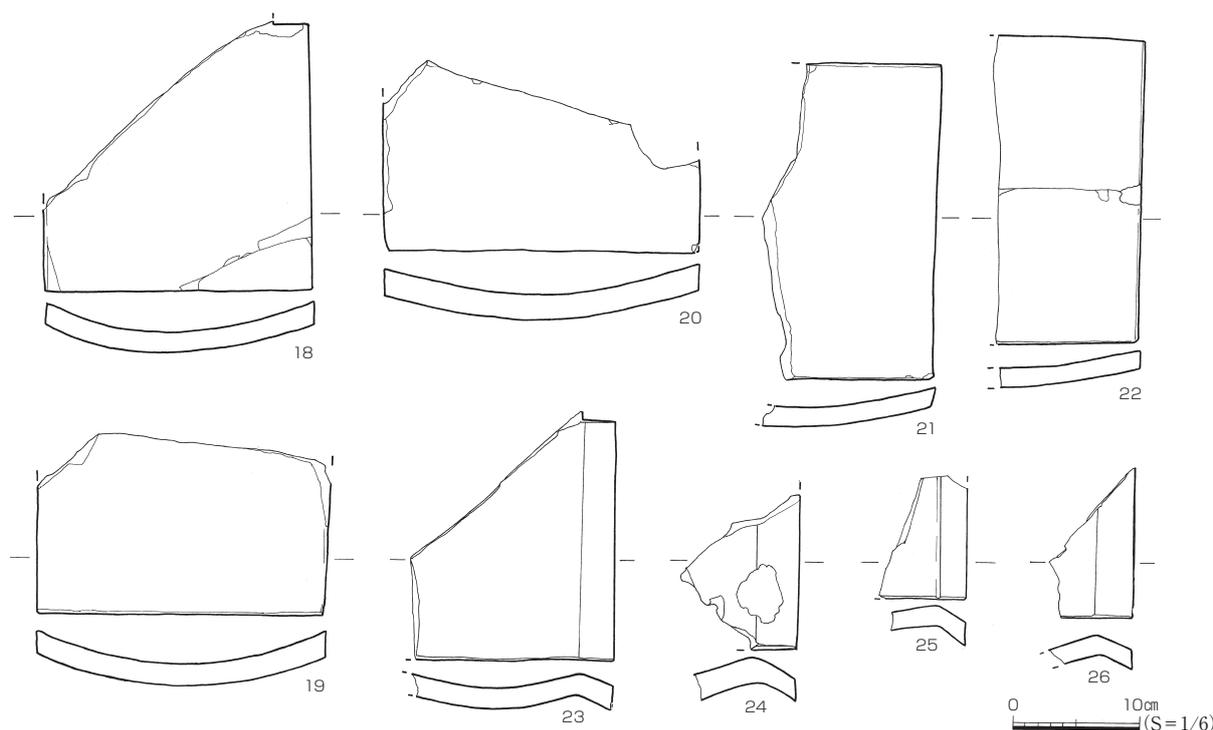
番号	種類・器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	形態・手法 他	胎土	色調
11	瓦質・軒丸瓦	*6.5	*13	1.8	(内)ナデ、平滑(外)珠文6個残、右巻き三巴文2個残	微砂、ウンモ多	暗灰色
12	瓦質・軒丸瓦	*6.2	*13	2	(内)ナデ、平滑(外)珠文5個残、右巻き三巴文2個残	微砂、ウンモ多	暗灰色
13	瓦質・軒平瓦	*8.8	*15.2	*3.6	(内)ナデ(外)中央に右巻き三巴、左右に唐草2転	微砂	暗灰色
14	瓦質・丸瓦	23.5	13.1	1.1~1.8	(内)布目痕、一部タタキ(外)ナデ、天地丁寧なナデ	微砂	暗灰色
15	瓦質・丸瓦	22.6	12.7	1.6	(内)布目痕、一部タタキ(外)ナデ	微砂	暗灰色
16	瓦質・丸瓦	21.8	13.1	1.4	(内)布目痕、一部タタキ(外)ナデ	微砂	暗灰色
17	瓦質・丸瓦	21.5	12.4	1.5	(内)布目痕、一部タタキ(外)ナデ	微砂	暗灰色

図30 河道出土遺物3

瓦については、コンテナ6箱分、総重量36.1kg出土した。瓦の破片数としては、平瓦185点（軒平瓦1点含む）、丸瓦28点1点（軒丸瓦2点含む）、棧瓦5点の合計218点となる。軒平瓦は、唐草巴文の形状等から江戸時代後半期のものと考えられる。2点出土下軒丸瓦についても、珠文の形状から江戸時代後半期と考えられる。内瓦については、内板タタキによる18世紀第3四半期のものと考えられる。こうした出土遺物から、入り江の形成と使用時期については、江戸時代後半期と考えられる。一方、入り江の最終的な埋没時期については近代の中に位置づけうる。本調査地点に北北西約45mの距離に位置する鹿田遺跡第18次調査A地点（中央診療棟本体地点）では近世後半の集落域が確認されており¹⁾、本遺構はそうした集落域とともに機能したものと考えられる。

（光本 順）

註 (1) 山本悦世・光本 順・野崎貴博2008「鹿田遺跡第18次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2007』pp.17-34



番号	種類・器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	形態・手法 他	胎土	色調
18	瓦質・平瓦	*21.4	21.1	1.7	(内)丁寧なナデ(外)丁寧なナデ	微砂	暗灰色
19	瓦質・平瓦	*14.4	22.9	1.8	(内)粗いナデ(外)丁寧なナデ	微砂	暗灰色
20	瓦質・平瓦	*15	23.4	2	ナデ	微砂	暗灰色
21	瓦質・平瓦	25.1	*13.6	1.6	(内)ナデ(外)丁寧なナデ、工具痕有り	微砂	暗灰色
22	瓦質・平瓦	24.6	*11.1	1.6	(内)粗いナデ(外)丁寧なナデ	微砂	暗灰色
23	瓦質・棧瓦	*19.8	*16.0	1.8	(内)ナデ(外)丁寧なナデ	微砂	暗灰色
24	瓦質・棧瓦	*22.2	*18.9	2	(内)ナデ(外)丁寧なナデ	微砂、ウンモ多	暗灰色
25	瓦質・棧瓦	*14.8	*6.8	1.9	(内)ナデ(外)丁寧なナデ	微砂	暗灰色
26	瓦質・棧瓦	*11.9	*6.6	1.4	(内)ナデ(外)丁寧なナデ	微砂	暗灰色

図31 河道出土遺物4

第3節 C地点の調査

1. 層序

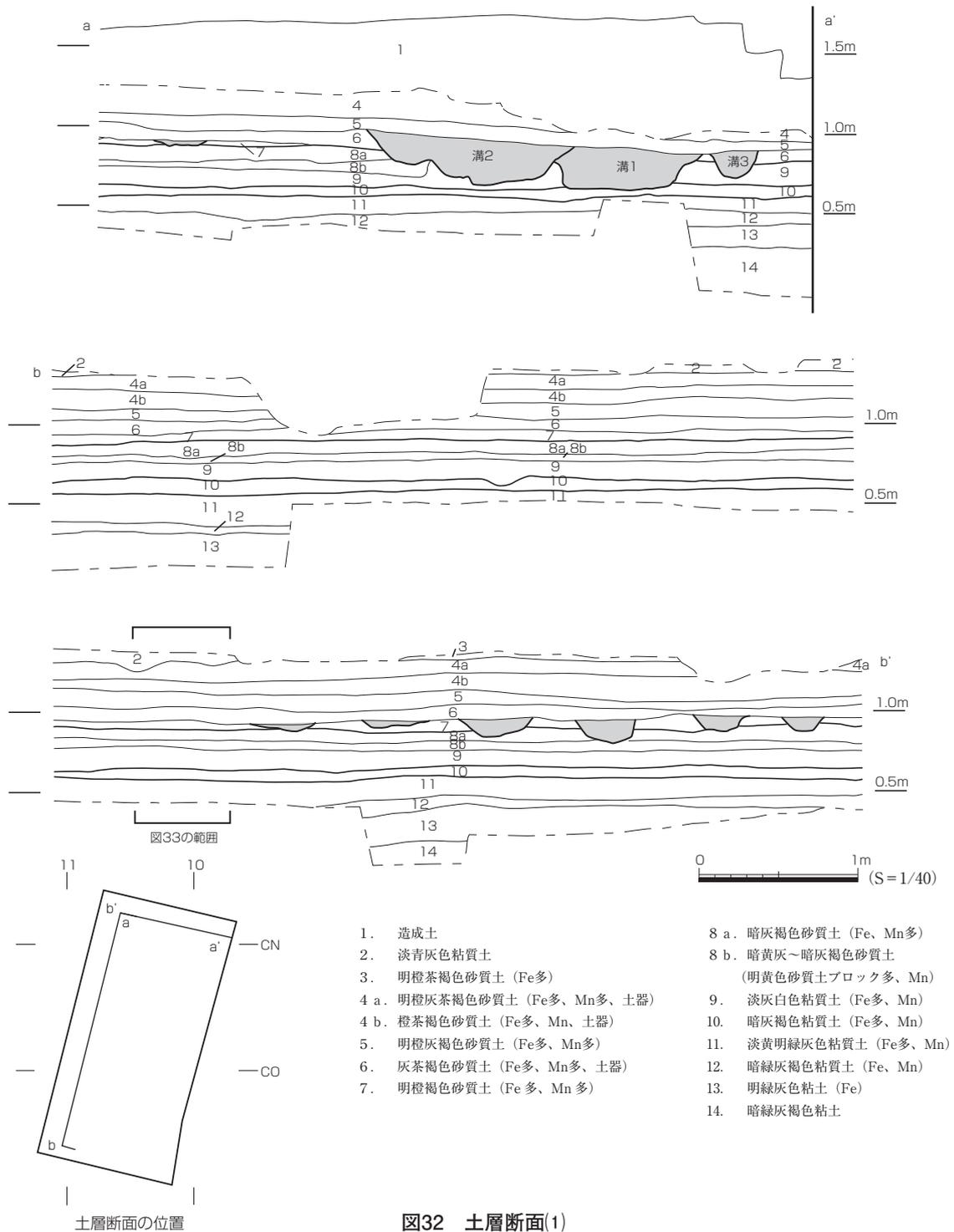
本調査区で確認した土層の堆積と各層の特徴を以下に記す(図32・33)。なお、遺物の出土は僅少であり、各土層の所属時期は決し難い。土層の時期は、遺物が出土した土層との上下関係や、周辺調査区の土層との比較のうゑに推定したものである。

1層：造成土である。上面の標高は約2.0m、層厚約0.55～0.7mである。当地点は枝川用水の間を通る道路にあたっており、舗装路面下に均質な砂質土を造成土として用いていた。本調査区は岡山大学鹿田地区の敷地外に位置しており、鹿田地区構内でひろくみられるマサ土やバラスが主体となる造成土とは異なっている。近・現代の造成土である。

2層：淡青灰色粘質土である。砂粒は均質で、鉄分を若干含む。上面の標高は約1.4m、層厚約0.05～0.1mである。近代の土層と考えられる。

3層：明橙茶褐色砂質土である。上面は鉄分の沈着が著しい。上面の標高は約1.35m、層厚約0.05mである。近世の土層と考えられる。

4層：2層に細分される。4層に包含される遺物は中世土器がほとんどで、近世陶磁器片を含まないため、本層



は中世に帰属すると考えられる。

4 a 層は明橙灰茶褐色砂質土である。中世のものとみられる土器小片を含む。上面の標高は約1.3m、層厚約0.1～0.15mである。4 b 層は橙茶褐色砂質土である。土器小片を含む。上面の標高は約1.2～1.25m、層厚約0.1～0.15mである。

5層：明橙灰褐色砂質土である。上面の標高は約1.1～1.2m、層厚約0.05～0.15mである。

6層：灰茶褐色砂質土である。中世土器小片を含む。上面の標高は約1.0～1.05m、層厚約0.05～0.1mである。上面で溝3条を検出した。中世の土層である。

7層：明橙褐色砂質土である。上面には鉄分の沈着が著しい。上面の標高は約0.95m、層厚約0.05mである。上面で小溝群を検出した。

8層：2層に細分される。8 a層は暗灰褐色砂質土である。鉄分の沈着がみられ、マンガン粒の凝集が顕著である。上面の標高は約0.9m、層厚約0.05～0.15mである。

8 b層は暗黄灰～暗灰褐色砂質土である。明黄色砂質土ブロックを多量に含む。上面の標高は約0.8～0.85m、層厚約0.05mである。

9層：淡灰白色粘質土である。鉄分の沈着が顕著にみられる。上面の標高は約0.75～0.8m、層厚約0.1～0.15mである。

10層：暗灰褐色粘質土である。上面の標高は0.65m、層厚約0.05～0.1mである。遺物は出土していないが、周辺調査との対応から弥生時代後期の土層と考えられる。

11層：淡黄明緑灰色粘質土である。鉄分の沈着が顕著にみられ、マンガン粒の凝集もみられる。遺物は出土していない。上面の標高は約0.6m、層厚約0.1～0.15mである。

12層：暗緑灰褐色粘質土である。上面の標高は約0.4～0.5m、層厚約0.05～0.1mである。無遺物層である。

13層：明緑灰色粘土である。上面の標高は約0.3～0.4m、層厚約0.2～0.5mである。無遺物層である。

14層：暗緑灰褐色粘土である。粘性が強く、湿地状の堆積物の可能性がある。上面の標高は約0.15～0.3m、層厚は確認できた範囲では約0.15m以上である。無遺物層である。

本調査区では、8・9層の層理面を境に上層（3～8層）が砂質土、下層（9～12層）

が粘土・粘質土となり、土質が大きく変化する。特に粘性の強い14層は湿地状を示す可能性が大きい。このことから、弥生時代後期頃までは湿地状の地形を呈していたものが、その後、中世頃までには土砂の堆積が進行し、微高地が形成されたものと考えられる。

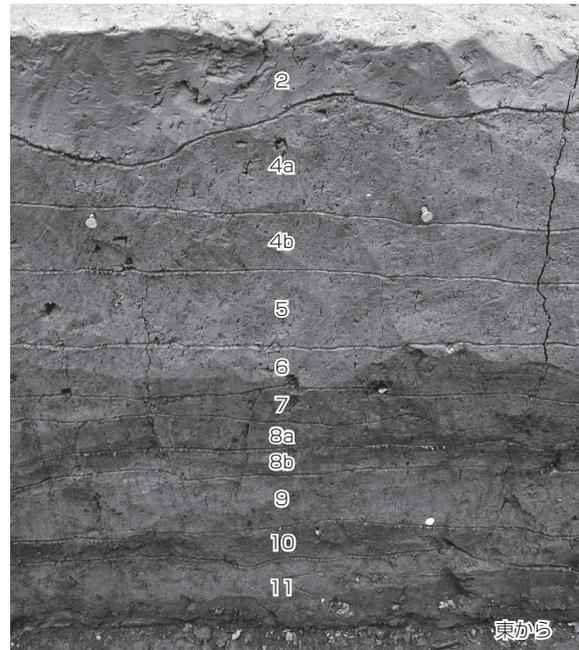


図33 土層断面(2)

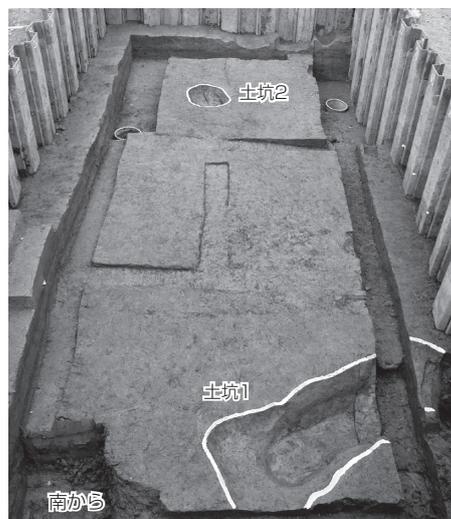
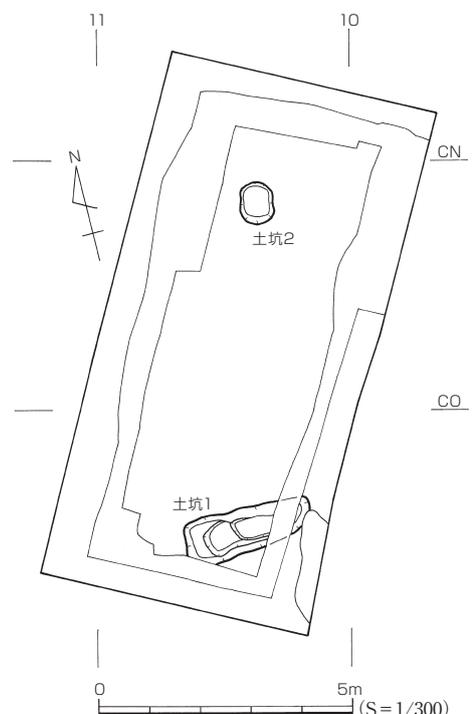


図34 弥生時代検出遺構全体図



2. 遺構・遺物

(1) 弥生時代

a. 土坑

土坑1 (図35)

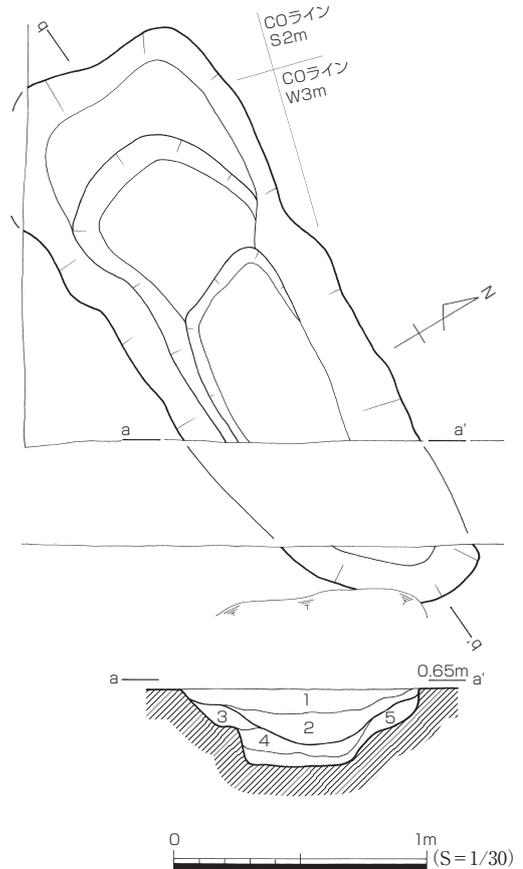
調査区南東のCO10区で検出した。検出面は11層、標高は0.55~0.61mである。長軸長約2.6m、幅約1m、深さ約0.3mで、平面形は不整形な隅丸長方形を呈し、長軸は北東-南西方向をとる。小口は西側の方が幅広い。東側は攪乱を受けているものの、幅狭く、緩い弧状を呈しながら側縁へと連続する。掘り方は横断面では二段掘りとなっているが、段の幅は狭い。縦断方向では西側で三段、階段状に掘り込まれている。東側は側溝によって失われているが、側溝の東側に一部のこる掘り方をみると底面標高は約0.5mと浅い。東半部も西半と同様、階段状に掘り込むものであったと推測される。段、底面はほぼ平坦な面をなす。

埋土は土質・土色から上半の1・2層、下半の3~5層に二大別される。上半は暗灰色粘質土を主体とする。下半は暗褐色~黒色の粘土を主体とするもので、上層より色調は暗く、粘性は強い。上層・下層の差が明瞭で、2層下面のラインが下半の3・4層をカットすることから、下半の堆積が進行した後、再掘削がなされたことが推測される。なお、最下の5層底面付近では植物遺体が顕著に含まれていたため、調査後、採取した遺構内の埋土を洗浄し、微細種子を検出した。

本土坑の検出は11層上面であるが、遺構の埋土は暗灰色~暗褐色の粘質土・粘土を主体とするものであるため、本来は10層段階に掘削されたものと考えている。本土坑から遺物は出土していない。弥生時代後期の遺構と推測する。

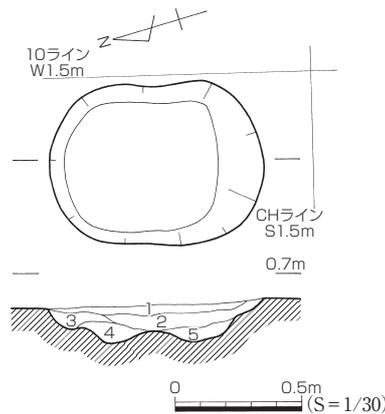
土坑2 (図36)

調査区北側のCN10区で検出した。検出面は11層、標高は0.56~0.59mである。長軸約0.85m、短軸約0.65m、深さ約0.15mの浅い土坑で、平面形は不整形な楕



1. 暗灰褐色粘質土 (灰色粘土ブロック)
2. 暗灰色粘質土 (灰色砂)
3. 暗褐色粘土 (灰色粘土ブロック)
4. 黒色粘土 (灰色粘土ブロック)
5. 暗灰褐色粘土 (明灰色土ブロック、植物遺体多)

図35 土坑1



1. 暗灰褐色粘質土 (明黄褐色土ブロック)
2. 明黄褐色粘質土 (暗灰褐色粘土ブロック)
3. 暗褐色粘土 (黄褐色土ブロック)
4. 暗緑灰色粘土 (暗褐色粘土ブロック)
5. 暗褐色粘土 (暗緑灰色砂質土ブロック)

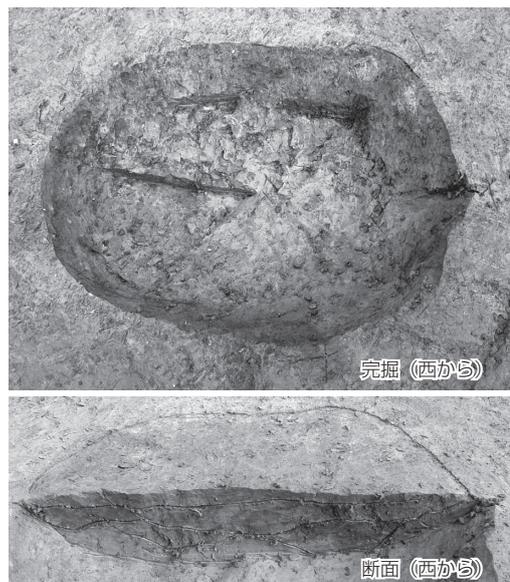


図36 土坑2

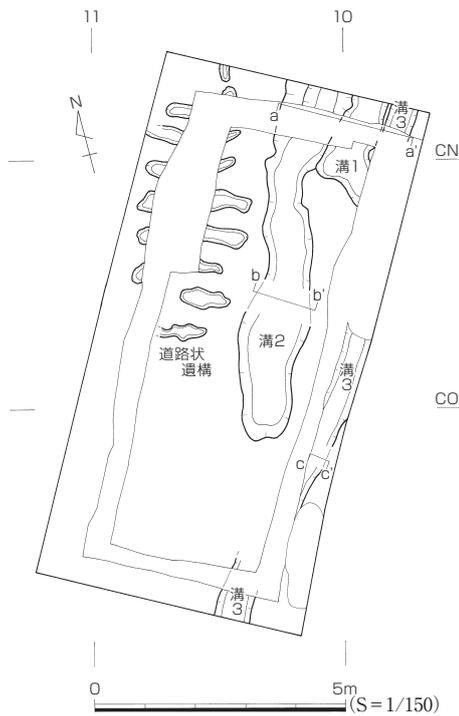


図37 中世検出遺構全体図



図38 小溝群・溝1～3検出状況

円形を呈する。断面では底面に凹凸があり、波打っている。立ち上がりの角度は緩い。

埋土は暗灰～暗褐色の粘質土または粘土であり、10層の土色・土質に似る。いずれも黄褐色土や暗灰色粘土ブロックを含む。

遺物の出土はないが埋土の状況から弥生時代後期に属すると推測する。立ち上がりの傾斜が緩いことや底面に凹凸がみられることから、人為的な掘削によるものではない可能性もある。

(2) 鎌倉時代

a. 溝

7層上面で小溝群を、6層上面で南北方向の溝3条を検出した(図37・38)。

小溝群(図39)

調査区北西部、CM・CN10区で検出した。東西方向に長軸をもつ13条の浅い溝(溝c～o)が約0.3～0.5m程度の一定の間隔で連続する。調査区北端でも同じく7層から掘削された南北方向に長軸をもつ浅い溝2条(溝a・b)が検出された。

これらの溝のほとんどは調査開始時に設定した側溝により全形をとどめていない。全形が明らかなものは溝n1条のみで、その規模は長さ約1m、幅約0.5m、深さ約0.1～0.15mである。そのほかの溝の長さは復元しえないが、幅は約0.2～0.4m、深さは約0.1～0.2mである。小溝群の埋土はいずれも明灰白色～灰褐色砂質土であり、鉄分の沈着が顕著である。

本層で検出された小溝群は、南北方向に軸をもつ北側の溝a・bを

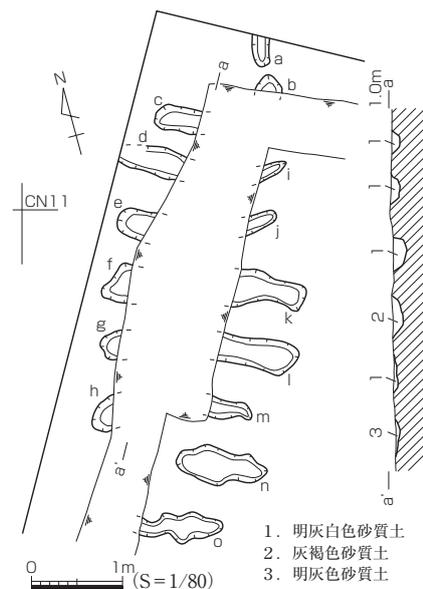


図39 小溝群

除き、以南の溝はすべて東西方向に軸線を有する。溝の規模、溝間の間隔、方向、埋土の点で近似しており、有機的な関係性を有することが推測される。このような浅く短い多条の溝が並行して一連の遺構を構成するものとしては、道路状遺構に伴って検出される波板状凹凸面に類似しており、本遺構も道路状遺構の可能性⁽¹⁾がある。

本小溝群が道路状遺構を構成するとした場合、側溝により失われた部分の状況が不明で、その構造を復元することは難しい。群を構成する溝が溝nの規模と同等であったと仮定すれば、小規模で浅い溝が南北に2列並行する構造であった可能性が考えられる。また、溝群の軸線は、溝の規模や形状が不規則なため基軸を求めにくい、溝群の西端は収束するラインが比較的揃っており、これを基軸とすればN-22°-Eとなる。その場合、最大幅は約2.2mとなる。なお、調査区北端にあたる溝群の北側では南北方向に軸線をもつ溝a・bが検出されており、道路状遺構が南北方向から東西方向に折れる可能性も考慮する必要がある。

遺物は土師質土器碗9片、土師質鍋4片、土錘1片が出土している。いずれも全形を復元するにいたらない細片である。本遺構の時期は、層序、出土遺物から、平安時代末に属すると考える。

註 (1) 近江俊秀2006『古代国家と道路』青木書店

溝1 (図40①)

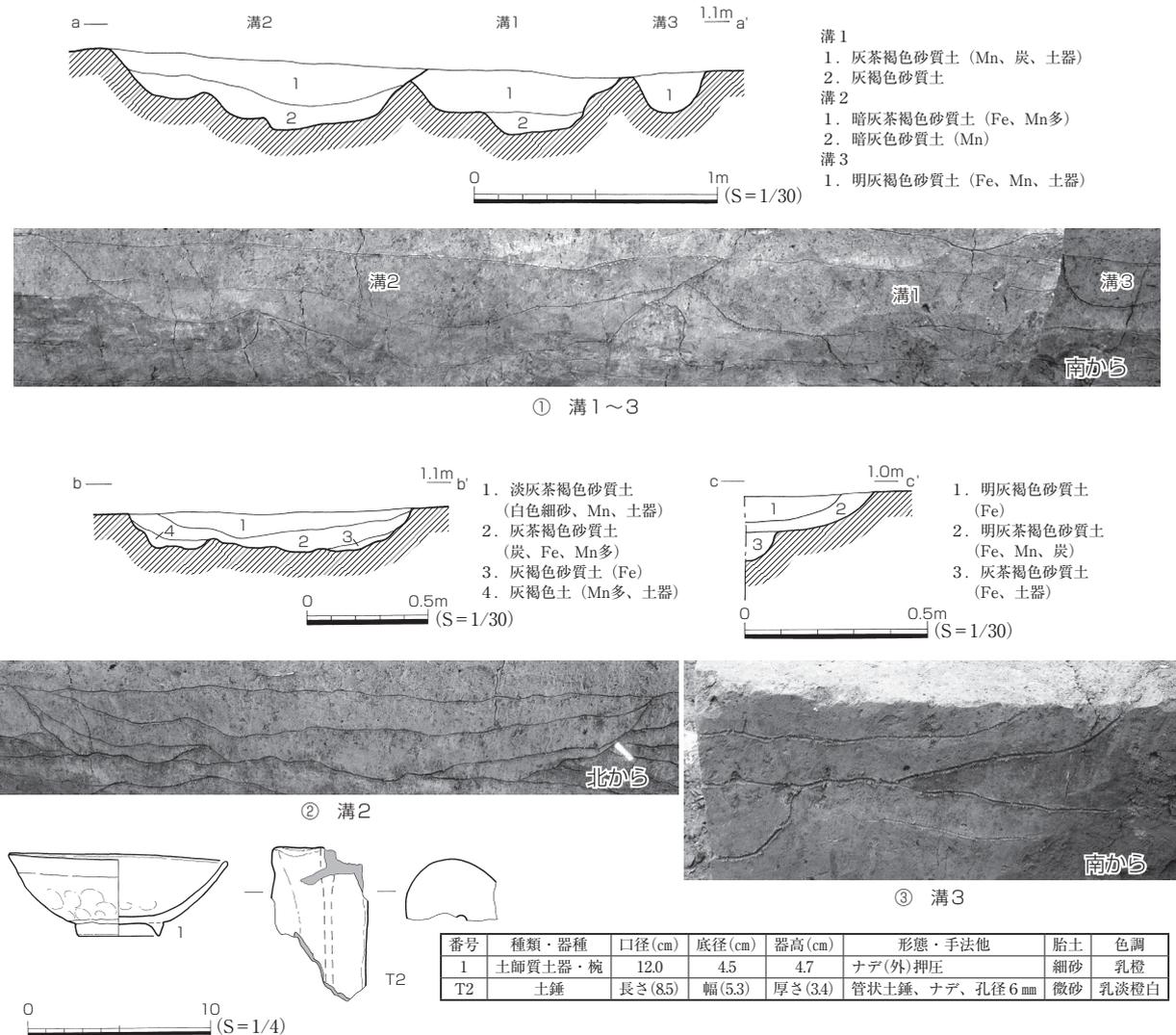


図40 溝1～3・溝2出土遺物

調査区北端、CM・CN09、CN10区で検出した。西側に溝2、東側に溝3が位置し、溝2には切られている。3条の溝の中では最も古い。調査区北端から約1.5m南北方向に掘削した後、屈曲し、南東方向に延びる。南東端は側溝によって失われているものの、調査区外へ延びるものと考えられる。掘削方向は北半では溝2より東への振れが大きく、N-39°-E、南半はN-35°-Wである。

本調査区内で検出した溝の規模は、長さ約2m、幅約0.8m、深さ約0.3mである。底面の標高は北で0.59m、南で0.75mであり、南から北に向かって底面の標高が下がる。掘り方の形状は、皿状の底面の中央が一段窪んで2段掘り状を呈している。埋土は灰茶褐色～茶褐色砂質土で、白色砂を含む。遺物の出土は土師質土器碗2片と僅少である。

本溝の所属時期は遺物から鎌倉時代前半に比定される。

溝2 (図40①②)

調査区中央、CM・CN・CO10区で検出した。検出面は6層、検出標高は約0.8～0.9mである。わずかに歪みをもつものの、おおむね南北方向に掘削された溝で、南端は調査区中央で収束する。溝1と切り合い関係があり溝1を切る。検出した溝の規模は、長さ約7.3m、幅約0.7～1.15m、深さ約0.16～0.33mである。底面の標高は北端で0.64m、南端で0.88mであり、南から北に向かって底面の標高を下げる。溝の主軸方向はN-24°-Eである。底面に凹凸を有する。本溝の主軸方向は前述の小溝群と近似しており、底面形状の凹凸も特徴的である。このことから小溝群・溝2については南北方向の区画のラインにあたっている可能性も考えられる。

遺物は約0.5袋(13号ポリ袋)分出土している。ほとんどが細片で中世の土師質土器碗94片、土師質皿25片、土師質鍋46片、備前焼2片、瓦質土器3片、土錘2点がある。出土遺物から鎌倉時代前半と推測される。

溝3 (図40③)

調査区東辺、CM・CN09、CN・CO10区で検出した溝群で、側溝で分断されているが、溝の位置と規模、底面の標高、埋土の類似から一連の溝と判断した。南北方向に掘削された溝で、やや蛇行するものの軸の方向はN-33°-Eである。溝の規模は、長さ約11m、幅約0.6～0.7m、深さ約0.2mである。底面の標高は北で0.69m、南で0.88mであり、南から北に向かって底面の標高が下がる。掘り方の形状は、北側では半円形、南側では皿状の断面の中央が一段窪んだ二段掘り状を呈する。

本溝からの出土遺物は全体で0.5袋(13号ポリ袋)で、その内訳は土師質土器碗37片、土師質皿6片、土師質鍋14片、須恵質土器1片、瓦質土器1片であるが、いずれも細片である。層序・他遺構との関係・出土遺物から、本溝は鎌倉時代に属すると考えられる。

(3) 江戸時代

江戸時代の遺構は調査区北東部において2基の土坑を確認した(図41)。調査区北東部には現代の水道管の管路が通っていたため、近世層と考えられる3層は失われていた。したがって、これらの土坑が江戸時代に帰属するか否かを土層からは決しがたいが、検出面の標高および中世遺構との切り合い関係から近世、江戸時代と判断した。

a. 土坑

土坑3 (図42左)

調査区北東部、CN09区で検出した。検出標高は約0.9mである。残存部の規模は長さ0.66m、幅0.2m、深さ0.58mで、底面の標高は0.32mである。東半は側溝で失われているため、全体の形状および規模を把握できなかった。残存部からは円形を基調とする平面形を呈するものと考えられる。

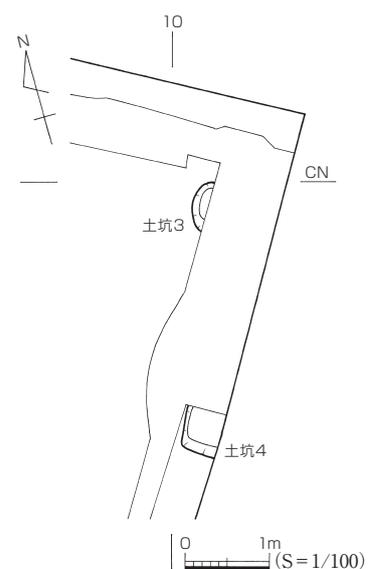


図41 江戸時代検出遺構全体図

土層は3層に細分される。1・2層は灰黄色系の砂質土で、灰色砂ブロックを含む。いずれも層厚0.1m前後である。これに対して3層は青灰色粘質土で、黄灰色粘土ブロックを含む土層であり、層厚約0.4mと厚い。

土坑4 (図42右)

調査区北東部のCH09区で検出した。検出標高は約0.9mである。東側は調査区外に延び、北側は側溝で失われているため、全体の形状および規模は把握できなかった。残存部からは平面形は方形を呈するものと考えられる。残存部の規模は0.58×0.55m、深さ0.46m、底面標高0.49mで、断面形は箱形を呈する。埋土は2層に分層できるが、いずれも黄褐色土ブロックを多く含む粘質土で構成されており、近似する。遺物の出土はない。(野崎)

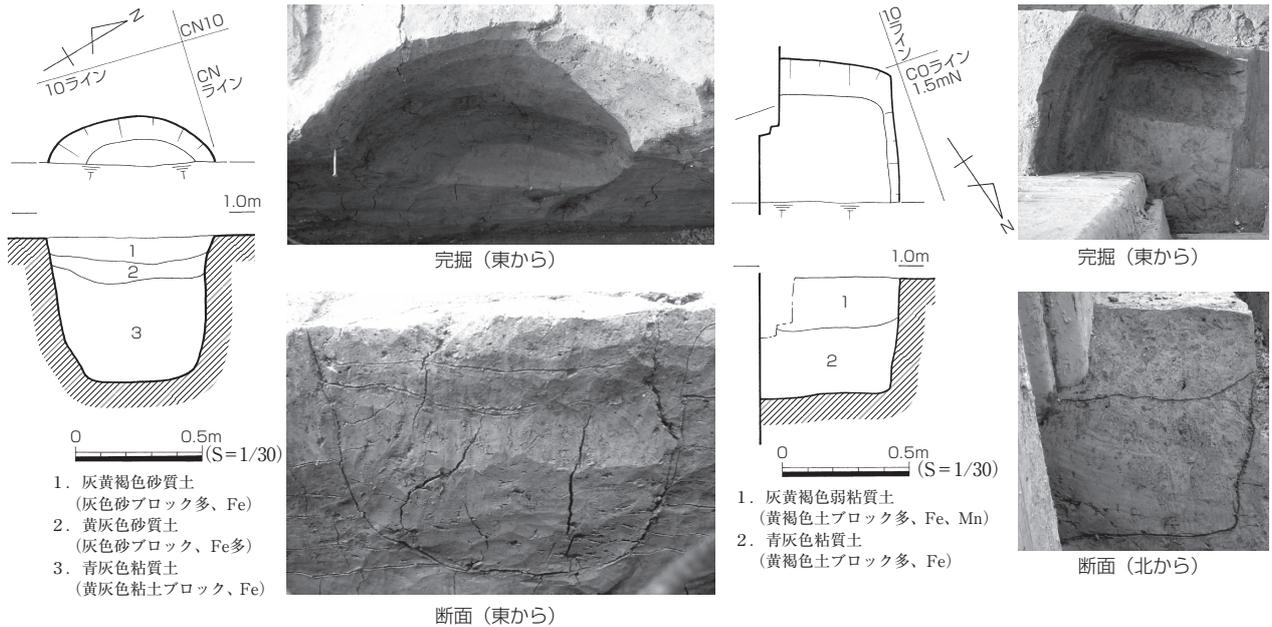


図42 土坑3・4

第4節 考 察

1. 猫形木製品考

(1) はじめに

鹿田遺跡第18次調査B地点の井戸1（平安時代中頃）では、特徴的な形態をなす木製品が出土した。それは、報告において「猫形木製品」と呼称した資料である。そうした評価は、類例資料との比較によって導いたものであり、類例同様に本資料も操り人形のかしらと考えた。

鹿田遺跡においてはこれまで、古代・中世の動物形人形という点で見れば第7次調査で猿形木製品1点が出土していた。その類例の集成と歴史的意義付けを試みた岩崎志保によると、猿形木製品は、年代が14世紀前半で動物形の人形としては日本最古の例であるとともに、軸孔を有する形態の特徴から中世の芸能民である傀儡が使用した操り人形の可能性が高いものと評価された⁽¹⁾。したがって今回報告する猫形木製品は、猿形木製品を約300年遡る資料となりうるものである。

本稿では、改めて類例との比較から、鹿田遺跡の当該資料が猫形の操り人形としての機能を有するものであることを論証することを第一の目的とする。さらに、井戸における遺物の出土状況に着目することで、当該資料の廃棄に至る過程とその背景について探りたい。

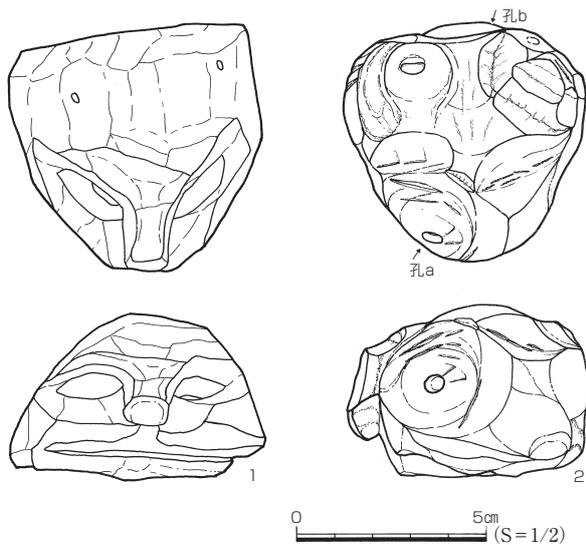
(2) 鹿田遺跡出土猫形木製品の特徴—類例との比較検討から

① 鎌倉市円覚寺門前遺跡出土「山猫木偶」

鹿田遺跡の猫形木製品と類似する遺跡出土品として唯一挙げるのが、鎌倉市円覚寺門前遺跡出土の「山猫木偶」である。同遺跡の報告書によると、複数の遺構面を有する円覚寺門前遺跡において、山猫木偶は14世紀後半の第1面の溝から発見された⁽²⁾。そして第1面期の同遺跡については、「諸々の工芸に係る製作や加工用具や機械織り具などの道具類が出土し、また木製品に製作途中品や再加工品を多数確認できるため、調査地一帯は多くの職能民が住み着いた地域であった」⁽³⁾ものと評価された。円覚寺門前遺跡例については、報告書中で加納克己による考察がなされている⁽⁴⁾。加納は文献や伝世品、すなわち專業の操り人形遣いの家柄である盛岡市の鈴江家（1648年頃に淡路から移住）に伝わるキツネの人形かしらとの比較を行いながら、本資料が傀儡による「首掛けの箱廻し」において使用されたものであることを論証した。

では本資料の特徴について、筆者の観察結果をまじえながら示したい（図43-1）⁽⁵⁾。形状は、平面的には鼻先に向かってすぼまる形となる。大きさは前後長6.6cm、左右幅6.7cm、高さ4.4cmを測り、前後長・左右幅がほぼ等しくなる。樹種鑑定はなされていないが、素材の形状は角材または板目材の一部と考えられる。背面が平坦であり、もともとの材の形状をとどめる。加工については、背面と底面を除く部分については全面的になされたものと考えられる。その特徴としては、第一に、目、鼻、口という顔面部分のつくりが立体的である点である。第二に、顔面以外の頭頂部から頭部側面については、縦軸方向の加工によって丁寧に整えられている。そのため、耳に該当する部位は表現されていない。こうした顔面部分とその他の部位との差異により、各部位のつくりが非常に明瞭であることが加工の全体的特徴として挙げられる。

操作用の軸棒を挿すための軸孔は2箇所所有。2つの軸孔は径5mmであり、それぞれに片方の目から底面にかけて貫通するかたちとなる。底面における軸孔の位置は、中央付近である一方で、右眼に通ずる孔は右目寄りに、左目に通ずる孔は左眼寄りとなる。加納は軸孔が2箇所存在することについて、「一本が折れ、穴を開け直して、もう一本、入れ直している」⁽⁶⁾と解釈した。しかし片方の軸孔のみに棒を挿す状態では、軸がかしらに対して平



面的にみて斜めとなる。軸棒を2本同時に使用した場合、その交差した部分を握って操ることが可能となり、操作上の安定性はむしろ増すのではなからうか。

これらとは別の小孔が、背面近くの頭頂部から背面にかけて2箇所設けられる。これについては、操作時にかぶせる布をくくりつけるための孔であると、加納による推定がなされている。現状において小孔は、明瞭な穴（空隙）をなすものではないため、少なくとも紐を通しうるものとはいえない。針で糸を通したか、針状のものを差し込むことで覆いとかしらを固定したものと考える。

② 鹿田遺跡出土猫形木製品の概要

次に鹿田遺跡で出土した猫形木製品の特徴をみてみ

よう（図43-2）。樹種についてはウツギ属の木瘤であると同定された（本書4章1節）。大きさは、前後長6.3cm、左右幅6.4cm、高さ4.5cmを測り、前後長・左右幅がほぼ等しくなる。平面的形状については、木瘤の本来の形状と、加工によって鼻先に向かって尖る形となる。

外観については、必ずしも肉感的な表現とはいえない。これは、加工が稚拙である面も大きいものと思われるが、加工が明瞭な部分と、素材の形状が生かされた部分の双方が存在することにもよるものと考えられる。明確に刃物の工具痕跡が残存するのは、両眼、両耳、右鼻部分、底面の後頭部寄り部分である。特にもっとも細かな加工がなされているのは左眼の部分である。底面加工を除けば、これらの加工は、形状の作り出すための加工と考えられる。底面の加工については一部に留まるものであり、



図43 円覚寺門前例と鹿田例

実測図：1. 円覚寺門前例（筆者原図）、2. 鹿田例（山本悦世原図）
写真：円覚寺門前例（筆者撮影） 縮尺任意 a. 上面 b. 底面・背面
c. 前面 d. 左側面

木瘤を幹から切断した際の痕跡の可能性も想定される。一方で、刃物による明瞭な加工痕が認めら得ない左右側面は、瘤の形状をいかして製品の形としたものと考えられる。

樹種同定の成果として、本資料にみられる2箇所の孔が人為的加工ではなくウツギ属の髓の消失によって自然に生じたものであることが判明した点は重要である⁷⁾。孔としては、一つは右鼻～下面に斜めに貫通するもの（孔a）と、後頭部～鼻付近までのびる非貫通のもの（孔b）が存在する。孔aは径5mm、孔bは径6mmを測る。孔の方向については、孔aが斜め、孔bがほぼ水平となる。X線撮影の結果、孔bの先端が孔a側に接するように屈折することが判明した⁸⁾。現状において、2つの孔は製品中心部でつながるようには観察されないため、髓は完全には消失しなかったものと推測される。

③ 円覚寺門前例と鹿田例の比較

ここで、鹿田例と円覚寺門前例とを比較してみると、類似点と相違点がみとれる(表3)。まず類似点については、大きさと軸穴の数が挙げられる。一方、相違点としては、製品となる前の素材の形態と、加工の状況、軸穴以外の小孔の有無である。こうした類似点と相違点について、円覚寺門前例を基準とした場合、次の諸点に着目しうる。

まず類似点として挙げた属性は、いずれも操り人形の使用方法ないしは操作法と密接に関連するものと考えられる。両者でほぼ等しい数値となる大きさという属性については、資料の形状を規定するもっとも基本的要素といえる。すなわち、両者ともに、前後長・左右幅が近似し、かつ鼻先に向かってすぼまる形状をなすのは、盛岡市の鈴江家に伝わる前後長が長い「キツネ」の人形かしらとは異なり、これらが「ネコ」の形を表現した製品であるためと考えられる。また、両者の大きさがきわめて類似するのは、「首掛け廻し」とされるかしらの使用法の点で、共通性がみられることを示唆する。また、軸穴については、資料の使用法および操作法と関連する属性である。鹿田例において軸穴が2箇所あり、かつ資料の前面から底面にかけて存在することは、円覚寺門前例と共通する。円覚寺門前例において、軸穴の付け替えによって数が増えたと解釈された軸穴の数についても、鹿田例を踏まえると、操作の安定性を確保するため元々2箇所の軸穴が設けられていたことが推定される。

では相違点はどうか。素材の形態については主に製作方法にかかわる属性といえる。加工の状況については、使用時の機能と製作方法の双方にかかわる。加工によって肉感的表現を有する円覚寺門前例の方が、鹿田例よりも上演時の視覚的効果が高いことは想像にかたくない。一方、軸孔以外の小孔の有無に関しては、覆いとめた痕跡とみる場合、主に使用時の属性と考えられる。

このように類似点と相違点を整理するならば、鹿田例については類似点で示したように円覚寺門前例と同様の操り人形となりうる機能的要素が確実に認められよう。したがって、鹿田例もまた円覚寺門前遺跡出土の「山猫木偶」の一種と評価することが妥当と考える⁹⁾。その一方で、加工の程度に両者で差があり、それにより外観に違いが生じている点についても注意すべきである。挙げうる解釈としては、使用に耐えられる形状とみるか、実際には使用されなかった(未成品という評価も含む)とみなすかという二者が考えられる。しかしこれについては、類例の増加を待ち、比較を経てから結論づけるべき課題でもある。本稿では、円覚寺門前例の類例として鹿田例を位置づけることを確認するとともに、製品/未成品の双方の可能性を念頭におきたい。

鹿田遺跡の猫形木製品を製作し、所有したのは誰であろうか。本製品が操り人形としての機能的要素を有する点に加え、その希少性から考えたとしても、もともとは芸能民である傀儡によって製作され、所有されていたものとする解釈がもっとも妥当なものとする。加工の度合いを重視し、定住民による模倣品とする見方も不可能とはいえないが、多分に現代的感覚・印象を含む外観への評価のみでそうした解釈を採用することは説得的なものとなりえないだろう。

(3) 井戸祭祀と猫形木製品

なぜ鹿田遺跡の猫形木製品は、井戸に投棄されるに至ったのであろうか。井戸の廃絶過程に関する知見を基礎に、その契機について考えてみたい。猫形木製品は井戸1の埋土中から出土した。井戸1は上層を土坑と近世・近代の入り江状遺構によって失っていたため、井戸全体の状況は不明である。しかしながら、遺物は層位的に良好な状態で出土した(図44、表4)。

土層の堆積および遺物出土状況から、井戸の廃絶過程については、次のような第1～3の段階に区分可能と考

表3 円覚寺門前例と鹿田例の比較

属性		円覚寺門前遺跡例	鹿田例
大きさ (cm)	前後長	6.6	6.3
	左右幅	6.7	6.3
	高さ	4.4	4.6
樹種		-	ウツギ属
素材		角材or板目材	木瘤
加工		全面的	部分的
軸孔		2箇所	2箇所
小孔		2箇所	なし
時期		14世紀後半	11世紀中頃

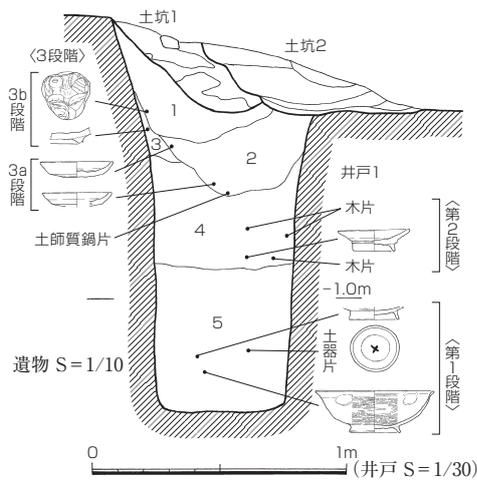


図44 井戸1の土層と出土遺物

表4 井戸1における祭祀の段階と出土遺物

段階	層位	椀	台皿	皿	鍋	台杯	木製品等
3b	1層					1	猫形木製品1
3a	2層			2	1		
2	3・4層		1				木片2
1	5層	2					

凡例 台皿：台付皿、台杯：台付杯 遺物に付した数字は数量を示す

える（第3段階をa・bに細分）。

第1段階 井戸底面に土師質土器椀2点を置き5層埋土を投入

第2段階 5層上面に土師質台付皿1点と木片を置き4層と3層の埋土を投入

第3段階 a) 皿・土師質鍋と2層埋土を投入
b) 猫形木製品・台付杯と1層を投入

井戸祭祀に関する鐘方正樹の研究を参照すれば¹⁰⁾、第2・3段階

の遺物については、明らかに湧水層よりも上位であるため、井戸廃絶時の祭祀に属するものと考えられる。一方、第1段階については、底面から15～22cm上の標高において2個の土師質土器椀が並列して出土した。標高-1.28m以下（井戸底面から18cm上）が湧水砂層であるため、これらの土器の位置はほぼ湧水層のレベルに等しい。したがってこれらが井戸構築時に置かれた可能性は低い。では井戸使用時に置かれた可能性はないだろうか。仮にこれらが井戸使用時に置かれたとしても、その時期については井戸廃絶段階に近いことになる。そのため第1段階の土器の置かれた時期については、井戸使用時と廃絶時の双方の可能性が考えられる。これらの第1段階の土器については、ひとつが完形で口縁部を上に向けた正位の状態であり、もうひとつが底部のみの個体で墨書により「×」ないしは「十」字が記された底面側を上に向けた逆位の状態でも出土した。こうした様相に関しては、井戸構築時の祭祀と評価される墨書を有する2個の土師器皿を合口とした事例¹¹⁾とは異なるものの、どの時点の行為かは別として意図的な祭祀の行為と認定しうる可能性がある。

当該井戸における祭祀行為の主体は誰であったのか。本井戸では祭祀の執行主体を示唆する情報は乏しいが、遺物出土状況で注目しうるのは、段階ごとに土器の器種が異なる点である。すなわち、第1段階は椀、第2段階は台付皿、第3 a段階は皿と鍋、第3 b段階は台付杯となる。こうした土器の器種にみられる差異は、行為の時期に違いが含まれる可能性を残しつつも、井戸祭祀が一連の行為として実施されたことを示唆する。したがって出土状況からみると、井戸祭祀の主体者は、一般論として想定しうる井戸の管理者のみならず、専門的呪術者の存在も考えられよう。猫形木製品もまた、偶発的要因で井戸に投棄されたと考えるよりも、むしろ祭祀行為の一部であったとする判断が妥当なものと考えられる。

井戸祭祀に関する以上の理解を基礎に、誰が猫形木製品を井戸に投入したかという問題を考えてみよう。前節で、猫形木製品がもともとは傀儡の所有物であるものと推定した。その前提に立つならば、考え得る解釈としては以下が挙げられる。

a) 傀儡が井戸祭祀の場に何らかの形で参与し、猫形木製品を投棄した。

b) 傀儡から猫形木製品を譲渡された第三者（呪術者・宗教者を含む）が井戸祭祀に参与し、それを投棄した。

人形劇の源流が、古代における巫覡の使用した神人形に求められ¹²⁾、『吾妻鏡』においても猿回しが縁起物として記述されるように¹³⁾、傀儡による人形を用いた芸能が呪術性や神事としての性格を有したことは想像に難くない。しかしながら、傀儡の芸能と井戸祭祀との結びつきへの疑問については、文献における裏付けも困難であり、積極的には肯定できない。a・bいずれもあくまで推測の域を出ないものであるが、注意したいのは両者の間で大きな違いが生じる場合がある点である。すなわち、bにおいて猫形木製品を譲渡された第三者が鹿田集落

(荘園)の居住者でなかった場合、傀儡が鹿田集落を訪れていた確証が乏しくなる。はたして傀儡は鹿田集落を訪れていたのだろうか。これは、鹿田遺跡の地域史的評価ともかかわる問題である。鹿田キャンパス内でみると、本井戸が廃絶された平安時代中頃は遺構が希少であり、10世紀の遺構の空白期間を経て、屋敷地が再び造られはじめる段階と考えられる¹⁴⁾。その一方、藤原摂関家の殿下渡領と推定され、交通の要衝に位置する鹿田遺跡は、傀儡が訪れる十分な素地を有するものとも考えられる。ここでは、猫形木製品がどのような過程を経て井戸に投棄されたかについては、なお未解決な部分もまた多いことを付記しておきたい。

(4) おわりに

以上、類例との比較検討、および井戸における出土状況の検討を行った。前者では鹿田遺跡の猫形木製品が傀儡の使用した操り人形と改めて評価した。後者では鹿田遺跡における傀儡の活動について、挙げうる解釈を提示した。本製品は、冒頭でも述べたようにこれまで確認されてきた動物形の操り人形の事例に比べても最も古い平安時代中頃の事例例として、傀儡の活動実態を知るための貴重な資料と考えられる。しかしながら、その活動の具体像については、なお隔靴搔痒の感は否めない。これは、物からその使用者を推定することそのものの困難に起因する面がある。残された課題の検討については、類例の増加を期待しながら他日を期したい。(光本 順)

謝辞

鹿田例の評価においては、加納克己氏に実物を実見いただいた上でご教示いただいたとともに、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター・山本悦世氏・岩崎志保氏からご教示を得た。鹿田例の樹種については、森林総合研究所・能城修一氏にご教示を得た。またそのX線撮影では岡山大学大学院保健学研究科放射線技術科学分野・丸山敏則氏にご助力を得た。円覚寺門前例の実見に際しては、鎌倉市教育委員会の米澤雅美氏にお世話になった。記して感謝申し上げます。

註

- (1) 岩崎志保「鹿田遺跡出土猿形木製品について」『鹿田遺跡』5 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、2007年、pp.171-176
- (2) 宗臺秀明・宗臺富貴子編『円覚寺門前遺跡』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告』21 平成16年度調査報告、鎌倉市教育委員会、2005年、pp.343-419
- (3) 註2文献、p.398
- (4) 加納克己「第1面出土の操り人形『山猫』木偶について」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告』21 平成16年度調査報告、鎌倉市教育委員会、2005年、pp.393-397
- (5) 鎌倉市教育委員会文化財部文化財課のご厚意により実見した。
- (6) 註4文献、p.394
- (7) 木材の樹種同定は、森林総合研究所・能城修一氏による。
- (8) X線写真撮影は、岡山大学大学院保健学研究科放射線技術科学分野・丸山敏則氏による。
- (9) なお、円覚寺門前例については加納(註4文献)によって「山猫木偶」という名称が与えられているが、これは江戸時代における「山猫廻し」という芸能との類似性を認めた上での呼称法と考えられる。鹿田例に関しては時代が平安時代に遡る点、資料から「山猫」か否かが判別しえない点を踏まえ、より中立的な意味合いで「猫形木製品」と呼称することとした。
- (10) 鐘方正樹『井戸の考古学』同成社、2003年。なお、鹿田遺跡の古代・中世の井戸祭祀に関する考察としては、以下が挙げられる。中村大介「鹿田遺跡の古代・中世の井戸について」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2005』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、2007年、pp.25-29
- (11) 註10鐘方文献、pp.157-158
- (12) 守屋毅「くぐつ」『国史大辞典』第4巻、吉川弘文館、1984年、p.731
- (13) 註1文献、pp.174-175
- (14) 山本悦世「中世の集落構造と推移—鹿田遺跡の場合—」『鹿田遺跡』5 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、2007年、pp.153-166

第4章 自然科学的分析

1. 鹿田遺跡第10・14・18次調査出土木製品の樹種同定

能 城 修 一 (森林総合研究所木材特性研究領域)

(1) はじめに

鹿田遺跡第10・14・18次調査B地点で出土した古代から近世(近代)の木製品類125点の樹種を報告する。内訳は、第10次調査が60点、第14次調査が44点、第18次調査B地点が21点である。

(2) 試料と方法

樹種同定は、木取りを観察した後、遺物から直接、片刃カミソリをもちいて横断面、接線断面、放射断面の切片を切り取り、それをガムクロラル(抱水クロラル50g、アラビアゴム粉末40g、グリセリン20ml、蒸留水50mlの混合物)で封入しておこなった。各プレパラートにはOKUF-1354~1371、1374~1480の番号を付して標本番号とした。標本は森林総合研究所木材標本庫に保管されている。

(3) 結 果

同定の不能の5点をのぞいて木製品類120点中には針葉樹7分類群と広葉樹17分類群の合計24分類群が認められた(表5)。以下には、各分類群の解剖学的な記載をおこない、代表的な標本の光学顕微鏡写真を載せて同定の根拠を示す。

1. モミ属 *Abies* マツ科 図45: 1 a-1 c (枝・幹材、OKUF-1393)

普通は樹脂道を持たない針葉樹材。早材仮道管の径は大きく、早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の量は多い。放射組織は柔細胞のみからなり、細胞壁には単壁孔が著しい。分野壁孔はごく小型のスギ型で1分野に2~4個。

2. ツガ属 *Tsuga* マツ科 図45: 2 a-2 c (枝・幹材、OKUF-1398)

普通は樹脂道を持たない針葉樹材。早材仮道管の径は大きく、早材から晩材への移行はやや急で、晩材の量は多い。放射組織は柔細胞と仮道管からなり、柔細胞の壁には単壁孔が著しい。分野壁孔はごく小型のヒノキ型で1分野に2~4個。

3. アカマツ *Pinus densiflora* Siebold et Zucc. マツ科 図45: 3 a-3 c (枝・幹材、OKUF-1356)

垂直・水平樹脂道を持つ針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材の量は多く、早材の終わりから晩材に垂直樹脂道が散在する。樹脂道の分泌細胞は薄壁で残りが悪い。放射組織は柔細胞と仮道管からなり、分野壁孔は窓状で1分野に1個、放射仮道管の水平壁には鋸歯が著しい。

4. クロマツ *Pinus thunbergii* Parl. マツ科 図45: 4 a-4 c (枝・幹材、OKUF-1359)

アカマツに似る針葉樹材で、放射仮道管の水平壁には低い鋸歯がある。

保存状態が悪く、アカマツともクロマツとも区別できないものはマツ属複雑管束亜属と同定した。

5. スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don スギ科 図45: 5 a-5 c (枝・幹材、OKUF-1402)

樹脂道を欠く針葉樹材。早材仮道管の径は大きく、早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の量は多い。黒褐色の樹脂をもつ樹脂細胞が早材の終わりから晩材に散在する。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は孔口が水平に開くごく大型のスギ型で1分野に2個。

6. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図45・46: 6 a-6 c (枝・幹材、OKUF-1374)

樹脂道を欠く針葉樹材。早材仮道管は小径で壁はやや厚く、早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の量は少

ない。黒褐色の樹脂をもつ樹脂細胞が早材の終わりに散在する。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は孔口がスリット状に開く中型のトウヒ型で1分野に2個。

7. アスナロ *Thujaopsis dolabrata* (L.f.) Siebold et Zucc. ヒノキ科 図46: 7 a、7 c (枝・幹材、OKUF-1376)
ヒノキに似る針葉樹材で、早材の仮道管の壁は薄く、晩材はやや量がある。分野壁孔はごく小型のヒノキ型で1分野に2~4個。

8. ノグルミ *Platycarya strobilacea* Siebold et Zucc. クルミ科 図46: 8 a-8 c (枝・幹材、OKUF-1464)
やや大型で丸い孤立道管が年輪のはじめに数列配列し、晩材では徐々に小型化した厚壁の道管が放射方向に2~数個複合して斜めに連なる傾向をみせて散在する環孔材。木部柔組織は2~4細胞幅の帯状。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で4細胞幅位、直立部にときに大型の結晶細胞をもつ。

9. クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus* sect. *Eucarpinus* カバノキ科 図46: 9 a-9 c (枝・幹材、OKUF-1472)
やや小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2~3個複合してやや密に散在する散孔材。木部柔組織は不規則な接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で3細胞幅位となり、しばしば集合状となる。

10. クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 図46: 10 a-10 c (枝・幹材、OKUF-1378)
ごく大型で丸い孤立道管が年輪のはじめに数列配列し、晩材では小型で薄壁の道管が火炎状に配列する環孔材。木部柔組織は晩材で不規則な接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性。

11. スタジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba ブナ科 図42: 11 a-11 b (枝・幹材、OKUF-1435)
中型~小型で丸い孤立道管が徐々に径を減じながら火炎状に配列する半環孔材。木部柔組織はいびつな接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性。

12. ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky ブナ科 図46: 12 a (枝・幹材、OKUF-1443)
やや大型で丸い孤立道管が年輪のはじめに数個ずつ放射方向にのびる塊をなし、晩材ではそこから小型で薄壁の孤立道管が火炎状に配列する環孔材。木部柔組織はいびつな接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性または集合状。

13. コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図47: 13 a-13 b (枝・幹材、OKUF-1477)
大型で丸い孤立道管が年輪のはじめに2~3列並び、晩材ではやや小型で丸い厚壁の道管が放射方向に配列する環孔材。木部柔組織はいびつな接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、単列のものと大型の複合状のものからなる。

14. コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図47: 14 a (枝・幹材、OKUF-1425)
コナラ属クヌギ節に似る環孔材で、晩材の道管は薄壁でごく小型となり、火炎状に配列する。

15. クワ属 *Morus* クワ科 図47: 15 a-15 c (枝・幹材、OKUF-1361)
大型で丸い道管が単独あるいは2~3個複合して年輪のはじめに数列配列し、晩材では徐々に小型化した道管が数個かたまって斜めに連なる傾向をみせて散在する環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は上下端の1~2列が直立する異性で6細胞幅位。

16. クスノキ科 *Lauraceae* クスノキ科 図47: 16 a-16 c (枝・幹材、OKUF-1467)
やや小型で厚壁のやや角張った道管が単独あるいは放射方向に2~3個複合して疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で2細胞幅位。

17. サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 図47: 17 a-17 c (枝・幹材、OKUF-1459)
ごく小型で薄壁の孤立道管が密に散在する散孔材。道管の穿孔は30本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は単列異性。

18. ウツギ属 *Deutzia* ユキノシタ科 図47: 18 a-18 c (枝・幹材、OKUF-1354)
小型でやや角張った孤立道管が密に散在する散孔材。道管の穿孔は30~40本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は径の大きな細胞で構成され、異性で6細胞幅位となり鞘細胞をもつ。

19. サクラ属 (広義) Prunus s.l. バラ科 図47・48:19 a、19 c (枝・幹材、OKUF-1417)

小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2~3個複合して密に散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で3細胞幅位。

20. カエデ属 Acer カエデ科 図48:20 a-20 c (枝・幹材、OKUF-1455)

やや小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2個複合して疎らに散在する散孔材。木繊維は雲紋状を呈する。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で3細胞幅位。

21. アワブキ Meliosma myriantha Siebold et Zucc. アワブキ科 図48:21 a-21 c (枝・幹材、OKUF-1454)

中型でやや角張った厚壁の孤立道管がときに2~3個放射方向に連なって疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は周囲状。道管の穿孔は10本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は異性で3細胞幅位、高さは3mm以上となる。

22. モチノキ属 Ilex モチノキ科 図48:22 a-22 c (枝・幹材、OKUF-1430)

ごく小型で薄壁の道管が単独あるいは放射方向に2~3個複合して、放射方向に連なる傾向をみせて疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は10~20本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は異性で4細胞幅位。

23. イボタノキ属 Ligustrum モクセイ科 図48:23 a-23 c (枝・幹材、OKUF-1474)

やや小型で丸い孤立道管が年輪のはじめに1列に断続的に配列し、その後は小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2個複合して密に散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で2細胞幅。

24. クサギ Clerodendrum trichotomum Thunb. クマツヅラ科 図48:24 a-24 c (枝・幹材、OKUF-1463)

中型で丸い道管が単独あるいは2~3個複合して年輪のはじめに3列ほど配列し、晩材では小型で厚壁の道管がしばしば2~4個放射方向に複合して散在する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は上下端の1列が直立する異性で3細胞幅。

(4) 考 察

鹿田遺跡第10・14・18次調査B地点で出土した木製品のうち、樹種が多いのは第10次調査で出土した古代の杭であり、14分類群が認められた(表5)。杭は1点を除いて広葉樹であり、クスギ節が半分を占め、ノグルミとクスノキ科、イヌシデ節、イボタノキがそれに続く。古代では他にヒノキ製の祭祀具1点と板が出土した。

第14次調査で出土した古代~中世の木製品類ではスギの曲物と板、加工材が多く、ヒノキとアカマツがそれに次ぐ。

第18次調査B地点で出土した古代あるいは近世後半~近代の木製品類では、アカマツとスギ、ヒノキが多い傾向が認められた。

表5 鹿田遺跡第10・14・18次B地点で出土した木製品の樹種

樹種	鹿田10次				鹿田14次										鹿田18次B地点						総計						
	古代	中世(鎌倉時代)	中世(鎌倉時代)	中世後半	近世	(空白)	11世紀中頃	近世後半~近代	総計																		
	杭	祭祀具	板	棒	加工材	曲物	杭	板	部材	加工材	曲物	杭	食事具	他製品	板	漆碗	食事具	加工材	曲物	他製品	(空白)	加工材	杭	(空白)			
モミ属			3	1																					4		
ツガ属			1																						1		
アカマツ	1									1									2						12		
クロマツ																									1		
マツ属複雑管束亜属																									3		
スギ		1			1	1	9	2	8	1					1						1				31		
ヒノキ		1	1				2		1								1				1				10		
アスナロ											1														1		
ノグルミ	6																								6		
クマシデ属イヌシデ節	2																								2		
クリ												1				1									2		
スダジイ	1																								1		
ツブラジイ	2																								2		
コナラ属クスギ節	30																								30		
コナラ属コナラ節	1																								1		
クワ属																									1		
クスノキ科	3																								3		
サカキ	1																								1		
ウツギ属																									1		
サクラ属																									1		
カエデ属	1												1												1		
アワブキ	1																								1		
モチノキ属	1																								1		
イボタノキ属	2																								2		
クサギ	1																								1		
×	4		1																						5		
総計	57	1	2	5	1	2	1	12	2	2	9	1	1	1	1	1	1	1	2	2	1	1	2	12	2	1	125

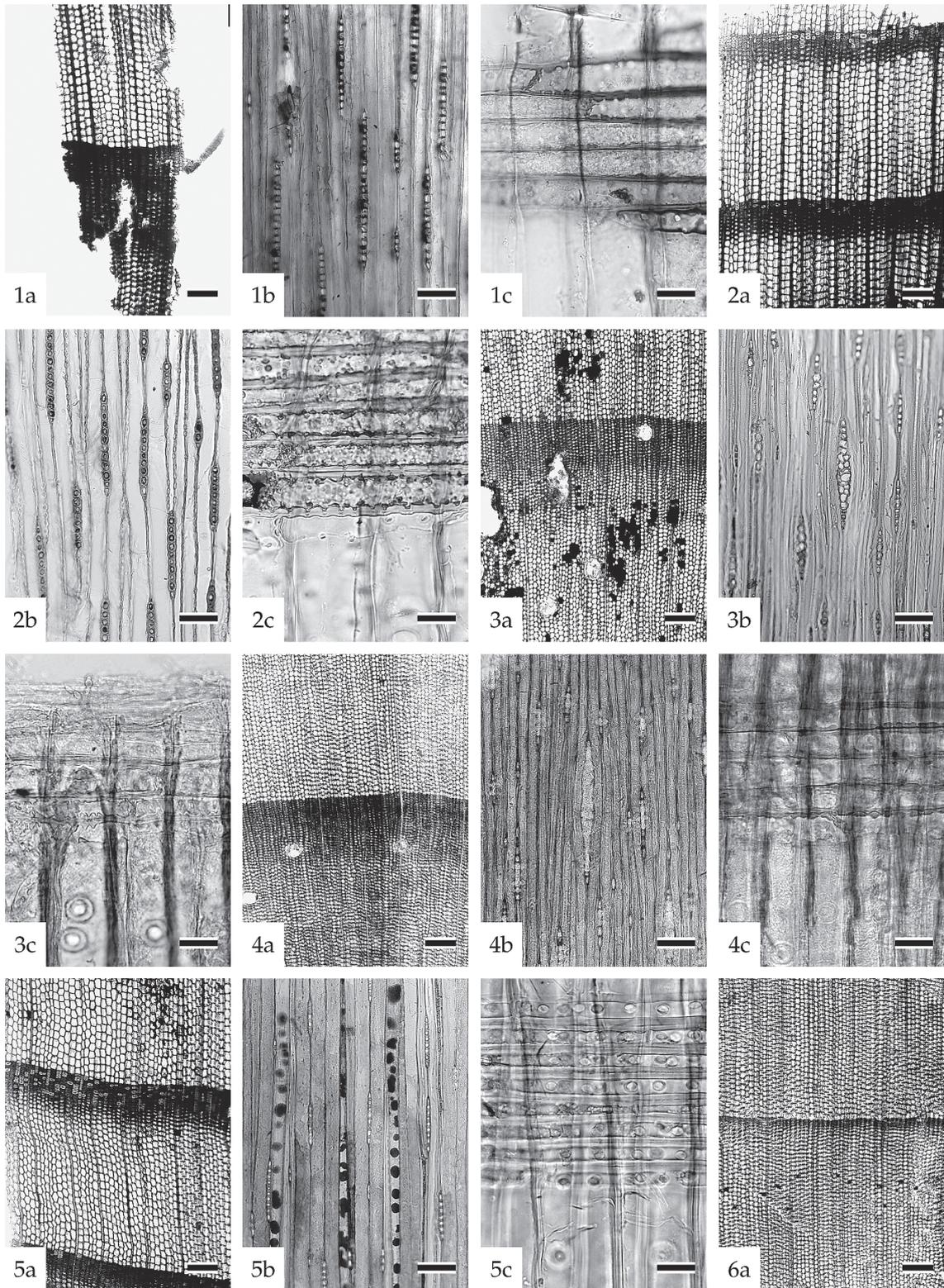


図45 鹿田遺跡第10・14・18次調査で出土した木材の顕微鏡写真(1)

1a-1c：モミ属（枝・幹材、OKUF-1393）、2a-2c：ツガ属（枝・幹材、OKUF-1398）、3a-3c：アカマツ（枝・幹材、OKUF-1356）、4a-4c：クロマツ（枝・幹材、OKUF-1359）、5a-5c：スギ（枝・幹材、OKUF-1402）、6a：ヒノキ（枝・幹材、OKUF-1374）。a：横断面（スケール=200 μ m）、b：接線断面（スケール=100 μ m）、c：放射断面（スケール=25 μ m）。

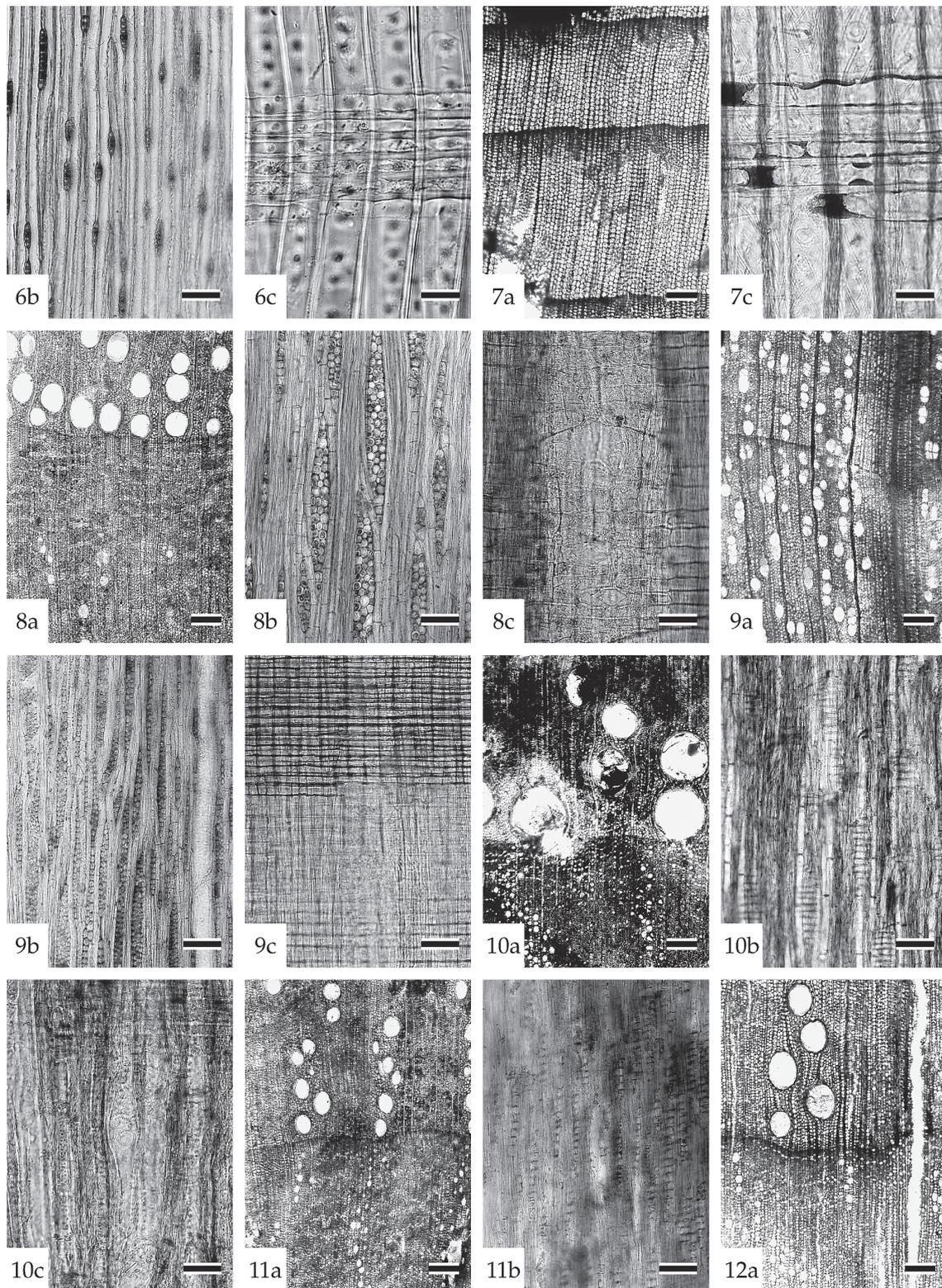


図46 鹿田遺跡第10・14・18次調査で出土した木材の顕微鏡写真(2)

6b-6c：ヒノキ（枝・幹材、OKUF-1374）、7a、7c：アスナロ（枝・幹材、OKUF-1376）、8a-8c：ノグルミ（枝・幹材、OKUF-1464）、9a-9c：クマシデ属イヌシデ節（枝・幹材、OKUF-1472）、10a-10c：クリ（枝・幹材、OKUF-1378）、11a-11b：スダジイ（枝・幹材、OKUF-1435）、12a：ツブラジイ（枝・幹材、OKUF-1443）。a：横断面（スケール=200 μ m）、b：接線断面（スケール=100 μ m）、c：放射断面（スケール=25（6c、7c）、50（8c、9c、10c） μ m）。

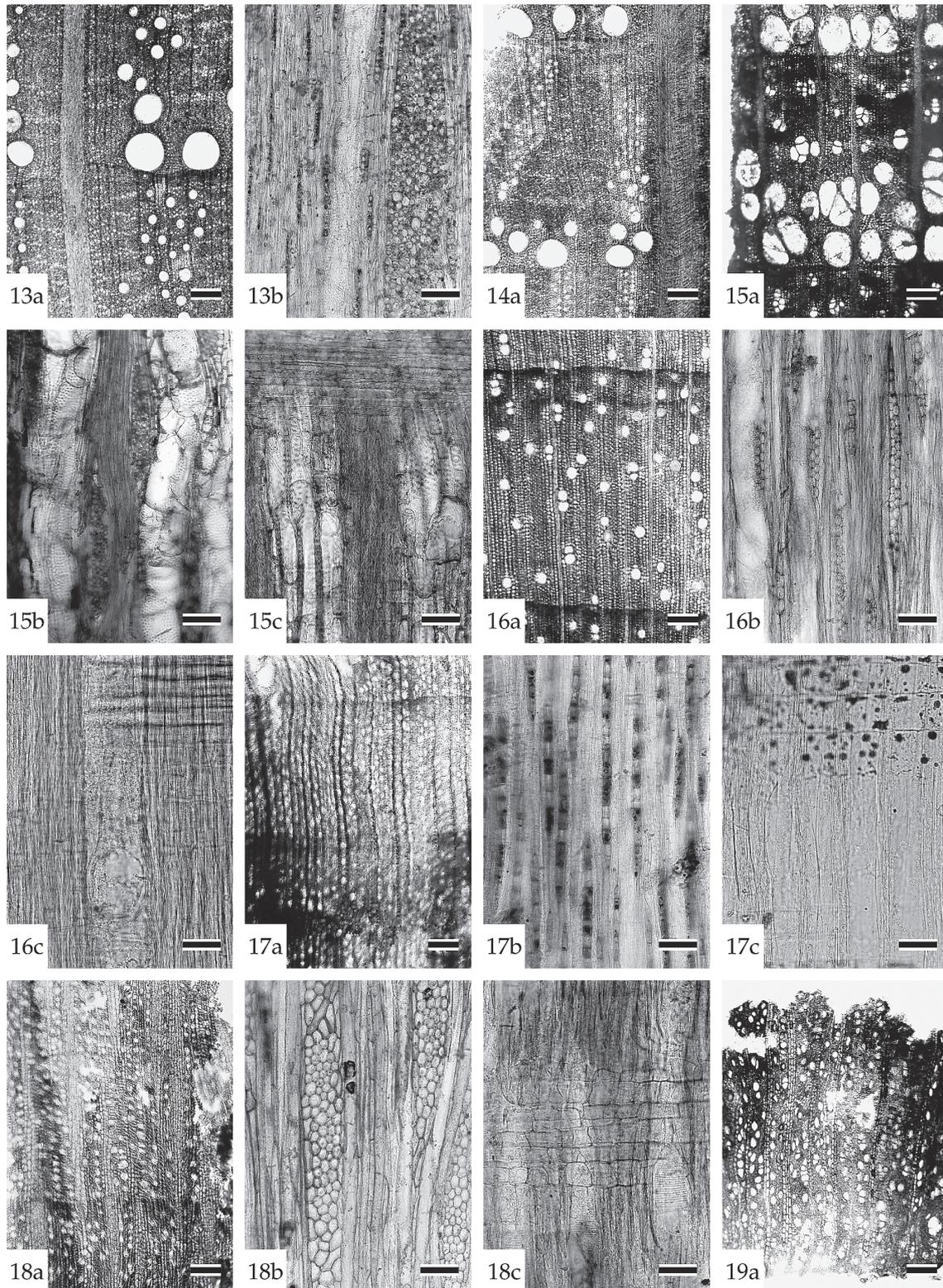


図47 鹿田遺跡第10・14・18次調査で出土した木材の顕微鏡写真(3)

13a-13b: コナラ属クヌギ節 (枝・幹材, OKUF-1477)、14a: コナラ属コナラ節 (枝・幹材, OKUF-1425)、
 15a-15c: クワ属 (枝・幹材, OKUF-1361)、16a-16c: クスノキ科 (枝・幹材, OKUF-1467)、17a-17c: サカキ
 (枝・幹材, OKUF-1459)、18a-18c: ウツギ属 (枝・幹材, OKUF-1354)、19a: サクラ属 (広義) (枝・幹材、
 OKUF-1417). a: 横断面 (スケール=200 μ m)、b: 接線断面 (スケール=100 μ m)、c: 放射断面 (スケール=50 μ m).

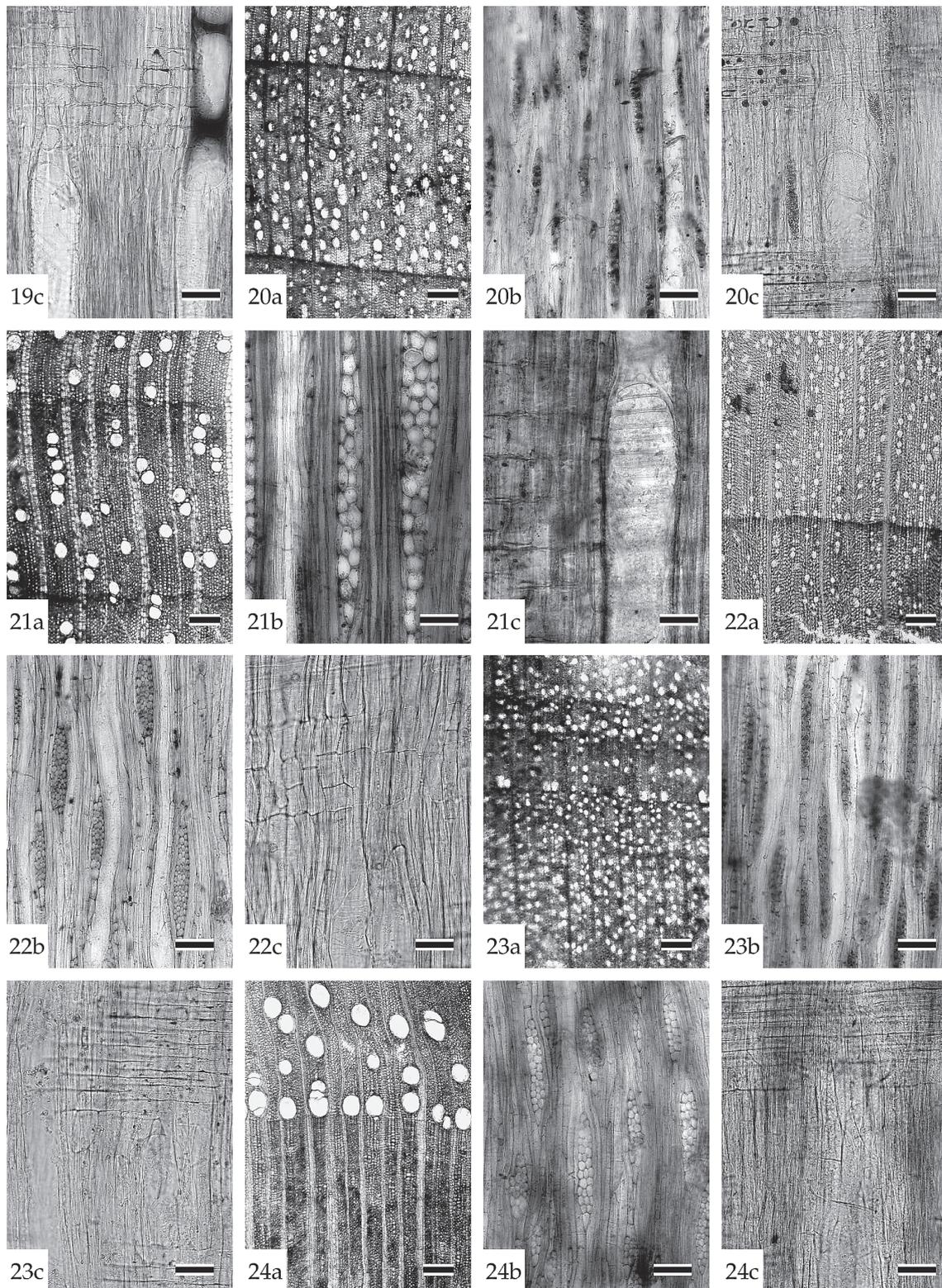


図48 鹿田遺跡第10・14・18次調査で出土した木材の顕微鏡写真(4)

19c：サクラ属（広義）（枝・幹材、OKUF-1417）、20a-20c：カエデ属（枝・幹材、OKUF-1455）、21a-21c：ア
 ワブキ（枝・幹材、OKUF-1454）、22a-22c：モチノキ属（枝・幹材、OKUF-1430）、23a-23c：イボタノキ属
 （枝・幹材、OKUF-1474）、24a-24c：クサギ（枝・幹材、OKUF-1463）。a：横断面（スケール=200 μ m）、b：接
 線断面（スケール=100 μ m）、c：放射断面（スケール=50 μ m）。

2. 鹿田遺跡第10次調査B地点出土人骨の同定

橋本裕子（京都大学 霊長類研究所）

(1) 緒言

本遺跡は弥生時代中期後半以降近世にいたる複合遺跡である。人骨が出土した時期は、河道南側の調査地点で、橋脚遺構が確認された河道と同一であることから奈良時代末～平安時代前半の可能性がある。全国でも奈良・平安時代の人骨出土例が極めて少ないことから、本遺跡の年代が奈良・平安時代のものであるならば非常に貴重な人骨資料である。

(2) 人骨所見

出土した人骨は後頭骨の一部のみである。骨質は薄く成人の様相を示さない。ラムダ縫合は明瞭で、その状態は外板・内板とも開放状態（プロカの0）である。縫合の形状から、小泉門は閉鎖している段階である。小泉門は大泉門より閉鎖が早く現代では生後6カ月から1年で閉鎖する。ただ江戸時代では3～4歳まで開放している症例があるため、正確な年齢を推定することは出来ない。骨質は薄く、筆者の経験則だが、10歳より若い年齢であることは疑いようもない。そこで、本人骨の年齢は3歳以上10歳以下の子供であると推測した。



図49 鹿田遺跡第10次調査B地点出土人骨

また、ラムダ縫合のラインを確認すると、矢状縫合とラムダ縫合の交点（ラムダ）が確認できず、半円状に後頭骨方向へ縫合線が確認できる。そのため本人骨はインカ骨であることが分かる。日本でのインカ骨の出現頻度は高くはないが、いずれの時代にも確認されているため、本人骨も頭蓋骨の非計測的特徴の一つであるインカ骨が確認できるというに留める。

(3) 結語

本遺跡から出土した人骨は、後頭骨の一部のみであった。縫合の状態や骨の厚さから、本人骨は3歳以上10歳以下の子供で性別は不明である。また、頭蓋骨の非計測的特徴の一つであるインカ骨が確認できた。

後頭骨は3つに割れているが、それぞれ接合することが確認できている。しかし、本人骨は小児骨で骨質が薄く、接着剤で接着した状態で保存をすると、近い将来により大きく割れてしまう可能性がある。そのため、あえて接合をせずに保存の選択をしたことを最後に記載しておく。

謝辞 本資料を観察するにあたり京都大学霊長類研究所進化形態分野の毛利俊雄博士に御教示を頂きました。

参考文献

- 橋本裕子・馬場悠男 2002.3 「逆水西遺跡（逆水遺跡 a 地点）出土人骨」『千葉県八千代市内出土人骨分析委託報告書Ⅱ』八千代市教育委員会 pp.27-28
- Brothwell D. R. 1981. *Digging up Bones*. Cornell University press. 208pp.
- White T. D. 1991. *Human Osteology*. Academic Press, Inc. 455pp.

第5章 結 語

第10次調査と第18次調査B・C地点は、いずれも小規模な発掘調査であったが、地形復元や平安時代の集落・河道の状況について成果を得ることができた。以下に時期毎にまとめて結語としたい。

弥生時代

鹿田遺跡では、弥生時代中期～後期に外来診療棟を中心とする一帯に集落の居住域が形成される。これまでの調査成果によりキャンパスの北側～北西側に河道が入っており、これによって集落域の北端が決められることがわかってきている。本報告の調査では、キャンパスの南東に向かって低位部となっていることが確認された。本報告のうち、第10次調査A地点・第18次調査B地点・C地点は鹿田遺跡の東端の、集落の中心的な居住域からは南東に離れた位置にあたる。これらの地点の中で第10次調査A地点・第18次調査C地点では同時期の遺構・遺物がわずかに確認されるが、ともに希薄な状況であり、集落の端部の状況を示していると考えられる。

平安時代

第10次調査B地点には、第3次調査で判明した9～10世紀代の河道が存在していることがわかった。河道内では、第3次調査C地点で検出された橋脚遺構付近の杭列と、南北の並びやまとまりが一連となる杭群が見つまっている。橋脚遺構と杭群とがどのように関連するのか、同時期の類例も考え合わせて、構造の検討を進める必要がある。河道出土遺物のうち、墨書土器や転用硯などの文字に関係する遺物も、第3・4次調査地点との関係性を窺わせるものである。同時期の遺構は見つっていないが、この周辺に何らかの施設の存在を窺わせる点で注目できよう。また今回、河道の埋没過程がある程度押さえられた点も重要である。

平安時代については第18次調査B地点で検出された11世紀代の井戸が注目される。この時期の屋敷地の範囲が、より東にひろがりがあったことがわかる成果となった。また本井戸出土の猫形木製品は、出土品としては最古の操り人形のかしらと考えられる（第3章第4節参照）。13世紀代の絵図にも描かれたような、人びとや物資の往来を窺わせる状況を裏付ける特徴的な遺物といえる。また同遺構出土の吉備系土師器椀は初源期の資料として注目されるものであり、井戸・土坑の廃棄過程を詳細に分析できたことは重要な成果である。その他に窯道具・炉壁といった遺物から、集落周辺での手工業生産の可能性が現実性を増してきた。こうした遺構・遺物の状況は鹿田遺跡の性格、また「鹿田荘」との関連を検討する上で重要である。

江戸時代

この時期、鹿田遺跡一帯は耕作地へと整備が進む一方、近年の調査では一部で集落域の存在もわかってきている。第18次調査B地点では、江戸時代に入り江状遺構が形成されており、同時期の用水・河川を利用した交通や、それによる物資の流通等も想起される。これまで農村と想定されていた地点において、微高地をカットして船着き場とも考えられる遺構を構築するといった大規模な改変を行っていることは、該期の物流の重要性を考えるうえで注目される。

現在、鹿田遺跡では第24次調査までを実施し、新資料が蓄積されている。こうした資料を加え、また本報告で考察まで及ばなかった問題を含めたうえで、さらに検討を進めていきたい。

図版1 第10次調査 出土遺物 (土器・陶磁器ほか)



1



2

(S=1/3)

A地点 土坑1 (図6)



3



2



1



4

A地点 溝1 (図7)



T1
(S=1/2)



5



6



7



M1
(S=1/1)

T1・M1以外はS=1/3



1



2



8



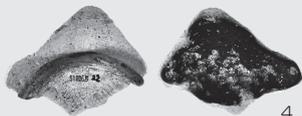
7



3



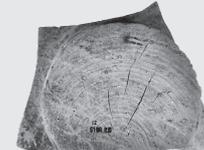
9



4



10



9



1

(S=1/3)



2
(S=1/3)



6



5



11



T2

(S=1/2)

T2以外はS=1/3

B地点 河道 (図13)

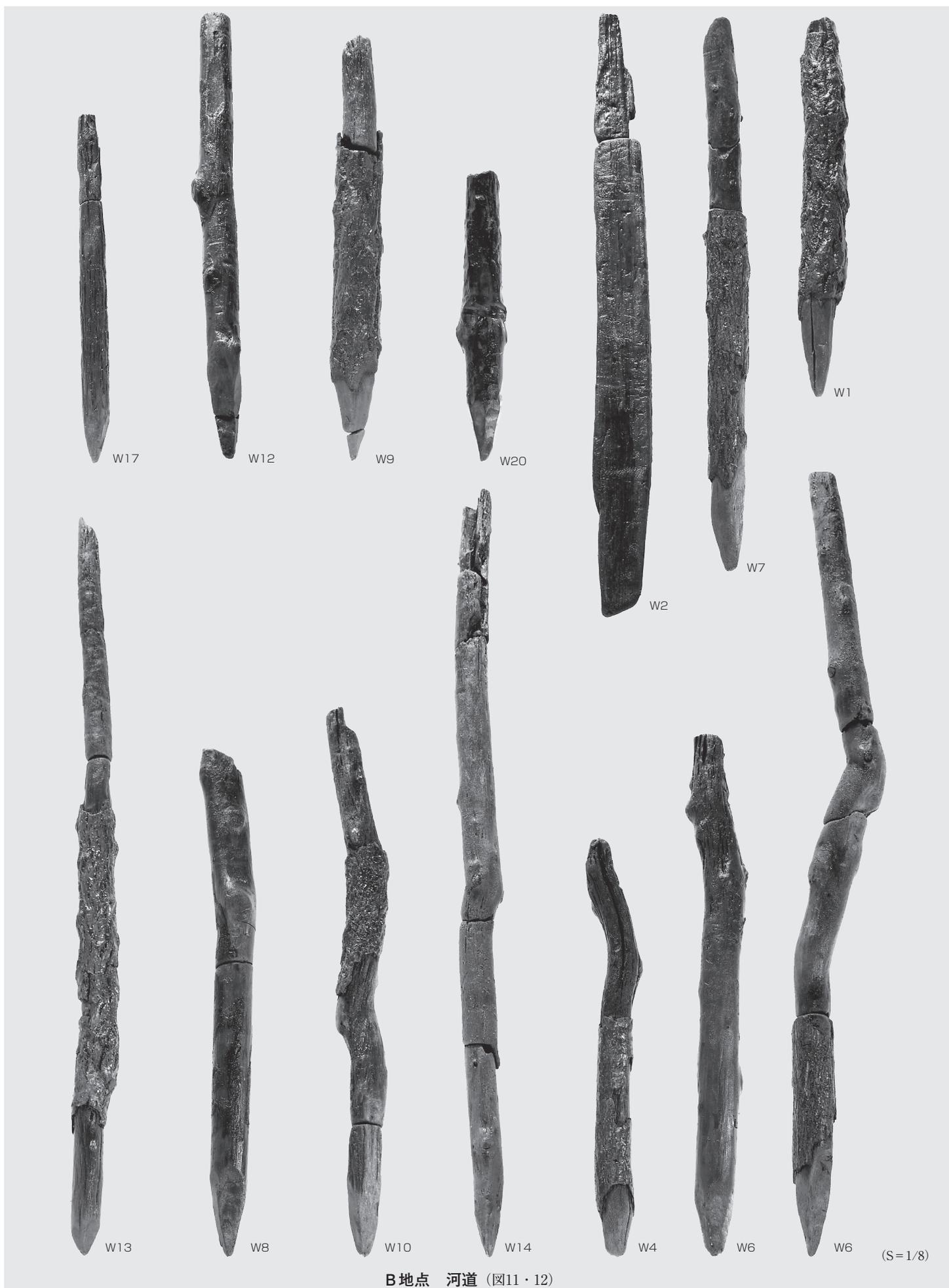


T3

(S=1/2)

包含層 (図14)

図版2 第10次調査 出土遺物2 (木製品)



B地点 河道 (図11・12)

(S=1/8)

図版3 第18次調査B地点 出土遺物1 (土器・陶磁器ほか)

〈平安時代〉



土坑1 (図21)



井戸1 (図21)



窯道具



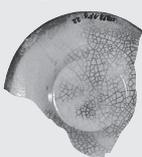
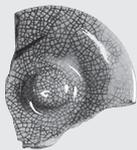
炉壁

土坑2 (図24)

(外面) (内面)

(S=1/3)

〈近世・近代〉



6



7



8



9

河道 (図29)

(S=1/3)

図版4 第18次調査B地点 出土遺物2 (土器・土製品・瓦・石器)

〈近世・近代〉



10 (S=1/3)



T1
(S=1/2)



11



12



13



S1 (S=1/3)



14



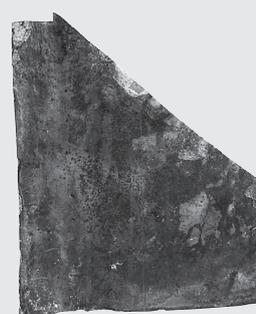
15



18

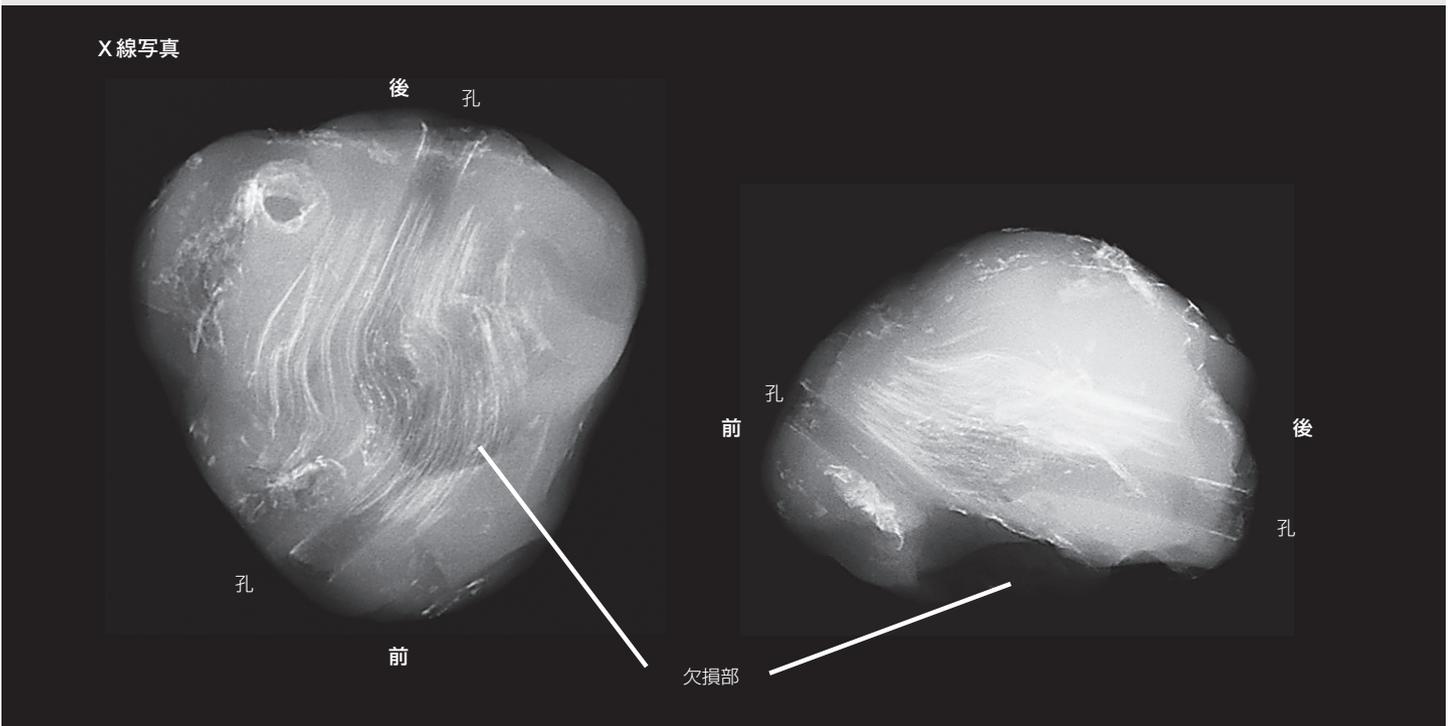
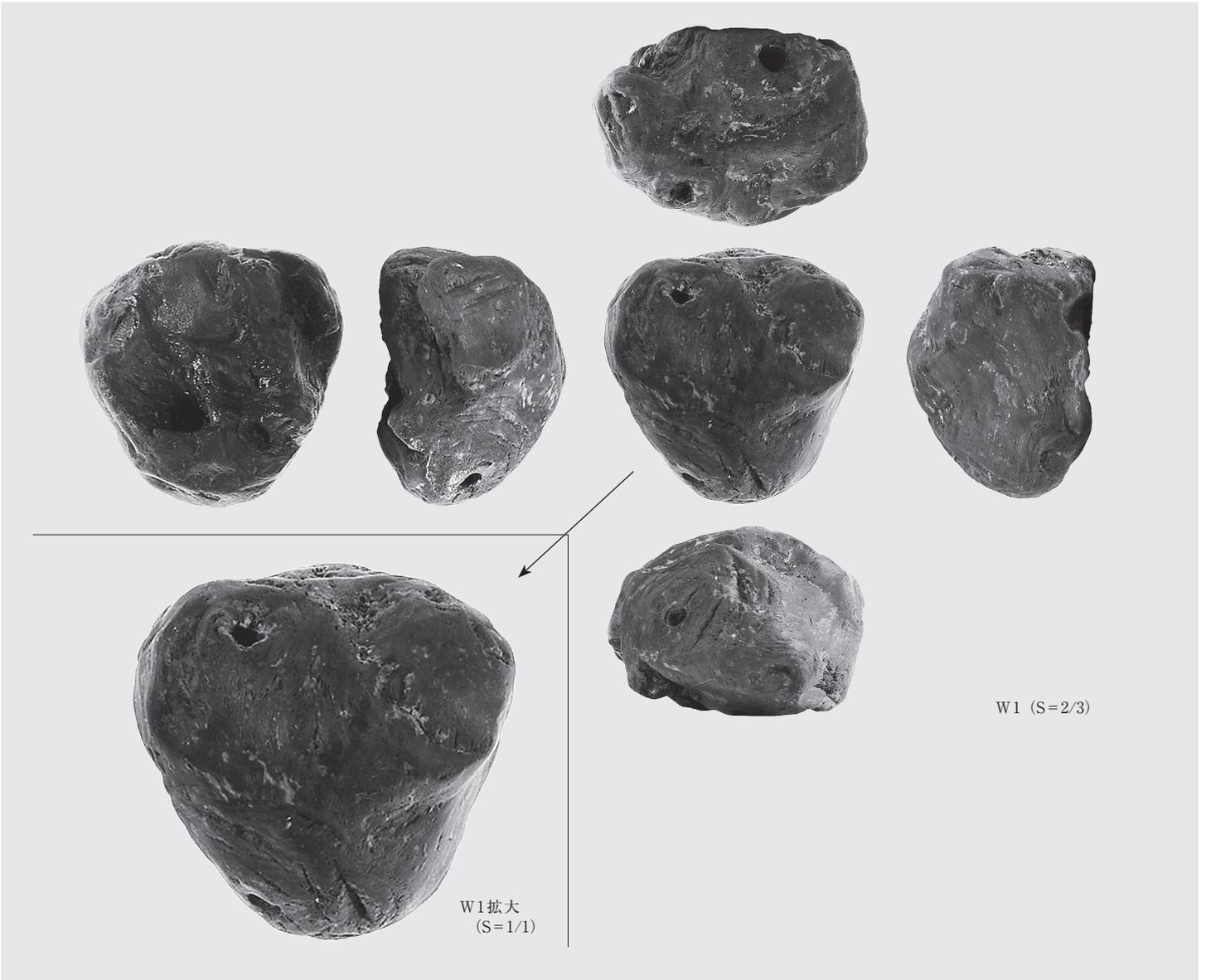


23



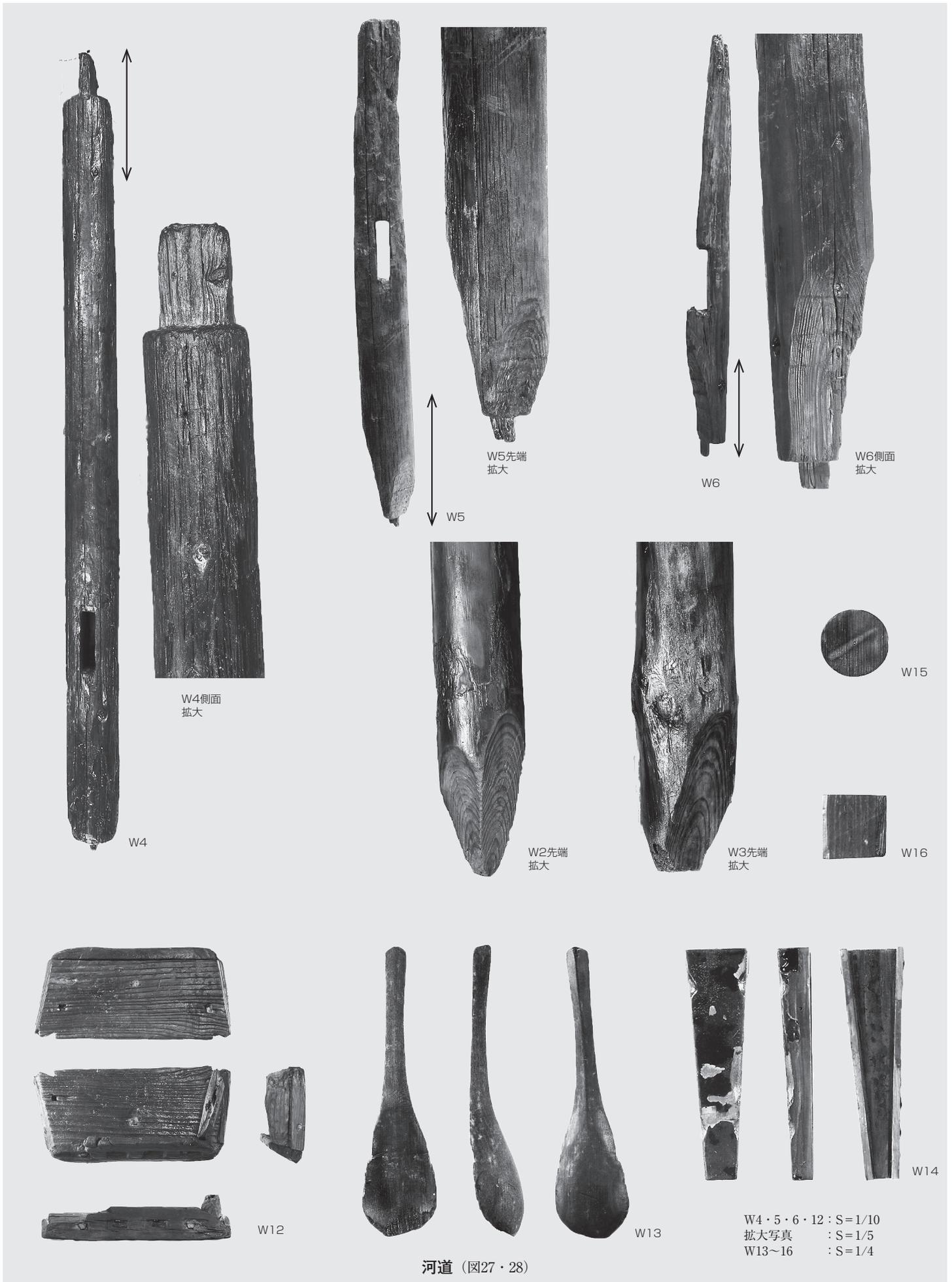
11~15・18・23 : S=1/5

河道 (図29~31)



井戸1 (図22)

図版6 第18次調査B地点 出土遺物4 (河道出土木製品)



報告書抄録

ふりがな	おかやまだいがくこうないせきはくつちょうさほうこく だい28さつ しかたいせき 7							
書名	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第28冊 鹿田遺跡 7							
編著者名	野崎貴博(編著)・光本 順(編著)・岩崎志保(編著)・能城修一・橋本裕子							
編集機関	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒700-8530 岡山県岡山市北区津島中三丁目1番1号							
発行年月日	2013(平成25)年3月21日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	世界測地系	世界測地系			
しかたいせきだい 鹿田遺跡第10 じちようさ ちてん 次調査A地点	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 きたくしかたちよう 北区鹿田町2 ちようめ ぼん ごと 丁目5番1号	33201	県2288	34度38分 59秒	133度55分 15秒	19990621) 0706	40.2㎡	共同溝建 設工事
しかたいせきだい 鹿田遺跡第10 じちようさ ちてん 次調査B地点				34度38分 55秒	133度55分 13秒	19990507) 0520、 0906) 1014	206.9㎡	
しかたいせきだい 鹿田遺跡第18 じちようさ ちてん 次調査B地点				34度38分 59秒	133度55分 16秒	20071016) 1101	43.2㎡	病棟建設 関連工事
しかたいせきだい 鹿田遺跡第18 じちようさ ちてん 次調査C地点				34度38分 57秒	133度55分 16秒	20071227) 20080116	56.0㎡	
所収遺跡	種別	主な時代			主な遺物		特記事項	
しかたいせきだい 鹿田遺跡第10 じちようさ ちてん 次調査A地点	土坑	弥生時代			弥生土器			
	溝	江戸時代			陶磁器・瓦・土製品・銭			
しかたいせきだい 鹿田遺跡第10 じちようさ ちてん 次調査B地点	河道	平安時代			土師器・須恵器・黒色土器・ 土錘・杭			
しかたいせきだい 鹿田遺跡第18 じちようさ ちてん 次調査B地点	井戸 土坑	平安時代			猫形木製品 土師質土器・瓦器・黒色土器・ 窯道具			
	入り江状遺構 河道	江戸時代			陶磁器・瓦			
しかたいせきだい 鹿田遺跡第18 じちようさ ちてん 次調査C地点	土坑	弥生時代						
	溝 小溝群	鎌倉時代			土師質土器・土錘			

2013年3月21日発行

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第28冊

鹿田遺跡 7

編集・発行 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

岡山市北区津島中三丁目1番1号

(086) 251-7290

印刷 西尾総合印刷